



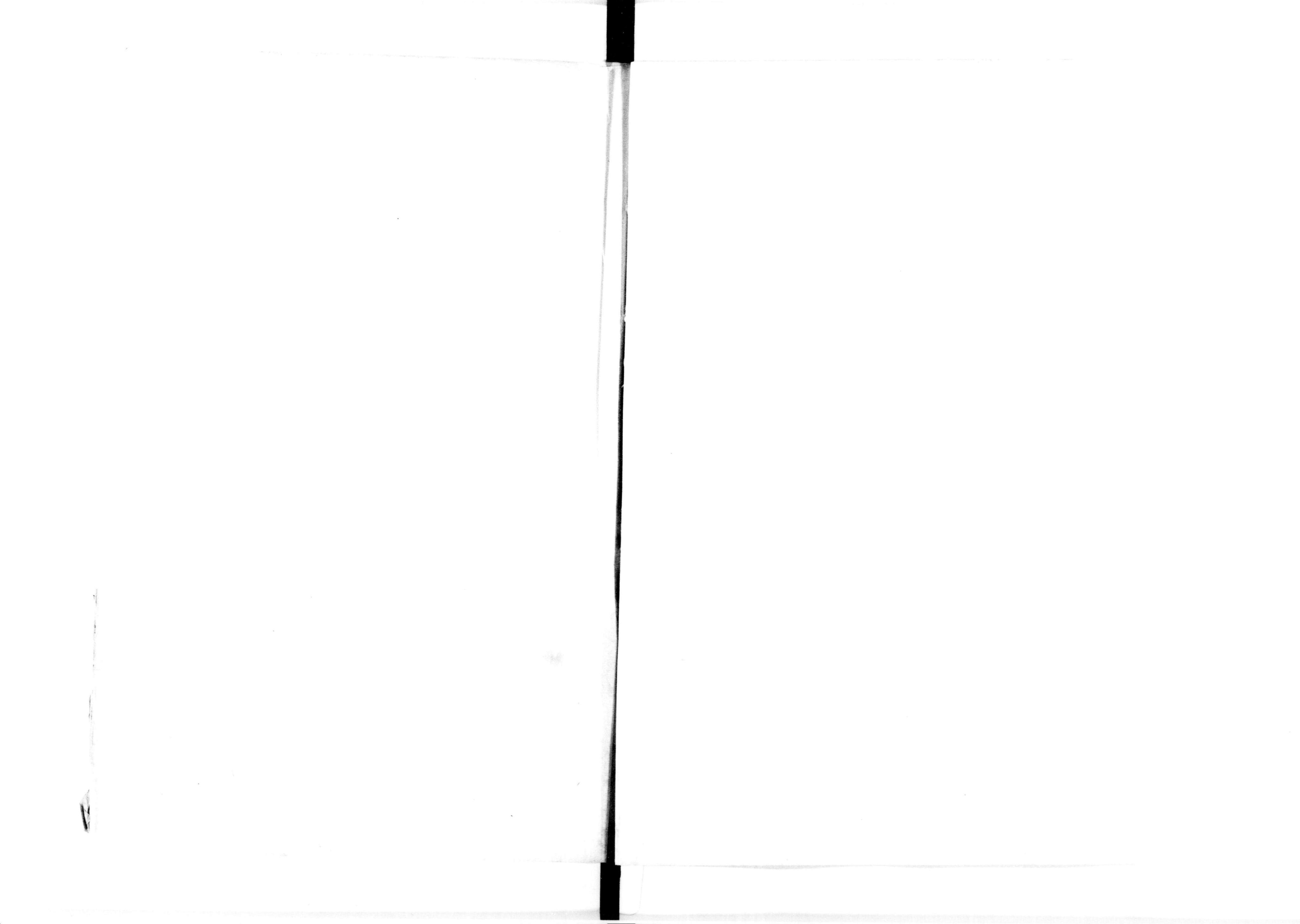
始













持104  
735

文學博士  
文學士  
文學士

青久芳

木保賀

存得矢

義二一

校校解

訂訂題

曾石義筑

我田

經

軍物軍

語記記記

戰記叢書  
第一篇

大正  
2. 6. 4  
內交

東京

忠誠堂發行





巴里之花谷戰



## 序

(一)

日本は武の國なり。歴史は武勇譚を以て終始す。『海行かば水つく屍、山行かば草蒸す屍』と歌ひたる大伴氏の家訓は國民が皇室に對し奉る忠誠無二の精神の表彰にして、此の忠誠の志は武家時代に至りて轉じて主従の間に應用せられ、武士道こゝに發達せり。鎌倉以後は文雅なく風流なき暗黒時代と稱へらるれども、一片の節義心は凜然として上下を貫き、兵馬戰塵の間に、陸離たる光彩を放てるは我が國史の上に炳焉たる所なり。藤田東湖が正氣の歌に「不世無汚隆。正氣時放光。」といへるは即ち是なり。保元平治以下軍記物語の多人に愛誦せられしは言ふに及ばず、平家の琵琶に語られて古來幾多の將士を泣かしめ、謠曲に賦せられて數百年の人心を激勵し來りし事人の能く知る所なり。子孫は喜んで父祖の武勇談を聽き、祖先の家風を繼ぎ祖先の高名を汚



ざらんことを望める氣象は即ち義に勇み身を殺して悔いざる所以、日本武士の節操はかくして維持せられしなり。徳川の世、かの太平記讀み盛に行はれて勤王の精神を鼓舞し、續いて通俗軍談の書多く世に出でたるは正に時世の嗜好に投ぜし所以にして、延いては維新回天の事業を成就せしめし一大素因ともなれり。之を聽いて感奮せしものは、獨り武士のみにあらずして、亦市井の人に多かりしなり。其の精神はやがて又小説とあらはれ、戯曲に作られ、獻身奉公の氣風は、いつか農工商一般の人に及べるをや。是即ち不知不識の間に徳川時代に於ての國民教育を作り得たりしなり。

(二)

明治の國民教育が二大戦役戦捷の名譽を頒つべきは當然の事なれども、之と同時に、久しく國民の敵愾心を涵養し來りし歴史傳説の勢力をも認めざるべからず。維新の事業の成りしは突如として維新時代に勃興せし思想ならざりしと同様、二大戦役に國民が上下一致忠勇壯烈の行を敢てせしものは單に

明治教育の賜なりと思惟すべからず。祖先の口碑が吾人の胸中に印し、祖先の血液が吾人の血管中に流るゝに非ずんば如何でか能く茲に至らん。翻つて一方を觀れば、四十年來の西洋文物輸入の結果は往々にして我が國體我が制度我が固有の風俗習慣に背戾する或物をも將來するを免れず。是猶交通日に開くるの結果としてたゞ危険なる微菌を輸入し來るに同じ。古の道義は我を捨て、道に従ふを大旨とす。今や我を立て、道と相争はんとするの傾向所在に見ゆ。豈戰慄して恐れざるべけんや。國民教育を掌りて兒童教養の任に當るもの深く意を茲に致して常に歴史教育を忽にすべからず。

(三)

明治學術の進歩は歴史學に於ても非常の發達を遂げしめ、舊來の糺繆を訂正せしこと尠からず。然れども眞を探り實を尙ぶの餘り、却りて從來の傳説を打破し古來採りて以て風教の根本となせしものを顛さんとせし傾向あり。歴史の學術と國民の教化とは自ら別物たり。初等教育を受くる幾百萬の兒童



は悉く將來の歴史家たるにあらざる以上、國民教育としては寧ろ古來の傳説を重んじ、名分を明かにするを以て其の本旨となすべし。必ずしも事實の穿鑿を以て其の能事となさざるべきなり。若し歴史的眼孔を以て論ぜんか。保元、平治、平家、太平記等の著一として半ばは脚色を加へたる小説ならざるなく、後世の軍談雜史に至りては史學上殆ど一顧の價値なきものあらん。然れども此等の諸書が國民の風教を維持し名節を獎勵せし効果に於ては決して正史に譲らざるのみならず、むしろ正史以上たり。何となれば平易にして耳に入り易く、興味多くして心に記し易ければなり。娛樂を兼ねて知識を收得せしむるは教育法の上乗たるものにして、徳川時代に於て自然に行はれたる國民教育は此の點に於ては明治時代に超越せりともいふを得んか。徳川時代といはず、現今の時代に於ても、日に一丁字無き市井の徒が寄席の軍談に得たる知識及び道義の念の或は却つて學校教育に獲たるものよりも確乎たるもの無きに非ざるなきを保せず。健全なる娛樂尠く、適當なる讀本尠きを痛歎する

現今の家庭に向つて通俗戰記を供給せんとするの企圖は恐くは大方の歡迎する所とならん。

#### (四)

家庭の修養は學校教育と相俟ちて始めて國民の大成を期すべし。系統的學校教育無かりし武家時代に於て、國民道德の維持せられしは主として家庭の教養に在りしなり。楠正行の母、瓜生保の母、細川忠興の妻等の事蹟を憶ふものは如何に嚴肅なる教誡の家庭に行はれしかを知らん。古のスパルタ武士の勇敢なりし逸話には婦人の美談を傳ふること亦尠からず。歴史軍談の書は此の點に於て亦婦人社會の讀物として推奨せらるべきものたり。西洋の諺にも其の子を知らんと欲せば其の母を見よ」といふにあらざるや。

#### (五)

歐米諸國に於ては通俗教育の事業甚だ盛にして、常に政府より之を獎勵保護するのみならず、民間の人亦相競ひて、其の普及完成に注意し、之を重要視す



る事學校教育にも過ぎたり學校教育は僅少の年月にして、殘餘の長時日が不知不識の間に家庭及び社會の感化を受くる事の甚大なるを思はゞ通俗教育の事業豈之を忽にすべけんや。文部省が通俗教育委員會を設置せしも亦之が爲なり。頃日聞く所によれば行政整理の結果として該委員會も亦廢止せられんとすとかや國防を鞏固にするは必しも物質的方法に限るべからず、國民の精神界を統一し、健全ならしむるは最緊要の事たりと謂ふべく、此の見地よりして大に通俗教育事業の一頓挫は蓋し國家の一大損失といふも不可なしと信ず。忠誠堂主人高倉嘉夫氏、今や通俗戰記の書數十種を集め、次第に刊行して世に布かんとす。余甚だ其の通俗教育の旨に合せるを喜ぶ。庶幾くは本書をして家庭の間に於て大義名節を磨くの端を開かしめ、進んで國民教育の補助たらしめんか、豈啻に忠誠堂主人の喜のみならんや。

文學博士 芳 賀 矢 一

しるす

## 緒 言

一、本叢書發刊の趣旨は、芳賀博士の序に盡きたれば贅せず。また各篇の内容及び其の作者等に關しても、別に同博士の解題あれば、讀者は就いて見らるべし。

一、本叢書に採録すべき書冊は、其の種類一ならず、記載の事實亦時代を異にし土地を別にして、容易に統一するを得ず。加ふるに紙數の制限、原本入手の難易等の事情ありて、必ずしも一定の順序に據り難きも、每篇皆完結せる作物なるのみならず、本書の目的とする所も、敢て系統的歴史を教ふるにあらざれば、此の小缺點の如き多く累する所なからんか。

一、本書校訂の方針に就きては、多數の中より最良書と信ずるものを底本とし、更に他書によりて嚴密なる校訂を加へたるは素より、家庭の讀物たる目的より、努めて誤脱なき完本を探るに注意せり。且讀み易からん事を期するより、使用の假名を一定し、振假名を施し、假名遣を正し、送



假名を補ひ、句讀點を訂し、また極端なる宛字、誤字、及び誤讀を來す恐ある假名は、原本の趣を損ぜざる限に於て、或は訂正し、或は漢字を宛て、以て其の失を防げり。尤も斯の種の書に特有なる口調、讀癖等は特に保存に努めたるのみならず、係結の相違の如きも、強ひて文法上の法則に従つて改竄せず。

校訂者識

解題

義經記、曾我物語の二書は一は義經、一は曾我兄弟を中心として記述した英雄譚的敘事詩である。保元平治平家等に創まつた軍書類はすべて一代の變亂を敘述したので箇人的ではなかつたが、此の二書に於て、始めて箇人の英雄譚を見得たのである。即ち歴史よりも傳記に傾き、小説に近づいた。此の二書が如何に當時に愛讀せられたかは、此の敘事詩が一轉演劇化せられて謠曲となつたのを見ても分る。謠曲中に牛若辨慶に關する物、曾我兄弟に關する物は非常に多い。徳川時代になつての演劇もやはり其の系統を受けて、義經や曾我兄弟は常に我が英雄譚の中核となつて居るのである。それ故此の二書が近世國文學の上に至大な關係を有つて居ることはいふまでも無い。作者はともに不明。石田軍記は主として關原戦役の顛末を敘したものである。太閤薨後家康を除かうとした三成の計略が、遂に天下分目の大戦争を惹起したのはいふまでもない



ことで、三成を中心として石田軍記といふ名稱も不都合では無い。三成の家系や生立を詳叙せず、秀吉の寵童より立身せしものとして姦佞の人物として敘述してある。但し其の生捕られの條の如き多少同情した筆つかひも見える。同名の書いく色もある。内容も大同小異である。これは十五卷本の刊本。作者不詳。かういふものも徳川時代には發賣を禁止せられたのであつた。筑紫軍記 十六卷 主として大友宗麟の事蹟を敘し、島津龍造寺等との交戦を記せり。宗麟は即ち義鎮にして戦國の末に於ける一代の雄者なり。加藤清正の家系を敘して、天御中主尊より天八下尊、天三下尊、天合尊、天八百日尊、天八百節魂尊、數十代の系統を列ねたるは滑稽といふべし。明暦三年大友内藏助義孝の徳川に召出されて五百俵を賜ふを以て筆を收む。著者を知らず。刊行せられたるは元祿十六年。即ち赤穂義士四十七人に死を賜へる年。

# 曾我物語



曾我物語總目錄

卷第一

一	神代の始の事	一
二	惟喬、惟仁の位争の事	一
三	伊東を調伏する事	四
四	同じく伊東が死する事	七
五	伊東次郎と祐經が争論の事	九
六	頼朝、伊東の館にまします事	一三
七	大見、八幡が伊東を狙ひし事	一四
八	杵臼、程嬰が事	一五
九	奥野の狩座の事	一九
十	同じく酒宴の事	一九
十一	同じく角觥の事	二一
十二	費長房が事	二七
十三	河津三郎討れし事	二八

卷第二

十四	伊東が出家の事	三一
十五	御房が生るゝ事	三二
十六	女房曾我へうつる事	三三
一	大見、八幡を討つ事	三五
二	泰山府君の事	三六
三	頼朝、伊東におはせし事	三七
四	若君の御事	三八
五	王昭君が事	三九
六	玄宗皇帝の事	四〇
七	頼朝、伊東を出で給ふ事	四一
八	頼朝、北條へ入り給ふ事	四一
九	時政が女の事	四二
十	橘の由來の事	四三
十一	兼隆を智に取る事	四五
十二	牽牛、織女の事	四六



三	盛長が夢見の事	四六
四	景延が夢合の事	四七
五	酒の事	四七
六	頼朝謀叛の事	四九
七	兼隆が討たる事	五〇
八	頼朝七騎落の事	五一
九	伊東の入道が斬らる事	五一
十	奈良の權操僧正の事	五二
十一	祐清京へ上る事	五三
十二	鎌倉の家の事	五四
十三	八幡大菩薩の御事	五四

卷第三

一	九月十三夜、名ある月に一萬箱王庭に出で、父の事を歎きし事	五七
二	兄弟を母の制する事	五八
三	源太曾我へ兄弟召しの御使に行きし事	六〇

卷第四

四	母なげきし事	六一
五	祐信兄弟をつれて鎌倉へ行きし事	六四
六	兄弟を梶原請ひ申さる事	六五
七	由井の濱へ引出されし事	六六
八	人々君へ参りて兄弟を請ひ申さる事	六八
九	畠山重忠請ひ申さる事	七〇
十	ちやうしが事にて兄弟助かる事	七二
十一	兄弟曾我へ歸り喜びし事	七四

卷第五

八	母の勘當かうぶる事	八七
九	小次郎語ひ得ざる事	八九
十	大磯の虎思染むる事	九三
十一	平六兵衛が喧嘩の事	九四
十二	三浦のかたかひが事	九五
十三	虎を具して曾我へ行きし事	九八

卷第六

十	巢父許由が事	一一六
十一	貞女が事	一一七
十二	鴛鴦の劍羽の事	一一七
十三	五郎が情かけし女出家の事	一一八
十四	吳越の戦の事	一一九
十五	鶯と蛙の歌の事	一二九

一	淺間の御狩の事	一〇一
二	五郎と源太と喧嘩の事	一〇三
三	和田より雜掌の事	一〇四
四	三原野の御狩の事	一〇五
五	那須野の御狩の事	一〇八
六	朝妻の狩座の事	一〇八
七	帝釋と阿修羅王戦の事	一〇九
八	三浦與一を頼みし事	一一〇
九	五郎女に情を懸けし事	一一四

一	十郎大磯へ行き立聞の事	一三一
二	和田義盛酒宴の事	一三二
三	ふん女が事	一三二
四	辨財天の事	一三六
五	朝比奈、虎が局へ迎に行きし事	一三六
六	虎が盃十郎に差しぬる事	一三九
七	五郎大磯へ行きし事	一四〇
八	朝比奈と五郎力競の事	一四一
九	曾我にて虎が名殘惜みし事	一四二



十	山彦山にての事	一四六
十一	比叡山始の事	一四八
十二	佛性こくの雨の事	一五〇
十三	嵯峨の釋迦作り奉りし事	一五一

卷第七

一	千草の花見し事	一五三
二	小袖乞の事	一五四
三	しやうめつ婆羅門の事	一五六
四	斑足王の事	一五七
五	母の勘當宥さるゝ事	一六〇
六	李將軍が事	一六五
七	三井寺の智興大師の事	一六七
八	泣不動の事	一七〇
九	鞠子川の事	一七一
十	二宮太郎に逢ひし事	一七三
十一	矢立の杉の事	一七四

卷第八

一	箱根にて暇乞の事	一七五
二	同じく別當に逢ふ事	一七五
三	太刀刀の由來の事	一七六
四	三島にて笠懸を射たる事	一七八
五	浮島ヶ原の事	一七九
六	富士の狩場への事	一七九
七	源太と重保が鹿論の事	一八一
八	燕の國早魃の事	一八三
九	仁田が猪に乗る事	一八四
十	船の始の事	一八六
十一	祐經を射んとせし事	一八六
十二	畠山歌にて訪はれし事	一八九
十三	館廻の事	一九〇
十四	祐經が館へ行きし事	一九一
十五	屋形の次第、五郎に語る事	一九五

卷第九

一	和田の館へ行きし事	一九七
二	兄弟館をかへし事	一九九
三	曾我への文かきし事	一九九
四	鬼王、道三郎曾我へ歸りし事	二〇〇
五	悉達太子の事	二〇二
六	兄弟出立の事	二〇二
七	館々の前にて咎められし事	二〇三
八	波斯匠王の事	二〇五
九	祐經館を替へし事	二〇六
十	祐經討ちし事	二〇七
十一	往藤内を討ちし事	二〇九
十二	祐經に止を刺す事	二〇九
十三	十番斬の事	二一一
十四	祐成討死の事	二一四
十五	五郎召捕らるゝ事	二一六

卷第十

一	五郎御前へ召出され聞召し問はるる事	二一九
二	犬房が事	二二四
三	五郎が斬らるゝ事	二二五
四	伊豆次郎が流されし事	二二六
五	鬼王、道三郎、曾我へ歸りし事	二二七
六	同じく彼者共が遁世の事	二二八
七	曾我にて追善の事	二二八
八	禪師法師が自害の事	二三一
九	京の小次郎が死する事	二二三
十	三浦、與一が出家の事	二二三

卷第十一

一	虎、曾我へ來りし事	二三五
二	母虎を具して箱根へ上りし事	二三八



三 鬼の子捕らるゝ事……………二三九

四 箱根にて佛事の事……………二四一

五 貧女が一燈の事……………二四五

六 菅丞相の御事……………二四六

七 兄弟神にいはゝるゝ事……………二四七

卷第十二

一 虎箱根にて行別れし事……………二四九

二 井出の館のあと見し事……………二四九

三 手越の少將に遭ひし事……………二五一

四 少將出家の事……………二五二

五 虎と少將と法然に逢ひ奉りし事……………二五三

六 虎大磯に閉籠りし事……………二五三

七 母と二宮の姉大磯へ尋行きし事……………二五四

八 虎出逢ひて呼入れし事……………二五五

九 少將法間の事……………二五七

十 母と二宮行別れし事……………二六〇

曾我物語總目錄終

曾我物語卷第一

一 神代の始の事

それ日域秋津洲は、これ國常立尊より事起り、宇比地邇、須比智邇、男神女神と現れ、伊弉諾、伊弉册尊まで、以上天神七代にてわたらせ給ひき。また天照大神より、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊まで、以上地神五代にて、多くの星霜をおくり給ふ。しかるに神武天皇と申し奉るは、葺不合尊にて、一天の主、百王にも始として、天下を治め給ひしより以來、國土を傾け、萬民の懼るゝ謀、文武二道に如くはなし。好文の輩を寵愛せられずば、誰か萬機の政を輔けん。また勇悍の輩を抽賞せられずば、いかでか四海の亂を鎮めん。かるが故に唐の太宗文皇帝は疵を吸ひて戦士を賞し、漢の高祖は三尺の劔を帯して諸侯を征し給ふ。しかる間、本朝にも中比より、源平の

二 惟喬惟仁の位争の事

兩氏を定置れしより以來、武略を振ひ、朝家を守護し、互に名將の名を現すに依つて、諸國の狼藉を鎮め、既に四百餘回の年月をおくり畢んぬ。これ清和の後胤、または桓武の累代なり。然りと雖、皇子を出でて、人臣に列りて、鏃をかみ、鋒先をあらはす志、とりくくなり。

そもく源氏といつば、桓武天皇より四代の皇子を田村の帝と申しき。又は文徳天皇と申しけり。皇子二人おはします。第一を惟喬親王と申す。帝この皇子をば殊に御志に思召して、東宮にも立て、御位を譲り奉らばやと思召されけり。第二の皇子をば惟仁親王と申しき。未だ幼くおはします。御母は染殿の關白忠仁公の御女なりければ、一門皇后月卿雲客達、寵愛し奉られければ、是れも亦黙し難くぞ思召されける。彼は繼體あいぶんの器量なり、是は萬



機ぶいの人相なり。是を背きて寶祚を授くるものな  
らば、用捨私ありて、臣下唇を翻すべし。須く  
競馬にのせ其勝負に従つて、御位を譲り奉るべしと  
て、天安二年三月二日に、二人の皇子達を引具し奉  
り、右近の馬場へ行幸なる。月御雲客花の袂をかさ  
ね、玉の裳をつらね、右近の馬場へ供奉せらる。こ  
のこと希代の勝事、天下の不思議と見えし。皇子達  
も、東宮の浮沈これにありとぞ思召されける。され  
ば様々の御祈どもありけり。惟喬の御祈の師には、  
柿本の紀僧正眞濟とて東寺の長者、弘法大師の御弟  
子なり。惟仁親王の御祈の師には、我山の住侶、慧良  
和尚とて慈覺大師の御弟子なり。めでたき上人にて  
ぞ渡らせ給ひける。西塔の平等坊にて、大威徳の法  
をぞ行ひ給ひける。既に競馬は十番をきはに定めら  
れ、六番勝ち給ふ御方に位を御譲あるべきとの御事  
なり。されば惟喬の御方に、續けて四番勝ち給ひけ  
り。惟仁の御方へ心を寄せ奉る人々は、汗を握り心

を碎きて祈念せられけり。惟仁の御方、右近の馬場  
より、天台山平等坊の檀所へ、御使馳重なる事た  
櫛の齒を挽くが如し。既に御方こそ四番續けて負け  
ぬればと申しければ、慧良心憂く思はれて、繪像の  
大威徳を倒にかけ奉り、三尺の土牛をとつて北向  
に立て、行はれけるに、土牛躍りて西向になれば、  
南向に取つて押向け、東向になれば西におし直し、  
肝膽をくだきて揉れしが、猶るかねて、獨鉗を以て  
自ら腦を突擡きて腦を取り、罌粟に混ぜ爐壇に打焼  
べ、黒煙をたて、一揉もまれ給ひければ、土牛た  
けりて聲をたて、繪像の大威徳は利劍を捧げて振り  
給ひければ、諸願成就してけりと御心をのべ給ふ  
所に、御方こそは六番つゞけて勝ち給ひ候へと、御  
使走りつゞければ、喜悅の眉を開き、急ぎ壇をぞ降  
りられける。あり難き瑞相なり。されば惟仁親王御  
位に定り、春宮に立たせ給ひけり。然るに延暦寺の  
大衆の詮議にも、慧良腦を碎きしかば、次弟位に即

き、尊繪利劍を振り給へば、かんしやうれいを垂れ  
給ふとぞ申しける。これに因つて惟喬の御持僧眞濟  
僧正は、思死にぞ失せ給ひける。皇子も都へ御還な  
くして、比叡山の麓小野といふ所にぞ閉籠らせ給ひ  
ける。比は神無月末方、雪氣の空の嵐に冴え、時雨  
る、雲の絶間なく、都に往きかふ人も稀なりけり。  
況や小野の御住居思ひやられて哀なり。こゝに在五  
中將在原業平は、昔の御情淺からざりし人なりけ  
れば、紛々たる雪を踏分け、泣くく御跡を尋ね参  
りて、見参らすれば、孟冬歸來て紅葉嵐に絶え、り  
うるんけんがきうとう寂々たり。折にまかせ人も  
草もかれぬれば、山里いと寂しきに、みな白妙の  
庭の面、あと踏付くる人もなし。折ふし親王は端近  
く出でさせ給ひて、南殿の御格子三間はかり上げて  
四方の山を御覽し廻らし、實にや春は青く、夏は茂  
り、秋は染め、冬は落つるといふ、昭明太子の言思  
召しつらね、香盧峯の雪をば簾を巻けて見るなん

ど、御口吟み給ひけり。中將この御有様を見奉る  
に、たゞ夢の心地せられたけるが、かく参りて昔今の  
事ども申承るにつけても、御衣の御袂紋りもあへ  
させ給はず、かの鳥飼の院の御遊興、交野の雪の御  
鷹狩まで思召し出でられて、中將かくぞ申されけ  
る。

忘れては夢かと思ふ思ひきや  
ゆきふみわけて君を見むとは

親王も取敢させ給はで、返し、  
夢かともなにか思はむ世の中を

かくて貞観四年に御出家わたらせ給ひしかば、小  
野の宮とも申しけり。文徳天皇御年二十にて崩御な  
りしかば、第二の皇子御年九歳にて御譲を受け給  
ふ。清和天皇の御事これなり。後には丹波國水尾の  
里に閉籠らせ給ひければ、水尾の帝とぞ申しける。  
皇子数多おはします、第一を陽成院、第二を貞固親



王、第三を貞元親王、第四を貞保親王、この皇子は御琵琶の上手にておはします。桂の親王とも申しけり。心をかけらるゝ女は、月の光を待ちかね、螢を袂につゝむ。この親王の御事なり。今のしげのこの先祖なり。第五貞平親王、第六貞純親王とぞ申しける。六孫王これなり。さればかの親王の嫡子、多田の新發意満仲、其子攝津守頼光、次男大和守頼親、三男多田法眼とて山法師にて三塔第一の悪僧なり。四郎河内守頼信、其子伊豫入道頼義、其嫡子八幡太郎義家、其子但馬守義親、次男河内判官義忠、三男式部大夫義國、四男六條判官爲義、其子左馬頭義朝、其嫡子鎌倉源太義平、次男中宮大夫進朝長、三男右近衛大將頼朝の上こそ源氏ぞなかりける。この六孫王より以來、皇子を出でて始めて源の姓を賜り、正體を去りて人臣に列り給ひて後、多田満仲より下野守義朝に至るまで七代は、諸國の竹府に名をかき、藝を將軍の弓馬に施し、家にあらずして四海を

守りしに、白波なほ聲あり。されば各權を諍ふ故に、互に朝敵になりて、源氏世を亂せば、平氏勅宣を以て是を征して朝恩に誇り、平將國を傾ければ、源氏詔命に任せて是を罰して勳功を極む。然れば近頃平氏退散して、源氏おのづから世に誇り、四海の破亂を治め、一天のはうぎよ定めしより以來、綠林枝枯れて吹風穩なり。然れば叡慮を背く青葉は、色を雄劍の秋の霜に犯されて朝章を亂す、白波音を上弦の月に澄す。これ偏に羽林の威風前代にも超えて、うんてうの故なり。然るに青侍をひそめて、せいの亂を制し、私曲の諍を止めて歸服せざるはなかりけり。

三 伊東を調伏する事

こゝに伊豆國の住人、伊東次郎祐親が孫、曾我十郎祐成、同じく五郎時致といふものありて、將軍の陣内をも憚らず、親の敵を討取り、藝を戰場に施し、

名を後代に留めける、由來を委しく尋ぬるに、即ち一家の輩工藤左衛門祐經なり。たとへば伊豆國に伊東、河津、宇佐美、この三ヶ所を總ねて、菫美の庄と號する。かの本主は菫美入道寂心にてありけるが、在國の時は工藤大夫祐隆といひけり。男子あまた持ちたりしが、皆早世して遺跡既に絶えんとす。然る間織娘の子をとりて、嫡子に立て、伊東を譲り、武者所に參らせ、工藤武者祐繼と號す。また嫡孫あり、次男に立て、河津を譲り、河津二郎と名乗らせける。然る間寂心逝去の後、祐親思ひけるは、これこそ嫡嫡なれば嫡子の譲あるべきに、異姓他人の繼女の子、此家に入つて相續するこそ安からねと、思ふ心つきけり。こゝに誠にも神慮にも背き、子孫も絶えぬべき惡事なるをや。たとひ他人なりといふとも、親やうして譲る上は、違亂の義あるべからず。まして是は寂心、内々繼女のもとに通ひて設けたる子なり、實には兄なり、譲りたる上は諍ふこと無益のよし、よ

そゝにも申しあひけり。されども祐親止まらで、對決度々に及ぶと雖、讓狀をさぐる間、伊東が所領になりて、河津は負けてぞ下りける。その後上には親みながら、内々安からぬ事にぞ思ひける。されども我が力には叶はで年月を送る。或時祐親箱根の別當を呼下し奉り、種々にもてなし酒宴過ぎしかば、近く寄り畏りて申しけるは、かねてより知召されて候ふごとく、伊東をば嫡々にて祐親が相繼ぎ候ふべきを、思はずの繼女の子來りて、父の墓所先祖重代の所領を横領仕る事よそにて見え候ふが、あまりに口惜しく候ふ間、御心をも憚らず申出候。然るべくは伊東武者が二つなき命を立所に失ひ候ふ様に、調伏ありて見せ給へと申しければ、別當聞き給ひて、暫くものも宣はず。稍ありて此事よく聞き給へ、一腹一生にてこそましまさね、兄弟なる事は眼前なり。公方までも聞召しひらかれ、既に御下知をなさるゝ上は、隔の御怨はさる事にて候へど



も、忽に害心を起し、親の掟を背き給はんこと然るべからず。神明は正直の頭に宿り給ふ事なれば、定めて天の加護もあるべからず、冥の照覧も恐ろし、そのうへ愚僧は幼少より父母の塵慾を離れ。師匠のかんじんに入つて、諸説の教法を學し、圓頓止觀の門を望み、一念三昧にかじよくの艱難を思切るとき、法せきの辛苦を忍ぶ。三衣を墨に染め、鬚髮を圓め、佛の遺願に任せ、五戒を保ちしより以來、もの、命を殺すことなし、佛ことに誠め給ふ。されば衆生の身の中には、三身佛性として三體の佛のまします。然るに人の命を奪はんこと、三世の諸佛を失ひ奉るに同じ。もろく、以て思寄らざる事なりとて、箱根に上り給ひけり。河津は愁なること申しだして、別當承引なかりければ、その後消息を以て重ね、申しけれども、なほ用ひ給はず。如何せんとして窺に箱根に上り、別當に見參して、近く居寄りて叩きけるは、もの其身にては候はねども、昔より師檀の契

約淺からで、頼み頼まれ奉りぬ。祐親が身において一生の大事、子々孫々までもこれに如くべからず候。再應に申入れ候ふ條、實にその恐少からず候ども、彼方へ返聞えなば、重ねたる難義出來候ふべし。さればにや浮沈に及び候ふと、くれぐれ申しければ、始は別當大きに辭退ありけるが、まことに檀那の情もさり難くて、大方諒承ありければ、河津は郷へぞ下りける。別當心憂き事ながら、檀那の頼むと申しければ、壇をたて莊嚴して、伊東を調伏せられけるこそ恐しけれ。初三日の本尊には、來迎の阿彌陀の三尊、六道能化の地藏菩薩、檀那河津次郎が諸願成就のため、伊東武者が二なき命をとり、來世にては觀音勢至蓮臺を傾け、安養の淨刹に引攝し給へ。片時も地獄に墮し給ふなど、他念なく祈られけり。後七日の本尊には、烏菟沙摩金剛童子、五大明王の利劍殊勝なるを四方にかけて、紫の袈裟を帶し、種々に壇を飾り、肝膽を碎き汗をも拭はず、

面をもふらず餘念なくこそ祈られけれ。昔より今に至るまで、佛法護持の御力今に始めざる事なれば、七日に満する寅のなかばに、東伊武者が壯なる首を、明王の劔の先に貫き、壇上に落つると見てければ、さては威験顯れたりとて、別當壇をぞ降り給ひける。恐しかりける事共なり。

四 同じく伊東が死する事

さて伊東武者は、是をば夢にも知らず、時ならぬ奥野の狩して遊ばんとて、射手を汰へ列卒を催し、若黨數多相具して、伊豆の奥野へぞ入りける。比しも夏の末方、峰に重なる樹の間より、むらくに靡くはさぞと見えしより、思はざる風に犯されて心地例ならず煩ひ、志す狩場をも見ずして、近き野邊より歸りけり。日數重なる程に、いよ／＼重くぞなりける。其時九つになりける金石を呼びて、自ら手を取り申しけるは、如何におのれ、十歳にだに

もならざるを見捨て、死なん事こそ悲しけれ。生死かぎりあり遁るべからず、汝を誰か惑み、誰か孚みて育てんと、さめ／＼と泣きけり。金石は幼ければ、たい泣くより外の事はなし。女房近くへ寄り涙を押へて云ひけるは、かなはぬ憂世の習なれども、せめて金石十五にならんを待ち給へかし。さればとて數多ある子にもあらず、またかけごある中の身にてもなし、如何はせんと歎きけるこそ理なれ。爰に弟の河津次郎祐親訪來りけるが、この有様を見て近く寄りて申しけるは、今を限とこそ見えさせ給ひて候へ。今生の執心の御止め候ひて、一筋に後生菩提を願ひ給へ。金石殿においては、祐親かくて候へば、後見し奉るべし。ゆめ／＼疎略あるべからず、心安く思ひ給へ。さればにや史記の言葉にも、昆弟の子はなほし己が子のごとしと見えたり。いかでか疎なるべきと申しければ、祐親これを聞きて、内に害心あるをば知らず喜び、かき起され人



の肩にかゝり、手を合せ祐親を拜み、稍ありて苦しげなる息をつぎ、いかに候。只今の仰こそ生前に嬉しく覚え候へ。この頃は何となく下説について快からざる事にてましまさんと存する所に、かやうに宣ふこそ返すも本意なれ。さらば金石をば偏に和殿に預け奉る。甥なりとも實子の如く思ひ、女あまた持ち給ふ中にも、萬劫御前に合せて、十五にならば男になして、當莊の本券小松殿の見参に入れ、和殿の女と金石と此所を妨なく知行せさせよとして、伊東の地券文書を取り出し、金石に見せ、汝に直に取らすべけれども、未だ幼稚なり、いづれも親なれば疎にあるべからず、母に預くるぞ。十五にならば取らすべし、よく見置け。今より後は河津殿を、叔父なりとも實の親と頼むべし。心おきて憎れ奉るな。祐繼も草の陰にて立添ひ守るべしとて、文書母が方へ渡し、今は心安しとて打臥しぬ。かくて日數積りゆけば、いよく弱りはて、七月十三日の

寅の刻に、四十三にて失せにけり。哀なりし例なり。弟の河津次郎は、上には嘆くよしなりしかども、下には喜悅の眉を開き、箱根の別當の方を拜みける。一旦の猛悪は勝利ありと雖、終には子孫に報ふならひにて、未だ如何とぞ覺えける。やがて河津は我家を出で、伊東の館に入替り、内々存する旨ありければ、兄のため忠ある由にて、後家にも子にも劣らず孝養をいたす。七日々々の外、百ヶ日、一周忌、第三年に至るまで、修善の忠節を盡す。人これを聞き、神を祭る時は神の在ます如くせよ、死に仕ふる時は生に事ふる如くなれとは、論語の言葉なるをやと、感じけるぞ恐なる。さて金石には、心やすき乳母をつけてぞ養ひける。遺言を達へず十五にて元服させ、蒲美の工藤祐經と號す。やがて女萬劫御前にあはせ、その秋相具して上洛し、即ち小松殿の見参に入り、祐經をば京都に留置き、我身は國へぞ下りける。その後はかひなくしき侍の一人もつけず、

おとなしき者もなし。所帯においては祐親一人して押領し、祐經には屋敷の一所をも配分せざりけり。實や文選の言葉に、徳を積み功を重ねること、その善を知らざれども時に用ゐる事あり、義を捨て理を背く事、その悪を知らざれども時に滅ぶる事あり。身の危きは、勢の過ぐる所なり、災の積るは、てうの盛なるを超えてなり。されども祐經は、誰教ふるとはなきに、公文所を離れず、奉行所に於て身をうたせ、沙汰になれける程に、善悪を不審し、分別して理非を迷はず、諸事に心を亘し、手跡普通に優れ、和歌の道を心につけ、かんでうの筈に推参してその衆に列りしかば、工藤の優男とぞ召されける。十五歳より武者所に侍ひて、禮義正しくして男柄尋常なりければ、田舎侍ともなく心にくしとて、二十一歳にして武者所の一朧を経て、工藤一朧とぞ召されける。

五 伊東次郎と祐經が争論の事  
かくて祐經二十五まで宮仕懈らざりき。こゝに田舎の母一期盡きて、形見に父が預置きし讓狀を取添へて、祐經が許へぞ上せたりける。祐經これを披見して、こはいかに伊豆の伊東といふ所は、祖父入道寂心より父伊東武者祐繼まで、三代相傳の所領なるを、何によつて叔父の河津次郎相續して、この八ヶ年が間知行しける。いざや冠者ばら四季の衣更させんとて、暇を申しけれども、御氣色最中なりければ左右なく御暇賜らざりけり。さらばとて代官を下して催促を致す。伊東これを聞き、祐親より外に全く他の地頭なしとて、冠者ばらをはういつに追放す。京より下る者は、田舎の仔細をば知らで逆上りぬ。一朧にこの由を訴ふ。其儀ならば祐經下らんとて出立ちけるが、案者第一の者にて、心を變へて思ひけるは、人の僻事するといふを聞きながら、また下り



て劣らじ負けしとせん程に、まさる狼藉引出し、兩方とくたいの身となりぬべし。其上道理を持ちながら、親方に向ひ意趣を込めんこと詮なし。祐經ほどの者が利連の沙汰に負くべきにあらず、田舎より彼仁を召上せて、詔裁をこそ仰がめと、思當る所の道理をさしつめ、院宣を申下し、小松殿の御状を添へて、檢非違使を以て伊東を京都に召上せ、眞の知行なる時こそ、田舎にて横紙をも破り、てうちやくとも云ひけれ。院宣をなし重ねて堅く召されければ、一門馳集り、案者口利寄合ひ、伴ひ談合すると雖、道理は一つもなかりけり。祐經存生の時より執心深くして、いかにも此所を祐親が配領にせん多、年心に懸け、既に十餘年知行の所なり。一期の大事と金銀を調へ、竊に奉行所へぞ上りける。誠にや文選の辭に、青蠅も水精を汚さず、邪論もくの聖を惑さずとは申せども、奉行のめづるも理なり。また漢書を見るに、水至つて清ければ底に魚棲まず、人

至つて善なれば内に友なしと見えたり。さればにや奉行まことに寶重くして、祐經が申狀立たざるこそ無念なれ。月明ならんとすれども浮雲これを覆ひ、水清からんとすれども泥沙これを汚す、君は賢なりといへども臣これを汚す理によつて、本券は箱の底に朽ちて、空しく年月を送る間、祐經鬱憤に住して、重ねて申狀を奉行所にさぐ。その狀に曰く、  
伊豆國の住人伊東の工藤一鵬平、祐經謹んで言上早く御裁許を蒙らんと欲する仔細の事、右件の條、祖父南美入道寂心死去の後、親父同東武者祐繼の舍弟祐親兄弟の中不和なるによつて、對決度々に及ぶと雖、祐繼當腹寵愛たるによつて、安堵の御下文を賜つて、既に數ヶ年を経畢んぬ。こゝに祐繼一期限の病床に臨む刻、河津次郎日頃の意趣を忘れ忽に訪來る。其時祐經は生年九歳なりき。叔父河津次郎に地券文書母ともに預置きて、

八ヶ年の春秋を送る。親方にあらすんば伺候の臣と申すべきや。所詮世のげいに任せ、伊東次郎に賜るべきか、また祐經に賜るべきか、相傳の道理に付いて、けんばうの詔裁を仰がんと欲す。仍て誠恐誠惶言上如件。

仁安二年三月三日

平祐經

と書きて捧ぐ。公事所に此狀を披見ありて、さし當る道理に煩ひけるよと、人々寄合ひ内談評定するは、祐經が申狀一として僻事なし、これは裁許せずばけん法に背きなん。また伊東實を上げて萬事奉行を頼むと云ふ。然れども祐經は左右なく利連たる間、奉行所の私なり難ければ、安堵の狀二つ書きて、大宮の令旨を添へて下さる。伊東は半分なりとも賜る所奉行の御恩と喜びて、本國へぞ下りける。書は辭を盡さず、辭は心を盡さずと雖、一鵬は辭を失ひ、十五より本所にまわり、日夜朝暮宮仕をいたし、今年八ヶ年と覺ゆるに、重ねて御恩こそ蒙らざ

らめ、先祖の所領を半分召さるゝ事をも何事ぞ。水上濁れる時は清からん事を思ひ、形の歪める時は影の素直ならん事を思ふと、かたに見えたり。父祐繼が代には斯様にはよも分けじ今なんぞ半分の主たるべきや。これ偏に親方ながら伊東が致す所なり。我身こそ京都に住む共、前後はみな弓矢の遺恨なり、如何でかこのこと怨みざるべきとて、竊に都を出でて、駿河國高橋といふ所に下り、木津川、船越、荻野、蒲原、入江の人々は、外戚につきて親しかりければ、二百餘人寄合ひて、祐親討ちて所領を一人して進退せんと思ふ心つきにけり。此儀神慮もいかいとぞ覺えし。たとへば差當る道理顯然たりと雖、昔の恩を忘れ忽に悪行を企むこと、伊東が昔をも思ひ、てんじゆが古をも尋ぬべきにや。第一叔父なり、第二養父なり、第三舅なり、第四烏帽子親なり、第五一族なかの勞者なり、旁々以て疎ならず、かやうに思立つことぞ恐しき。いかにも思慮あるべきものをや。



剩へ領地を奪はんこと不可思議なり。かゝりける事を祐親かへり聞きて、嫡子河津三郎祐重、次男伊東九郎祐清、その外一門老少呼集め、用心厳しくしければ力に及ばず。これや富貴にして善をなし易く、貧賤にして功をなし難しとは、今こそ思知られたれ。その後伊東次郎この事ありのまゝ、京都へ訴へ申して、ながく祐經を本所へ入れたてずして、年貢所當におきては芥子ほども残らず横領する間、祐經身の置所なくして、また京都に歸上り窃に住ひぬ。伊東に祐經は惱され本意を忘れ、祐經が妻女とり返し、相模國の住人土肥次郎實平が嫡子彌太郎遠平に合せけり。國に又雙ぶ者なくぞ見えける。されどもこやしやうなき不義の富は災の媒と左傳に見えたり。されば行末いかいとぞ覺えし。工藤一蒨は怒の事を云出して叔父に中を違はれ、夫妻の別所帯は奪はれ、身を置きかねて膽やきける間、宮仕も疎略になりけり。さればにや御氣色も悪しく、朋輩も側目にか

ければ、せき訴へ難く思焦れて、竊にまた本國に下り、大見の小藤太八幡三郎を招寄せて、泣く／＼囁きけるは、各々つぶさに聞け、相傳の所領を押領せらるゝだにも安からざるに、結句女房まで取返されて土肥彌太郎にあはせらるゝ事、口惜しきとも餘あり、今は命を捨て、矢一つ射ばやと思ふなり。顯れてはせんこと叶ふまじ、我れ又便宜を窺はひ、人に見知られて本意を遂げ難し。さればとて止るべきにもあらず、如何せん。各々さりげなくして、狩漁などの所にも便宜を窺ひ、矢一つ射んにや。もし宿意を遂げんに於ては、重恩生々世々に報じても餘ありぬべし。いかいせんとぞ口説きける。二人の郎黨聞き、一同に申しけるは、それまでも仰せらるべからず。弓箭をとり世を渡ると申せども、萬死一生は一期に一度とこそ承れ。されば古き言葉にも、功は爲し難くして而も破易し、時は逢ひ難くして而も失易し。此仰こそ面目にて候へ、是非命におきて

は君に進ずるとして、各々座敷を立ちければ、頼しくぞ思ひける。伊東はいさゝか此儀を知らざりけるこそ悲しけれ。

六 頼朝伊東の館にまします事

かくて大見八幡は伊東を狙ふべき隙を窺ふ程に、その比兵衛佐殿は伊東の館にましましたる所に、相模國の住人大庭平太景信といふ者あり。一門寄合ひ酒宴しけるが、申しけるは、我等は昔源氏の郎黨なり、然れども今は平家の御恩をもつて妻子を育むと雖、古のこと忘るべきにあらず、いざや佐殿の何時しか流人として徒然にましますらん、一夜宿直申して慰め奉りて、後日の奉公に申さん、尤も然るべしとて、一門五十餘人出立ち、にんべつさゝえ一つあてにぞ持せける。これを聞きて、三浦鎌倉、土肥次郎、岡崎、本間、澁谷、糟谷、松田、土屋、曾我の人々思ひく／＼に出立ちける程に、近國の侍聞傳へ、我も如何で

か通るべき、いざや參らんとて、相模國には大庭が舍弟三郎、俣野五郎、名越十郎、山浦瀧口太郎、同じく三郎、海老名源八、荻野五郎、駿河國には竹下孫八、相澤彌五郎、吉川、船越、入江の人々、伊豆國には北條四郎、同じく三郎、天野藤内、狩野藤五を始めとして、宗徒の人々五百人、伊豆の伊東へぞ參りける。伊東大きに喜びて、内外の侍一面に取拂ひ、なほ狭かりければ、庭に假屋を打出し大幕ひき、上下二千四百人の客人を、一日一夜ぞ款待しける。土肥次郎これを見て、雜掌は百人二百人までは易かるべきに、既に二三千人の客人を一人に預くること無骨なりといふ。伊東これを聞きて、河津と申す小郷を知行せしときにも、何れの誰にか劣り候ふべき。況てや薔美の庄を總ねて賜るものならば、などや面々に引出物申さざるべき。これ程のこと何かは苦しかるべきとて、山海の珍物にて三日三夜ぞ款待しける。又海老名源八が申しけるは、かゝる寄合に參りぬと豫



て存じて候は、國より列卒の用意して、音に聞ゆる奥野に入り、物頭に馬あひつけ、鏑の遠鳴させざるが無念なりといひければ、伊東これを聞き、祐親を人と思ひてこそ、國の人々は打寄り、兩三日は遊び給ふらめ。左右なく座敷にて列卒の願ひやうこそ心狭けれ。それく河津三郎、列卒を催して鹿射させ申せと云ひけるぞ、伊東の運の極めなる。河津はもとより穩便の者にて、心の内には殺生を禁する人なりければ、如何にもして此たびの狩を申止めなばよかるべしと思へども、多き侍の中にて親の申す事なれば力及ばで、あつと答へて座敷を立ち、我と列卒をぞ催しける。幼きものは馬に乗りて出でよ、大人は弓箭を持って觸れければ、菑の美莊廣くして、老若三千四百五人ぞ出でたりける。彼等を先として三ヶ國の人々、我もくと打出でたり。伊東河津が妻女數の女房引連れて、南の中門に立出でて、打出でける人々を見送りける。中にも河津三郎は餘の人

七 大見、八幡が伊東を狙ひし事

こゝに祐親が二人の郎黨大見八幡は是を聞き、かやうの所こそ良き便宜なれ。いざや我等たよりを狙はんと、各梯の直垂に鹿箭さしたる竹箆とりてつけ、白木の弓の射よげなるを打擔げ、列卒に紛れ、狙ふ所は何處々々ぞ。一日は柏が崎、熊倉が谷、二日は萩が窪、椎が澤、三日は長倉がわたり、朽木が澤、赤澤が峰を始めとして、七日が間附廻りてぞ狙ひける。然れども伊東は國一番の大名にて、家の子郎黨多かりければ、たやすく討つべき様ぞなかりける。

この者どもが心を盡しける有様、譬へていふべき方ぞなき。

八 杵臼、程嬰が事

さても此二人の者ども、仁義を重んじ忠孝を勵し、心を盡し狙ふ事を思ふに、昔大國に孝明王といふ國王あり。ならばの王と國を争ひ、軍をし給ふこと度度なり。然るに孝明王戰負けて自害に及ばんとする時に、杵臼、程嬰とて二人の臣下あり、彼等を近づけて、汝等定めて我れと共に自害せんとぞ思ふらん、これ誠に順路逃るゝ所なし。さりながら我に一人の太子屠岸賈といひて十一歳になるを、故郷に留置きたり。我れ自害の後、雜兵の手にかゝりて命を空しくせんこと口惜しければ、汝等いかにもして逃出でて、かの子をばごくみ育て、敵を亡し無念を散せよと宣ひければ、二人の臣下異議に及ばずして、圍のうちを忍出でけり。孝明王心やすくして自害し

給ひけり。さて二人の臣下故郷に歸り、太子を誘出して養育しけるぞ無慙なる。かくて敵の大王これを聞傳へ、末の世には我が敵なり、かの太子おなじく二人の臣下共の首を取りて來らん者には、勳功は所望によるべしと、國々に宣旨を下されけり。この宣旨に従つて彼の人々に心をかけ、いかにもして怪索めんと思はぬ者はなかりけり。然れども一所の住居かなはで、或は遠き里に交り、深き山に籠りて身を隠すと雖、處なくして二人寄合ひ、如何せんとぞ歎きける。程嬰申しけるは、我等が君を養ひ奉るに、敵こはくして國中に隠れ難し。されば我等二人がうち一人、敵の王に出仕へんといはんとし、さるものとして心を許す事あらじ。時に我が子きくわくといひて十一歳になる子を一人持ちたり、幸わが君と同年なり。これを太子と號して、二人がうち一人は山に籠り、一人は討手に來り、主従二人を討ち首をとり、敵の王に捧げなば、如何でか心許さるべき。其時



敵を易々と打取るべしといひければ、杵臼申しけるは、命長へて後に事をなすべき忍耐の精は、遠くして難し、今太子と同じく死せん事は、近くして易し。然れば杵臼は忍耐の精すくなき者なり、易きに就き我れ先づ死ぬべし、程嬰は敵方に出でん事を急ぎ給へとぞ申しける。その後程嬰は我が子のきくわくを近づけて、いかに汝委しく聞け、我等は主君の太子隠し奉らんとせし故、われく汝等までも敵に捕はれて、犬死をせん事疑なし、然れば汝を太子と偽り奉りて首を取るべし、怨むる事なくして御命に代り奉りて、君を安全ならしめよ。親なればとて添果つべきにもあらず、來世に生合ふべしと申しければ、きくわく聞きもあへず、涙を流してしばし返事もせざりけり。父この色を見て、未練なり、汝はや十歳に餘るぞかし。弓矢とる者の子は、腹のうちより物の心は知るぞかしと諫めければ、きくわく此詞を聞き云ひけるは、我が命惜しきにより泣くには

あらず、まことに某が命一つにて君と父との孝行に捧げ申さん事、露塵ほども惜しからざるものをや。歎の中の喜なりと云ひも敢へず、涙に咽びけり。父是を聞き、子ながらも優に使ひたる詞かな。未だ幼き者ぞかし。まことに我が子なり。成人の後さぞと思ひければ、惜しといふも餘あり。我れ心弱きと見えなば、若し未練にもやなりなんと思ひければ、流る涙を押止め、弓矢の家を生れて、君の爲に命を棄つる事、汝一人にも限らず。最期未練にては君の御ため父がため中々見苦しとて、一命を損すべきなりと云ひければ、きくわくは涙を押へて、斯程に深く思定めて候へば、如何でかおろかなるべき。心安く思召せ。さりながらさし當る父母の御別、いかでか惜しからで候べき。最後におきては思定めて候ふと申しければ、父心安くぞ思ひける。さて又二人寄合ひ内談するやう、今君の御爲に討たるべき命はやすく、殘留りて敵を討ちて、太子を世に立て申さ

ん事、重きが上の大事なり。如何せん、ながらへ功をなす事、堪忍精なくしてはなり難し。われ先づ死なんとて、杵臼は十一歳のきくわくをつれて山に籠り、討手を待ちける心のうち、無慙といふも餘りあり。その後程嬰は敵の王のあたりに行き、召仕はれんと申す。敵王聞き、此もの身を捨て面を汚し、我に仕ふべき臣下にあらず。さりながら、世かはり時うつればさもやと思ひ、傍に許置くと雖、なほ害心に恐れて許す心なかりけり。云合せたることなれば、我れ今君主に仕へて二心なし。疑ひ理なれ共、世界を狭められ、耻辱にかへて助かるなり。なほし用ひ給はずば、主君の太子臣下の杵臼もろ共に、隠居たる處を委しく知れり、討手を賜つて向ひ、彼等を討ち首を取りて見せ進らせんといふ。其時國王花木の心をなし、數千人の兵を差添へ、彼等が隠れ居たる山へ押寄せ、四方を圍み鬨の聲をぞ揚げたりける。杵臼は思設けたる事なれば、静りかへりて音も

せず。程嬰進出で申しけるは、孝明王の太子屠岸賈やまします、程嬰討手に参りたり。雑兵の手にかゝり給はんより、急ぎ自害し給へ。通れ給ふべきに非すと申しければ、杵臼立ちいで、我が君のましますこと隠し申すべきにあらず、待ち給へ、御自害あるべし。さりながら今日の大將軍の程嬰は、昨日までは正しき臣下ぞかし。一旦の依怙に住すとも終には天罰降來り、遠からざるに失せなん果を見ばやと申しける。程嬰これを聞き、時世に従ふ習、昔はさもこそありつらめ、今また變る折節なり。さればにや君も御運盡果て、命も約り給ふぞかし。徒事にかゝはりて命を失ひ給はんより、兜を脱ぎ弓の弦をはづし降参し給へ。古の情を以て助くべしとぞいひける。十一歳のきくわく、討手は父よと知りながら、豫て定めし事なれば、父重代の劔を横たへ、高き處に走上り、如何に人々聞き給へ、孝明王の太子として臣下の手にかゝるべき事にもあらず、又臣下の心



變りを恨むべきにもあらず、たゞ前業こそ拙けれ。さりながら、その家久しき郎黨ぞかし、程嬰出で給へ、日比の好に今一度見参せんといふ。程嬰は我が子の振舞を見て、心安く思へども、忍の涙を進みける。兵怪しくや見るらんと、落つる涙を押止め、人これを聞き給へ、國王の太子として優に使ひたる言葉かな。斯こそありたけれと云ひけるが、さすが恩愛の別、包みかねたる涙の袖絞りもあへず、よその哀を催しつゝ、相従ふ兵はさし當る道理なれば、共に感せぬはなかりけり。其後太子高聲に曰く、我は孝明王の太子生年十一歳、父一所に迎へ給へと云ひも果てず、劔をぬき貫かれてぞ伏しぬ。杵臼同じく立寄りて、健氣にも御自害候ふものかな、某もやがて追付き奉らんとて、腹十文字に掻破り、太子の死骸に轉びかゝりて伏しにける有様、見るに言葉も及ばれず、無慙なりし例なり。さて二人が首をとりて國王に捧ぐ。窺覽ありて喜悅の眉を開き給ふ。今

疑ふ所なく程嬰に心を許し、一の大員にそなへ給ふこそ御運の極とぞ覺えける。さても程嬰は隙を窺ひて敵の國王を討つて、速に主君の屠岸賈を世に立て、再び國王にそなへしかば、元の如く程嬰を相臣に立てらるゝによつて、杵臼きくわくの爲に追善その數をしらす。三年に國ごとく鎮り終りて後、程嬰君に暇を乞ひて曰く、われ杵臼に契約して、命を君に奉ること遅速を争ひしなり。御位これまでなり、今は思置く事なければ、杵臼が草の蔭にての心も耻し、自害仕らんと申す。帝王大きに歎きて是を許すことなし。されども隙をはからひ忍出でて、杵臼が塚の前にゆき、君の御位は思ふまゝなり、いかに嬉しく思ひ給ふらん。われ亦かくの如し、古の契約忘れずといひて、腹かき切り失せにけり。あはれなりし例なり。されば大見、八幡が主の爲に命を輕んじて伊東を狙ひし志、これには過ぎじとぞ覺えける。

九 奥野の狩座の事

さてもりやう三ヶ國の人々は、各々奥野に入り、方より列卒を入れて、野干を狩りけるほどに、七日がうちに猪六百、鹿千頭、熊三十七、鼯鼠三百、其外雉、山鳥、猿、兔、貉、狐、狸、豺、狼の類に至るまで、以上その數二千七百餘ぞ留められける。今はさのみ野干を亡して何にかはせんとして、各々柏ヶ峠にぞ上りける。此ほどの雜掌は伊東一人して暇なかりければ、持せたる酒人々の見参に入れざるこそ本意なけれ。いざや山陣をとりて、頼朝に今一獻すゝめ奉らん。然るべしとて、宗徒の人々五百餘人、峠に下居つゝ用意をこそはせられけれ。

十 同じく酒宴の事

さる程に柏ヶ峠に各々打上りければ、土肥次郎が申しけるは、今日の御酒宴は、かねて座敷の御定ある

べし、若き方々の御違亂もや候ふべき。大庭平太は是を聞き、是は芝居の座敷、誰を上下と定むべき、年寄らう人の盃は海老名殿より始め、若殿ばら瀧口殿より始めよ、此人は何方にぞ申しければ、弟の三郎聞き、兄にて候ふものは、熊倉の北のわきに鹿の來るを目にかけ、深入して未だ見え候へ、家俊こそ参りて候。土屋が申しけるは、三郎殿こそ瀧口殿よ、兄弟の中に誰をかわきて隔つべき、其盃三郎殿より始めよといふ時、大庭聞き、瀧口殿は年こそ若けれどもさる人ぞかし、今來るといふを少の間待たぬか、左右なく肴あらずなとて、奥野の山口の方へ迎をやり、瀧口おそしと待つ所に、瀧口は熊倉の北のわきを過ぐるに、埒の外に熊の大なるを見付けて、もとの繁へ入れじと、平野に追下す所に、瀧口大なる伏木に馬を乗懸け、眞逆に馳倒す馬を顧す、弓のもとを左右の鎧に乘懸かり、草隠に矢頭すこし延びたりけるを、三人張に十三束の大鳴鏑番



ひ、拳上に引懸け、ひやうと放つ。遠鳴して右のを  
り骨二つ三つはらりと射削り、鏑は割れて颯と散り  
ければ、鏑は岩にがしと當る。熊は手を負ひ瀧口に  
猛りてかゝる。列卒の者ども是を見て、四方へばつ  
とぞ逃げたりける。瀧口二の矢を番ひ絞返して、月  
の輪を外さじと、ゐかけて射ければ、熊は少しも動  
かず、矢二つにて止りけり。その後列卒の者ども呼  
寄せ、熊をかゝせて人々のおり居たる峠に打上り、  
急ぎ馬より下り、看たづね候ふとて深入仕り運參  
申すなり、御免候へといひて、笠をも脱がず鞆をも  
解かず、行際ながら、弓杖つきて立ちたり。吉川三郎  
俣野に射組みてありけるが、是を見て、瀧口殿は聞  
きしより見増して覺ゆるものかな、あつばれ男かな  
と賞めければ、座敷に居煩ひたり。まことに氣色顔  
にて、何事かな力業して、なほ賞められんと思へど  
も、芝居の事なれば叶はでありけるを、弟の瀧口の  
三郎と船越の十郎が居たりける間に、青めなる石の

高さ三尺ばかりなるを、よりに持たばやと思ひけれ  
ば、する／＼と歩みけるを見て、弟の家俊立たんと  
す。膝を押へてはたと睨みて、弓矢の座敷をかたざ  
るとは、我が居たる家をいでて他所に居渡り、其家  
に人をおくこそ座敷かたざるとは云へ。これ此處な  
る石の二人が間にありて、つまりやうのにくさにこ  
そと云ひて、右の手を差延べて、後さまへ押しけれ  
ば、大石が押れて谷へとうと落行く。海老名の源八  
が是を見て、東八ヶ國のうちに男子持ちたらん人  
は、瀧口殿をよき物宵にせよ。器量といひ弓矢と  
りては樊噲張良なり、あつばれ侍やと讃られ、い  
よ／＼氣色をまし、老の末座敷より進出で申しける  
は、只今の盃もさる事にて候へども、あまりにもど  
かしく覺え候。大なる盃をもつて、一つづつ御廻  
し候へかして申しければ、瀧口殿の仰こそ面白けれ  
とて、伊東次郎貝といふ貝を取出し、此貝は日本三  
番の貝とて院へ參らせたりしを、公家には貝を御用

ゐなき事なれば武家に下さるゝ。太郎貝をば秩父に  
下さる。提子五つぞ入りける。二郎貝をば三郎に下  
さる。しんすけ賜つて土肥の次郎にとらす。殿上  
を許されたる器物とて、秘藏して持ちけるを、折節  
河津三郎土肥が智になりて來りしを、引出物にした  
りけり。内はおれのなりにして、外は梨地に蒔きて  
いそなりにめをさしたり。提子三つぞ入りける。是  
を取出し瀧口がもとより始めて、二度づつぞ廻しけ  
る。五百餘人のもちたる酒なれば、酒に不足ぞなか  
りける。後には亂舞して踊りはねてぞ遊びける。海  
老名の源八盃ひかへて申しけるは、これはめでたき  
世の中を、現とも定めがた、昔語にならん事こ  
そ悲しけれ。老少不定といひながら、若は頼みある  
ものを。若殿原の様に舞歌はんと思へども、膝震ひ  
聲も立たず、りやうせきがつかより出でて、はんら  
うが茫然とせしやうに、酒もれや殿原。あはれ若く  
ありし時は、是程の盃二三十飲みしかども、座敷に

臥す程の事はあらねども、老の極やらん、腰膝の立  
たざるこそ悲しけれ。偏に白居易が昔もかくや老い  
にけん、今更思出でられて、哀れにこそ覺えけれ。  
十一 同じく角觥の事  
さる程に、古を思ふに秀貞が若盛には、鷹狩川狩の  
歸足には、力業角觥がけこえ面白けれ。若き人々角  
觥とり給へ、見て遊ばん、見物には上やあるべきと  
云ひければ、伊豆國の住人三島入道將監居丈高にな  
りて、石轉の瀧口殿と相澤の彌五郎殿出でてとり  
給へ、これこそ合比の力と聞け、さもあらば入道い  
でて行司に立たんと云ふ。瀧口聞きて、坂東八ヶ國  
に強き者はなきか。斯程の小男を相手にさゝるゝ  
は、馬の上徒立なりとも、脇挿み立たんに働かさじ  
と云ひければ、彌五郎聞きて、伊豆、駿河、武藏、相模  
に強き者はなきか、瀧口がせいと力を羨むは下藩の  
好む所にこそ。器量によりて荷をば持て。侍は背小



く力弱けれども、鎧一領肩に引懸け、弓押張り矢搔負ひ、よき馬に打乗りて戦場に驅出でて、思ふ敵に引組み、兩馬が間に落重り、膽まさりて腰の刀をぬき、下に伏しながら大の男をひつかけ、草摺を疊上げ、急所をひまなく刺して跳返し、抑へて首を取る時は、大の男ものならずと、嘲笑ひてぞ申しける。瀧口たまたぬ男にて、首を取るか取らるゝか、力はほかにもあらばこそ。いざや老の御肴に力競腕角力、一番とらんと云ふまゝに、座敷を立ち直垂を脱ぎ、何程の事の候ふべき、しや肋骨二三枚攔破りて捨つべきものをとて、つつと出でけり。彌五郎も、心得たり、ものゝしや、力拳の堪へん程は、命こそ限よといひ座敷を立つ。一座の人々これを見て、あはや事こそ出来ぬと見るほどに、近くありける相澤に申すやう、あまり早し瀧口殿、角觥は先づ小童冠者ばらにとらせて、取上げたること面白けれ。大人氣なし瀧口殿、止り給へと引据ゑたり。吉

川これを見て、彌五郎殿もまづ抑へよ、相澤が弟の彌七郎に出でよといふ。少し辭退に及びしを、船越引立て、手綱とりかへ出しけり。歳におきては十五なり、姿をものに譬ふれば、まだ聲若き鶯の、谷より出づるもかくやらん。誰をか相手にさすべきと、座敷をきつと見廻しければ、瀧口が弟の三郎出でよといふ。言葉の下より出でにけり。歳におきては十八なり、何れも角力は上手なれば、各よさしよりて褌取したる有様は、春待兼ねて咲く梅の、雪を含める如くなり。我れ人力は知らねども、雲吹立つる山風の、松と櫻に音たて、鳥も驚く梢かと、諸人目をこそ覺しけれ。彌七は力劣れども、手あひはましてぞ見えにける。三郎は力は優りてありければ、組まんとのみにて、さしつめ結べば捨て、脱け、投ぐれば驅けて廻りしは、桃華の節會の雞の、心を碎き羽をつがひ、勝負を争ふ闘合も、是には過ぎじとぞ見えたりける。老若座敷にこらへかね、天晴うき

世の見事やと、上下暫くのめきて、東西さらに靜らす。されど彌七は地下へ押懸けられ、とろばしりて素首をつかれ、終に彌七ぞ負けたりける。兄の彌六つつと出で、三郎をはたと蹶て、仰様に打倒す。瀧口無念に思ひつゝ、弟の三郎が未だ起きざる先に跳出で、大力なりければ、彌六は手にもたまらず負けにけり。兄の彌五郎弟二人負かして安からずと思ひ、袴の腰解くを遅しと引切り、手綱二筋釋合せ強くをさめ走出で、近々と差合ひ力ひきて見ければ、大の男が踏張りて、少しも動かされず。一定我も負けぬべし。實にや角觥は力によらず、手に優れば、みぎは優りの相手をも打つものと思出して、相澤右の拳を握固め、瀧口が鬢の外、切れてのけと打ちければ、瀧口打たれて左右の拳を打返す。其後負けじ劣らじと、手を放ち張合ひける。今は角力はとらで、偏に當座の口論とぞ見えける。兩方さへんとするところに、彌五郎隙なくつつと入り、瀧口が小股

をかいて、はなしろに押据ゑたり。勢ひたる瀧口あへなく負けしかば、暫く角觥ぞなかりける。彌五郎は高言しつる瀧口に勝ちて、百千番の負ものならず、是に勝つこそ嬉しけれ。何者なりともと思ふ所に、桂山の又七出でて、手にも溜らず負けて後、究竟角觥五番まで勝ちて立つたる有様は、勢餘りてぞ見えける。爰に相模國の住人柳下の小六郎出でて、相澤の彌五郎を初として、よき角觥六番勝つ。駿河國の住人竹下の孫八出でて、小六郎を初として、よき角觥九番うつて入らんとする所に、大庭が舍弟侯野の五郎出でて、孫八を初としてよき角力十番勝ちければ、出でて取らんといふものなし。駿河國高橋の忠六、いざや取らんといふ。側にありける海老名秀貞、是こそ侯野五郎よ、道理にて打ちけるぞや。景久聞きて、角力が絶えて無からんこそと云ひければ、平太是を聞き、侯野も手一つ、我も手一つ、臆してばし負けゝるか、彼體の角力をば十八ばかり



もと一掴に思ひ、著る物を脱置き、手綱かきまうけ、負くれば乗越え、移れば入替へ、息をもつがせず、隙をもあらせず責倒せ。此儀面白しとて十人ばかり並居て、負くればつと出で、うつれば跳越え責めけれども、究竟の上手の大力なれば、續けて二十一番勝ちけり。其時土肥の次郎實平座敷を立ち、爪紅に日を出したる扇を開きて、俣野を暫しあふぎて、よき御角力かな、天晴實平が年十五も若くば、出でて取らばやといふ。俣野聞きて、何かは苦しがるべき、出で給へ、一番とらん、角力は年により候はずと云ひければ、土肥は怒に言葉をかけて、おめくといはれて、取るより外の事はなし。伊東は三浦に親しく、河津は土肥が智なり。土肥が今日の耻辱は、此一門に離れじと思へば、伊東次郎が嫡子河津三郎祐重をば、父伊東より人重く思ひければ、無二無三の遊なれども、出でてとれといふ人もなし。老の末座にありけるが、座敷を立ちて舅の土肥次郎に嘯き

けるは、今日の御酒盛には老若の嫌なく候に、などや祐重一番とも承り候はず、空しく歸り候は、若きもの、老いすげしたるに似て候。御はからひ候へ、一番といひければ、實平聞きて、俣野の言葉に苦々しさにぞ取らんと云ふらん。さりながら智を負しては、面目なしと思ひけん、返事にもおよばで赤面してぞ居たりける。父伊東これを聞き、子ながらも、透ふ折節、此言葉を聞き、神妙に申したり、出でて取れといひければ、直垂ぬぎ置き、白き手綱二すぢ縋合せ、堅くをさめて出でんとす。伊東方の者出でて、御角紙に參らん俣野殿といふ。景久聞きて腹を立て、角紙はこれに候ふぞ、出合せ候へといふは常の事ぞかし。手角紙の座敷にて、左右なく相手の名字よぶ事なし。氏といひ器量といひ、河津にや負くべき。小脇おし折り捨つべきものをと、笑ひて出づるを見れば、菩薩なりにして色淺黒く、丈は六

尺二分、歳は三十一にぞなりける。又河津が姿は、さし肩にして、顔の骨あれて、頸太く頭小さく、すそぶくらに、後のをり骨臍の下へ差込み、力士なりにして、丈は五尺八ぶん、歳は三十二なり。差寄り褌取りひし／＼として押離れ、河津思ひけるは、俣野は聞きつるに似ず、さしたる力にてはなかりけり、今日の人々の多く負けゝるは、酒に酔ひたるか臆しける故なるべし。今度は手にも立つまじきものをと思ひけるが、心をかへて思ふやう、さすがに俣野は角紙の一番勤に都へのぼり、三歳の間都にて角紙に馴れ、一度も不覺を取らぬ者なり。その故に院内の御目にかゝり、日本一番の名を得たる角力なり。今こゝもにてもの、手もなく負さん事は、却りていひ甲斐なしと思へば、二度めには差寄り、左右の脇を掴んで、右手におはしますさう人の上に押懸け、膝をつかせて入りにけり。俣野は唯も入らずして、此處なる木の根に蹴躓きて、不覺の負をぞしたりけ

るや、今一番取らんといふ。大庭是を聞き走出で、げに／＼これに木の根あり、真中にて勝負し給へと いひければ、伊東聞きて申しけるは、河津が膝少し流れて見え候ぞ。ねぎりの角紙ならばこそ意趣もあらめ、唯一座の一興に負け申して面白し、出合ひ申せと云ひければ、河津はやがてぞ出でにける。俣野も出でんとしたりしを、一族ども、いかに取るとも勝つまじきぞ、唯このまゝにて入り給へ。論の角紙は勝負なし、勝ちたるには優るぞかし。此度負けば二度の負なるべしといひければ、俣野が云ふやう、河津は力は強く覺ゆれども、角紙の故事は候はず、御覽せよと云捨て、なほも出でんとする所を、暫し留めて云ひけるは、河津が手合をよく見れば、御分にみきは優の力なり。彼等體の角紙をば、左右の手を挙げ、爪先を立て、上手にかけて待ち給へ。敵も上手に目をかけて、仲さんと寄る所を小臂を打擧げ、違ひざまに四ついを取り、足をぬきて跳廻れ。



大力も跳ねられて足の立てどの深く所を、捨て、足  
をとりて見よ、組んでは叶ふまじきぞ。若しまた組  
まで叶はずば、打絡にしはとかけて、鬚を地を掃  
かせ、一跳跳ねてしと、打て、何條七離八離は見苦  
しきぞ。侍角力と申すは、寄るかとするれば勝負あり、  
餘に早きも見分けられず。又かやうのひね者をば、  
煩なくのしよりて、小首責に責めてせこめて、廻  
る所を大逆手に入れて、かい拵りて蹴捨て、見よ、  
真逆様に負けぬべしと、細々と教へければ、心得た  
りとして出合ひけり。教の如くに爪先を立て、腕を舉  
げ、隙あらばと狙ひけり。河津は前後角觥は是が始  
なれば、やうもなくするくと歩寄り、俣野がぬけ  
んとあひしらふ所を、右の腕をつつと延べ、俣野が  
前股を掴んでさしのけ、荒くも働かば手綱も腰も切  
れぬべし。暫くありてむすと引寄せ、目より高く差  
上げ、半時ばかりありて、横ざまに片手を放ちてし  
と、と打つ。俣野は懸て起直り、角力に負くるは常

の慣、何ぞ御分が片手業はと云ひければ、河津云ひ  
けるは、以前も勝ちたる角觥を御論候ふ間、今度は  
真中にて片手をもつて打ち申したり。未だ御不審や  
候ふべき、御覽じつるか人々といふ。大庭これを見  
て、童に持せたる太刀押取り、するりと抜きて飛ん  
で懸る。座敷俄に騒ぎばつたと立つ。伊東方に寄る  
者もあり、大庭方による者もあり、兩方さへんと下  
塞り、銚子盃踏割り酒肴をこぼす。雑兵三千餘人ま  
でも、軍せんとして聳きけり。兵衛佐殿の由御覽じ、  
いかに頼朝に情を捨て、仇を結び給ふか、大庭の人  
人と仰せられければ、大庭の平太承り、田舎住居の  
者共の、出仕慣れ候はで、かゝる狼藉を仕り候。角  
觥は負けても耻ならず、我が方人とは云ふべから  
ず、一々にしるし申すべきぞ、後日に争ふなと怒り  
ければ、大庭の鎮め給ふ上はと静りけり。伊東はも  
とより意趣なしとて、懸て面々にこそ静りけれ。こ  
れや瓊瑤は少きを以て美なりとし、石礫は多きを以

て賤とす。人多しと雖、景信が言葉一つにてぞ静り  
ける。かゝる所に祐經が郎黨ども、彼等に交り窺ひ  
けるが、あつばれ事の出来よかし、間近くよりて打  
たんとする由にて、伊東殿をおつさまに、射殺さん  
とて囁きける。七日が間夜晝つきて窺へども、然る  
べき隙なくして、狩場既に過ぎければ、各、空しく  
歸らんとす。小藤太申しけるは、さても一薦殿の御  
心を盡して、今や今やと待ち給ふらん、徒に歸らん  
事こそ口惜しけれ。いざや思切り、兎にも角にもな  
らんと云ひければ、八幡三郎が申しけるは、暫く功  
を積みて見給へ、いかでか空しからんとぞ申しけ  
る。

十一 費長房が事

さるほどに、功を積みて望かなへる譬あり。昔大國  
に費長房といふ者あり。戦術を習得て暗き所もなか  
りしが、天に上る術を習はずして、未だ空しく凡夫

に交りありきけり。或時商用の事ありて、長安の市  
に出でて商人に伴ひしに、ある老人腰に壺をつけて、  
此者は市に交りけり。知音は知る理にて、此者凡  
人ならずと目を離さで見ると、此老人側ゆき、  
腰なる壺を下しその壺に出入りけり。さればこそ仙  
人なれとて、其人の行方につきて行きて、費長房の  
曰く、かの仙人に仕へんとて三年ぞ仕へける。或時  
老人の曰く、汝は如何なる志ありて、三年まで一言  
業も違へず我れに仕へけるぞや。費長房聞きて、我れ  
戦術を習ふと雖、天に上ることを知らず、老人の壺  
に出入り給ふことを教へ給へと云ひければ、易き事  
なり、我が袖に取附けと云ふ。即ち取付ければ、  
二人ともにかの壺の中へと飛入りぬ。此壺の中にめ  
でたき世界あり、月日の光は空に和ぎ、四方に四季  
の色を顯し、百二十丈の宮殿樓閣あり、天にて聖衆  
舞ひ遊ぶ。鴻雁鴛鴦の聲和にして、池には弘誓の  
舟を浮べり。よく見廻りて、今は出でんといふ。



老人竹の杖を與へて、是をつきて出でよといふ。即ちつくと思へば、時の間にをしみつといふ所に到りぬ。此杖を捨てければ、即ち龍となりて天に上りぬ。費長房は鶴に乗りて天に上りけり。これも功を積める故なり。三年までこそ無くとも、待ちて見よとぞ申しける。

十三 河津三郎討たれし事

さればこの歸足を沮ひて見ん。然るべしとて、道をかへて先に立ち、奥野の口、赤澤山の麓、八幡山の境にある切所を尋ねて、椎の木三本小橋にとり、一の射翳には大見小藤太、二の射翳には八幡三郎、巧手なれば餘さじものをとて立つたりけり。各々待懸ける所に、一番に通るは秦野右馬允、二番に通るは大庭三郎、三番に通るは海老名源八、四番には土肥次郎、後陣遙に引下りて、流人兵衛佐殿ぞ通られける。敵ならねば皆遣過しぬ。此次に伊東が嫡子河津

三郎ぞ來りける。面白くこそ出立ちたれ。秋野の摺盡したるあひくくに、引かきしたる直垂に、斑の行膝裾たぶやかにはきなし、鶴の本白にて作いだる白拵の白矢、笠高に負ひなし、梅檀籐の弓の真中とり、萌黄裏つけたる竹笠、木枯に吹きそらせ、宿月毛の馬の五寸あまりの大なるが、尾髪飽くまで縮みたるに、梨子地に蒔きたる白覆輪の鞍に、連赤鞞の欸冬色なるをかけ、含轡に紺の手綱をいれてぞ乗つたりける。馬も聞ゆる名馬なり、主も究竟の馬乗にて、伏木悪所を嫌はず、さしくれてこそ歩ませけれ。折ふし乗替一騎もつかざれば、一の射翳の前を遣過す。二の射翳の八幡三郎は、もとより騒かぬ男なれば、天の與を取らざるは却つて科を得るといふ、古き言葉を出でずは射損すべき、射翳の前を三段ばかり左手の方へ遣過して、大の尖矢差番ひ、よつびき、暫し固めてひやうと放つ。思も寄らで通りける河津が、乗つたる鞍の後の山形を射削り、行

膝の著際と前へつとぞ射通しける。河津もよかりけり。弓取直し矢とつて番ひ、馬の鼻を引返し四方を見廻す。智者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は恐れずと申せども、大事の痛手なれば、心は猛く思へども、性根次第に亂れ、馬より真逆様に落ちにけり。後陣にありける父伊東次郎は、是をば夢にも知らずぞ下りける。比は神無月十日餘の事なれば、山めぐりの村時雨、降りみ降らすみ定めなく、立寄る雲の絶えなく、濡れじと駒を早めて、手綱搔繰るところに、一の射翳にありける大見小藤太、待ちうけて射たりけれどもしるしなし。左の手のうちの指二つ、前のしほでの根に射立てたり。伊東は聞ゆる兵にてありければ、敏に二つの矢を射させじと、大事の手にもてなし、右手の鎧におり下り、馬を小橋にとり、山立ありや先陣は返せ、後陣は進めと呼りければ、我れ劣らじと進めども、所しも悪所なれば、馬のさくりを辿る程に、二人の敵は逃延びぬ。くまも

なく待ちけれども、案内者にて思はぬ茂の途をかへ、大見の莊にぞ入りける。危かりし命なり。伊東は河津三郎が臥したるところに立寄りて、手は大事なるかと問ひけれども音もせず。押動して矢をあらく抜きければ、いよ／＼前後も知らざりけり。河津が頭を父伊東が膝にかきのせ、涙を抑へて申しけるは、こは何となりゆく事ぞや、同じ中る矢ならば、など祐親には中らざりけるぞ、齡傾き今日明日をも知らざる憂身なれども、和殿を持ちてこそ、公方私心安く後の代かけても頼しく思ひつるに、敢なく先立つことの悲しさよ。今より後誰を頼みてあるべきぞ。汝を留置き、祐親先立つものならば、思置く事よもあらじ、老少不定の別こそ悲けれとて、河津が手をとれ、懐にいれ、さめ／＼と泣きけり。稍ありて、いかにや定業なりとも、矢一つにて物をも云はで死ぬるものやあるといひて押動しければ、其時祐重苦しげなる聲にて、かくは度々仰せらるれど



も、誰とも知り奉らず候ふといふ。土肥次郎申しけるは、御分の枕にし給ふは父伊東の膝よ、かく宣ふも伊東殿、今またかやうに申すは土肥次郎實平なり、敵や覚え給ふと問ひければ、やゝありて眼を開き、祐親を見参らせんとすれども、今はそれもかなはず、誰々も近く御入り候ふか、御名残こそ惜しく候へて、父が手に取付きにけり。伊東涙を抑へて申しけるは、未練なり汝敵は覚えすやといふ。工藤一筋こそ意趣あるものにて候へ。それに只今大見と八幡見え候ひつれ、怪しくおぼえ候。従ひ候ひては、祐親在京して公方の御意さかりに候ふなる、しかれば殿の御行方いかいと、黄泉の障ともなりぬべし。面々頼み奉る、幼いものまでしといひもあへず、奥野の露と消えにけり。無慙なる有様とも、申すばかりぞなかりける。伊東は餘りの悲しさに、暫は膝を下さずして、顔に顔をさしあて口説きけるこそ哀なれ。や殿さけ河津、頼方なき祐親をすて、何處へ行き給

ふぞ、祐親をもつれて行き候へ、母や子供を誰に預けて行き給ふぞ、情なの有様やと歎きければ、土肥次郎も河津が手を取り、實平も子とては遠平ばかりなり、御身もちてこそ、月日の如く頼しかりつるに、斯様になりゆき給ふことよと、泣悲むこと限なし。國々の人々も同じく一つ所に集りて、互に袖をぞ濡しける。さてあるべきにあらざれば、空しき形骸を昇せて家に歸りければ、女房を始として、あやしの賤の男賤の女に至るまで、歎の聲せんかたなし。さてもかの河津三郎祐重に男子二人あり、兄は一萬とて五つなり、弟は箱王とて三つにぞなりにける。母思の餘に、二人の子供を左右の膝に据置き、髪搔撫で泣くく申しけるは、腹のうちの子だにも、母のいふ事をば聞知るものを、まして汝等は五つや三つになるぞかし、十五十三にならば、親の敵を討ちて妾に見せよと泣きければ、弟は聞きしらず、手慰して遊居たるばかりなり。兄は死したる父が顔をつ

く守りてわつと泣きしが、涙を抑へて、いつか大人しくなりて、父の敵の首とつて、人々に見せまゐらせんとて泣きしかば、知るも知らぬもおしなべて、袖を絞らぬ人はなし。なほも名残を慕ひかね、三日までぞ置きたりける。黄泉幽冥の道は如何なる所なれば、一たび去りて二度と歸らぬ習なれば、力及ばず、泣くく送出し、夕の煙となしにけり。女房一つ煙とならんと悲みけり。伊東次郎申しけるは、恩愛の別夫妻の歎、何か劣るべきにはあらねども、憂世の習ひ力及ばず候。親に後れ夫妻に別るゝごとを命を失ふものならば、生老病死もあるべからず。別は人毎の事なれども、思ひすくれば自ら忘るゝ心のあるぞとよ。憂きにつけて身を全くして、後世菩提を弔ひ給へと、さまざまに慰めければ、實に理なれども、差當りたる悲なればとて、悶焦れけり。夫の別は昔も今も多きところなり、別の涙袂に留りて乾く間もなし、後先をも知らぬ幼きものどもに打

添へて、身さへ只ならず、様を變へんと思へども、尼の身にて過ぐさんところの體も見苦し、また淵河へ沈まんと思ふにも、此身にて死しては罪深かるべしと聞けば、ともかくにも女の身ほど、心憂きものはなしと口説きたて、起臥に泣くより外の事ぞなき。一日片時も忍ぶべき身にてなかりしが、明けぬ暮れぬとせし程に、五七日にもなりにけり。

十四 伊東が出家の事

かくて父伊東次郎は逆なる事なれども、彼の者の菩提を弔はんが爲に出家して、六道にあて、三十六本の卒都婆を造立し奉る日、聴聞の貴賤男女數を盡して参詣する所に、五つになりける一萬が、父の墓目に鞭を取添へて、これは父のものとして提げければ、母こんを見て呼寄せて、亡人のものをば持たぬ事ぞ、みなく捨てよ、行末はるかのものぞかし。汝が父は佛になり給ひて、極樂淨土にましますぞ、妾もつ



ひに參るべしと云ひければ、一萬喜びて、佛とは何ぞ、極樂とは何處にあるぞや、急ぎましませ我も行かんとせめければ、母は云ひやる方もなくして、卒都婆の方に指をさして、かれこそ淨土の父よといひければ、一萬弟の箱王が手をひき、いざや父御の許にまゐらんと急ぎけれども、箱王は三つになりければ、歩むに果もゆかず。急ぐ心に弟をすて、卒都婆の中を走廻り、空しく歸りて母の膝の上に倒臥して、佛の中にも我父はましまさずと泣きければ、乳母も俱に泣居たり。其日の説法の砌より、一萬が振舞にこそ、貴賤袂を濡しけり。四十九日には八道を供養すとかや。

十五 御房が生るゝ事

さて河津が佛事過ぎしかば、その次の曉がたに、女房例ならざれば、人々やがて心得しかば、九月半と申すには、産の紐をぞ解きたりける。實に此程の

歎にはいかゞと案じけるに、何の恙もなく男子を生みけり。母申しけるは、おのれは果報すくなきものかな、今少し疾く生れて、などや父を見ざりけるぞや。蜂蟻といふ蟲こそ朝に生れて夕に死するなれ、汝が命かくの如し。妾も尼になり山々寺々の麓に閉籠り、花を摘み水を汲み、佛に供へ奉り、汝が父の孝養にせんと思へば、身にはそへざるぞ、ゆめく怨むべからずとて、頓て棄てんとせし所に、河津三郎が弟伊東九郎祐清といふものあり。一人も子を持たざりければ、此事を聞き女房いそぎ參りて、まことや今の幼い人を棄てんと仰せらるゝ由を仄聞きたり、如何でかざる事あるべきぞ。亡人の形見にも見もし給はず、棄て給はんこと罪深かるべし。また善惡の事も、それを節と思へば、折々に思出す事の端になるものを、而も男子にてましませば、妾にたび給へ、養立て、一家の形見にもせんといひければ、此身の有様にて身に添ふること思ひも寄らず候。さ

やうに思召さばとて取らせける。頓て心安き乳母をつけて養育す。名をば御房とぞいひける。さる程に忌は八十日、産は三十日にもなりにけり。百ヶ日に當らん時、必ず尼になりぬべしとて、袈裟衣をぞ用意したりける。

十六 女房曾我へうつる事

さて河津が女房は、月日の重るに従つて、いよく出家遁世の心を思立ちければ、伊東入道この由を傳聞きて、人して申しけるは、まことや、妾を變へんとし給ふなると聞く。子供をば誰に預け育めとてさやうの事をば思立ち給ふぞ、考衰へたる祖父や祖母を頼み給ふかや、それさらに叶ふべからず。三郎なればとて、幼いものども數多あれば、露ほども疎ならず、偏に祐重が形見とこそ思ひ奉れ。如何なる有様にて身を窺さずして、幼い者どもをも育て人となし給へ。されば今更に疎き方へましまさば、我

も人も見奉ることかなふまじ。相模國曾我太郎と申すは、入道所縁あるものにて候。折ふし此程、年比の妻女におくれて、歎いまだ晴れやらず候ふと承り候。それへやり奉るべし、自ら心をも慰み給へ。入道があたりなれば、隔の心はあらずと細々とぞいひける。さて女房には頓て人をつけ、厳しく守らせければ、尼になるべき隙もなし。即ち入道、曾我太郎が許へ此由委しく文にかきて遣しければ、祐信文を見て大に喜び、やがて使と打連れ伊東へこして、子ども諸共に迎取りて歸りけり。いつしか斯る振舞は、返すくも口惜しけれども、さる事なれば怨みながらも月日をぞ送りける。是を以て昔を思ふに、せいぢよは夫の爲に禁獄に籠められ、はくえいは夫に後れ胡の栖處になれしも、心ならざる怨しさ、今更思ひしられたり。



曾我物語卷第一終

曾我物語卷第二

一 大見、八幡を討つ事

三千世界は眼の前に盡き、十二因縁は心の内に空し、  
 憂世に住むも捨つるも安からぬ命、いつまで生存へ  
 て、あらましの身に暮さまし。伊東入道は何につけ  
 ても身の行末の味氣なくして、子息の九郎祐清を呼  
 びよせて、入道が生きての孝養と思ひ、大見、八幡が  
 首を取りて見せよといひければ、承りぬ、此間も内  
 内案内者をもつて見せ候へば、他行のよし申し候。  
 もし歸り候は、告知らすべきよし申す者の候に依つ  
 て、待ち候。餘し候ふまじとて座敷を立ちぬ。幾程  
 なくして來りぬと告げければ、家の子郎黨八十餘人、  
 ひた兜にて鹿野といふ所へ押寄せたり。八幡三郎は  
 さる者にて、思設けたり、何處へか引くべきとて、  
 親しきものども十餘人籠置きたりしが、矢ども打散

らし、差詰め引詰めとり、散々に射ける。矢庭に  
 敵あまた射落し、矢種つきしかば、さし集りて、主  
 の爲に命を捨つる事、露ほども惜しからず、所詮の  
 望たりぬと云ひて、刺違へく残らず死にけり。八  
 幡は腹十文字に掻破り、三十七にて失にけり。即ち  
 大見小藤大が許へ押寄せたり。この者はもとより心さ  
 がりたる者にて、八幡が討るゝを聞きて、取物も取  
 敢へず落ちたりしを、彼境に追詰めて搦取りて、川  
 の端にて首を刎ねけり。九郎は二人が首を取りて、  
 父入道に見せければ、ゆゝしくも振舞ひたるとぞ感  
 じける。曾我にありける河津が妻女も、喜ぶこと限  
 なし。祐清は入道が憤をやめ、兄が敵を討ちし孝  
 行、一方ならぬ忠とぞ見えける。偕も八幡三郎が母  
 は、莆美入道寂心が乳母子なり。八句にあまりける  
 が、残りて、思の餘に口説きけるは、主君のた  
 めに命を捨つる事は本望なれども、この亂の起を尋  
 ぬるに、過ぎにし親の讓を背き給ひしに依つてなり。



然るに寂心世にましくし時、公達あまた並据ゑて、酒宴なかばの折節、持ち給ひたる盃の中へ、空より大きな鼯鼠一つ落入つて、御膝の上に飛下りぬと見えしが、何處ともなく失せぬ。希代不思議なりとて、やがて勘へさするに、大なる表示、慎み給へと申したりしを、さしたる祈禱もなくして過ぎ給ひぬ。幾程なくして寂心は隠れ給ひけり。さればにや白河法皇も鳥羽の離宮に渡らせ給ひし時、大なる鼯鼠参りて啼騒ぎけり。博士に御尋ありければ、三日の内の御歎、または御歎とぞ申しける。それにあはせて申す如く、次の日鳥羽殿を出し奉りて、八條鳥丸へ入れ奉りて、これ御歎とぞ申しける。次の日、皇子高倉宮御謀叛あらはれ、奈良路にて討たれさせ給ひぬ。かやうの慎、不思議なりける次第なり。

### 二 泰山府君の事

往昔大國に大王あり。樓閣を好み給ひて、明暮れ宮

殿をつくり給ふ。中にもしやうかう殿と號して、高さ二十丈の高樓を建て、柱には赤銅、桁梁は金銀なり。軒に珠玉瓔珞をさげ、壁には青蓮の華鬘をつけ、内には瑠璃の天蓋をさげ、四方に瑪瑙の幡を吊り、庭には珊瑚琥珀を敷滿てり。吹く風降る雨のたよりに沈麝の匂に漂へり。山を築きては亭を構へ、池をほりては船を浮べ、水に遊べる鴛鴦の聲、偏に淨土の莊嚴に同じ。人民こそりて圍繞す。佛菩薩の影向もこれには如かじとぞ見えし。されば大王玉樓金殿にいたり常に遊覽す。ある時大講堂の柱に鼯鼠二つ來りて、啼騒ぐこと七日なり。大王怪み給ひて、博士を召して占はしむるに、勘へて奏問す。この柱の中に七尺の人形あり、大王の貌を悉くつくり寫して、調伏の壇をたて幣帛供具を備へたり、割りて見給へ、東夷七百人ありぬべし、亡すべしといふ。即ち大王上人に申して、めでたき聖を請じ奉り、かの柱をわりて見給ふに違はず、事も凄じきといふも餘

あり。やがて壇を破り、勘文にまかせて、いろ／＼の諸人を集め、その中に怪しきを召捕り拷問しければ、悉く白狀す。依つて七百人の敵を悉く召捕り、三百人の首を斬り給ひぬ。殘四百人斬らんとする時、天下暗闇になりて、夜晝の境もなくして色を失ふ。人民道路に倒伏す。大王驚きて曰く、朕露ほどの私ありて彼等が首を斬ることなし、下として上を嘲り下剋上のいましめ、後の世を思ふ故なり。もしまた朕に私あらば天これを誡むべし、是を測らんとて、三七日飲食を止めて高床に上り、足の指を爪立て、一命を此處にて消えなん、もし誤なくば諸天憐み給へと祈誓して、仁王經をかゝせられけり。三七日に満する時、七星眼前に天降り見え給ふ。やゝありて日月星宿光を和げ給ふ。さればこそ政に横儀はなかりけるとて、殘る四百人をも斬り給ひぬ。茲にまた博士參内して奏する。大敵滅果て、御位長久なるべきこと餘儀なし、されども調伏の大業、その

こう残りて恐し。所詮に天降り給ふ七星を祭り、しやうかう殿に寶を積み一時に燒棄て、災難の疑を止むべしと申しければ、左右に及ばずとて、たちまちに上、件の曜宿を繰り、諸天を請じ奉りて、かの殿どもを燒棄てられにけり。さてこそ今の世までも、鼯鼠啼騒げば謹みて水をさゝぎ咒ふ、此儀に依つてなり。されば七百人の敵亡び、七星眼前に降り光を和げ給ふこと、七難即滅七福即生の明文に適ひぬるをや、今の泰山府君の祭これなり。大王かの殿を燒き政をし給ひて、御位長生殿に榮え、春秋を忘れて、不老門に日月のかけ静にめぐり、吹く風枝を鳴さず、降る雨壤を動かさず、永久の御代に榮え給ひけるとかや。めでたかりし例なり。

### 三 頼朝、伊東におはせし事

抑、兵衛佐殿御世になり給ひなば、伊東北條として左右の翼にて、いづれ勝劣あるべきに、北條の末は榮



え、伊東の末は絶えける。由來を委しく尋ぬるに、頼朝十三の歳伊豆國に流されておはしけるに、かの兩人を打頼みて、年月を送り給ひけり。然るに伊東次郎に女四人あり。一は相模國の住人三浦介が妻なり、二をば工藤一龍祐經に相具したりしを、取返して土肥彌太郎にあはせけり。三四は未だ伊東が許にぞありける。中にも三は美人の聞えあり。佐殿聞召して、しほのひる間のつれづれと、忍びて襦を重ね給ふ。頼朝御志淺からで年月を送り給ふ程に、若君一人出來給ひけり

四 若君の御事

佐殿若君いでき給ひし事を、なのめならず悦び思召して、御名をば千鶴御前とぞつけ給ひける。つらつら往事を思ふに、舊主が住ひし古風の葺しき國なれども、勸勤を蒙りて、習はぬ鄙の住居の心地ぞありつるに、この者出來たる嬉しさよ。十五にならば秩

父足利の人々、三浦、鎌倉、小山、宇都官を相語ひ、平家に懸合せ、頼朝果報のほどを試さんと、もてなし思ひ傳き給ふ。かくて歳月を経るほどに、若君三歳になり給ふ春のころ、伊東京より大番勤めて下りしが、暫は知らざりけり。ある夕暮に花園山を見ておはしければ、折節若君乳母に抱かれ前裁にあそび給ふ。祐親これを見て、かれは誰ぞと問ひけれども、返事にも及ばず遁げにけり。怪しく思ひて、即ち内に入り妻女にあひ、三つばかりの子のものゆゑしきを抱きて前裁に遊びつるを、誰ぞと問へば返事もせで遁げつるは誰にやと問ふ。繼母の事なりければ、折を得て、それこそ御分の在京のあとに、いつき傳き給ふ姫君の、妾が制するを聞かで、美しき殿して設け給へる公達よ、御爲にはめでたき孫御前よと鳥詩がましくも云ひなしけるこそ、實に末も絶え所領にも離るべき例なりけれ。されば讒臣國を亂し、富める人は家を破るといふ言葉思知られてあさましか

りける次第かな。祐親これを聞き大に腹を立て、親の知らざる聲やある、誰人ぞ今まで知らぬ不思議さよと怒りければ、繼母は訴へすましぬるよと嬉しくて、それこそ世にありてまことに便まします流人、兵衛佐殿の若君よとて、をかしげに嘲弄しければ、いよく腹を立て、女持餘りて置所なくば、乞食非人などには取らする共、今時源氏の流人聲に取り、平家に咎められては如何あるべき。毒の蟲をば頭を挫ぎて腦をとり、敵の末をば胸を割きて膽を取れとこそ云ひ傳へたれ。詮なしとて郎黨を呼寄せて、若君いざなひ出だし、伊豆國松川の奥を尋ね、とゞきの淵に柴漬にし奉りけり。情なかりし例なり。これや文選の辭に、しやうにみちては衰を豊年に顯し、朝にありてはくわを陰徳に顯す、まことに身に餘れる振舞は、行末いかいとぞ覺えける。剩へ北の御方をも取返し、同じ國の住人に江馬の小次郎に合せけり。名殘惜しかりつる衾の下を出で給ひて、思は

ぬ方へ今更、新枕片敷く袖に移り變りし御涙、さこそと思ひやられたり。これも祐親が平家へ恐れ奉ると思へども、わうさうとうけんぶん三公たるも、やうゆうちうしよぶんが、其門を詳にせんには如かずと見えたり。

五 王昭君が事

往昔漢の王昭君と申せし后を、胡國の夷にとられ給ひしに、名殘の袖は盡難くして、歎悲み給ひけるに、王昭君歎の餘に申しけるは、自らが敷きし褥に我が姿を寫留めて敷き給へ、我れ夢に幸りて逢ふべしと契りけり。漢王悲みて、かの褥を枕にして泣伏し給ひしかば、夢共なくまた現ともなく、來りて折あひにけり。かの昭君が胡國への途すがら、涙にくる、四方の山、野とも里ともわかかねて、袖の乾る間もなかりけり。思の餘りに舊柵を顧みて、滄波途遠くして巴峽山深しと詠じつゝ、漢宮萬里の旅の

途遠くして巴峽山深しと詠じつゝ、漢宮萬里の旅の



空、今の思にいられたり。佐殿も若君失はれさせ給ひし御心、くわらくが子を失ひ、かなはぬ別の袖の涙、こうけいにつらなりし恨なり。

### 六 玄宗皇帝の事

されば北の方の御別、あかね御名残の有様、唐に玄宗皇帝、楊貴妃と申せし后を、安祿山が戦の爲に奪はれ、終に馬嵬原にして失ひ奉る。皇帝その御思堪へずして、蜀の法師に仰せ、魂のありかを尋ねよとあり。法師神通にて、一天三千界を尋ねまはりしに、こゝに大真苑とうちたる額あり。即ち蓬萊宮これなり。こゝに到つて玉妃に逢ひぬ。この處を見れば、浮雲重りて人跡の通ふべき處ならねば、釵をぬきて扉を敲くとき、雙鬟童女二人出でて、何處より如何なる人ぞと問ふ。唐の太子の使蜀の法師と答へければ、さらばそれ待ち給へ、玉妃にこのよし申さんとして内に入りぬ。處は雲界沈々として東天に日暮れ

なんとす。まことに悄然として待つところに、玉妃出で給ふ、即ちこれ楊貴妃なり、左右の童女七八人あり。法師に揖して皇帝の安寧を問ふ。法師細に答ふ。云終りて、玉妃あひ給へる證とや、玉の釵をぬきて法師にたぶ。其時法師、これは世の常にあるものなり、證にたらず、叡覽に如何なる密契かありし。玉妃暫く案じて、天寶十四年の秋七月七日の夜、天にありて願くは比翼の鳥、地にあらば願くは連理の枝、天長地久にして盡くる事なからんと、しらす奏せんに、御疑あるべからずといひて、玉妃は去り給ひぬ。法師歸り参りて皇帝に奏聞す。さる事あり、法師誤なしとて、飛車といふ車に乗り、我が朝尾張國に天降り、八劍大明神と現れ給ふ。楊貴妃は熱田の明神にてぞ渡らせ給ひける。蓬萊宮は即ち此所とぞ申し候。兵衛佐殿は、若君北の御方の御行方をも知らせ奉るものなかりしかば、慰み給ふ心もなかりけり。

### 四 頼朝伊東を出で給ふ事

かくて頼朝は何となるべき憂身ぞやと、思暮し給ふに違はず、入道剩へ佐殿をも夜討にし奉らんとて、郎黨を催しける。こゝに祐親が次男伊東九郎祐清といふものあり。竊に佐殿へ参り申しけるは、親にて候ふ祐親こそ、物に狂ひ候うて、君を討ち奉らんと仕り候へ。何處へも御忍び候へと申しければ、頼朝聞召し、ちやうさいわうが害に遭ひしも、伴る事は知らでなり、笑の中に刀を抜くは習なり、人の心知難ければ、君臣父子なほ以て恐るべし、況や討たんとするは親なり、告知らすは子なり、かたぐ不審に覺えたり、いかさま我を欺罔るにこそとて、打解け給ふ事もなし。まことに思ひかけられなば、何處へ行きても通るべきか、されども左右なる自害するに及ばず、人手にかゝらんよりは、汝はやく頼朝が首を取りて、父入道に見せよと仰せられければ、

祐清承りて、仰り如く語り難き人の心にて候。はちを取りて衣のくびに隠して、親子の心に違ひしも伴る企圖なり、君思召すも御理、誠の志とは思召さずして、いしやうのはう尤も御疑、ことわりなり。忝くも、不忠申し候は、當國二所大明神の御討を蒙り、弓矢の冥加ながく盡きて、祐清が命御前にて果て候ひなんと申しければ、佐殿聞召し大に御悦ありて、かやうに告知らす志ならば、いかにもよき様に相計ひ候へと仰せければ、祐清承つて、藤九郎盛長、彌三郎成綱をば、君御座の様に暫くこれに置かれ候ふべし、君は大鹿毛にめされて、鬼武ばかり召具し、北條へ御忍び候へと申しおきて、御討手もや参り候はん、事を延し候はんとて、急ぎ御前を立ちにけり。

### 八 頼朝北條へ入り給ふ事

かくて佐殿は竊に紛出でさせ給ふ。ころは八月下旬



のことなるに、露吹結ぶ風の音、我が身ひとつに物寂しく、野邊にやすたく蟲の聲、折からことに哀なり。有明の月だに未だ出でざるに、いづくをそことも知らねども、途をかへて田の面をつたひ、草を分けつ、途すがらの御祈誓には、南無八幡大菩薩の御誓に、我が末代に源氏の世となりて、東國に住して夷を平げんとこそ願ひませ、然るに人すたれ氏亡びて、正統の残ただ頼朝ばかりなり。今度運をひらかずば、誰あつて家を興さんや、世既に澆季にして人後胤なし、早く頼朝が冥慮にまかせ東夷をしたがへ、喜悅の眉を開かしめ給へ、然からずばせめて當國伊豆國の匹夫となし、ながく本望を遂げしめ給へと、御祈誓夜もすがらなり。大菩薩の感應にや、幾程もなくして御世に出で給ひけり。扱も北條四郎時政が許へ入り給ひ、一向かれを打頼みて、年月をこそ送り給ひけれ。

### 九 時政が女の事

さてもかの時政と申すは、平家の末葉といへども系圖遠くなりぬれば、遠國に住みけれども、國一番の大名なり。彼に女三人あり、一人は先腹にて二十一なり。二三は當腹にて十九十七にぞなりにける。中にも先腹二十一は美人の聞えあり。殊に父不便に思ひければ、妹二人よりは優れてぞ思ひける。さる程にそのころ、十九の君不思議の夢をぞ見たりける。たとへば、何處ともなく高き峯に登り、月日を左右の袂にをさめ、橘の三つなりたる枝を挿頭すと見て思ひけるは、男の身なりとも、自らと月日を取らん事あるまじ、ましてや女の身として思ひも寄らず、まことに不思議の夢なり、姉御に知らせ給ふべし、問ひ奉らんとて、急ぎ朝日御前の方へうつり、細々と語り給ふ。二十一の姉君は委く聞きて、實にめでたき夢なり、我等が先祖は今に觀音を崇め奉る故、

月日を左右の袂に收めたり。また橘をかざす事は、本説めでたき由來ありとて、景行天皇の御事をぞ思ひ出しける。

### 十 橘の由來の事

抑々橘といふ木の實のはじまりは、人皇十一代の帝垂仁天皇の御時より出來けると、日本紀には見えたり。然るに此橘は常世の國より三つ參らせたり。折節后懷妊し、かの橘を用ひ給ひて、懐胎の惱絶えて、御心すいしかりけり。されば斯様のものもありけるよと、朝夕願ひ給へども、我國になき木の實なりければ力なし。爰に間守といふ大臣あり。この願を聞き、易き事なり、異國に渡り取りて參らせんといひて立ちければ、喜び思召して、さては何日の頃歸朝すべきと宣旨ありければ、五月には必ず參るべしと申して渡りぬ。其月を待てども見えずして、六月になりて、我は留まりて、人して橘を十まら

せ、なほ尋ねて參るべしとて留りけれども、橘の參る事を后大に喜び給ひ、用ひ給ふ。其德によりて皇子御誕生あり、御位を保ち給ふ事百二十年なり。景行天皇の御事これなり。その大臣の袖の香に、橘の移來たりけるを、猿丸大夫が歌に、

さつき待つ花橘の香をかげば  
むかしの人の袖の香ぞする

と詠みたりけり。我が朝に橘植初めけること、此時よりぞ始りける。また橘に盧橘といふ名あり。去年の橘に覆しておけば、今年の夏まであるなり。其色すこし黒きなり。盧の字を黒しと讀めばなり。さてもこの二十一の君、女性ながら才覺人にすぐれしかば、斯様のことを思出しけるにや、げにも景行の帝、橘を願ひ誕生ありしこと。幾程なくして若君出來たり、頼朝の後をつぎ四海を治め奉る。されば此夢を云威して、買取らばやと思ひければ、この夢返すく恐しき夢なり、よき夢を見ては三年語ら



す、悪しき夢を見ては七日の中に語りぬれば大なる  
憤あり、如何し給ふべきとぞ感しける。十九の君  
は伴とは思ひも寄らで、扱は如何せん、よきに計ひ  
てたびてんやと大に恐れけり。されば斯様に悪しき  
夢をば轉じかへて、難を遁るゝとこそ聞きて候へ。  
轉ずるとは何とする事ぞや、自ら心得がたし、計ひ  
給へとありければ、賣買ふといへば遁るゝなり、賣  
り給へといふ。買ふものゝありてこそ賣られ候へ、  
眼にも見えず手にも取られぬ夢の、など現に誰か買  
ふべきと思煩ふ色見えぬ。さらばこの夢を妾買取  
りて、御身の難を除き奉らんといふ。自らが事は素  
より恨なし、御爲悪しくは如何せんといひければ、  
さればこそとよ、賣買ふといへば轉ずるにて、ぬし  
も自らも苦しかるまじと、誠しやかに拵へければ、  
さらばと喜びて賣渡しぬ。其後に悔しくやなりなま  
しと覺えけり。二十一の君は此詞につきて、何にて  
か買ひ奉らん、もとより所望のものなればとて、北

四十四  
條の家に傳る唐の鏡を取出し、また唐綾の小袖一襲  
添へ渡されける。十九の君なめならすに喜びて、  
我が方に歸り、日頃の所望かなひぬ。この鏡の主  
なりぬと、喜びけるぞ愚なる。此二十一の君をば、  
父殊に不便に思ひければ、此鏡を譲りけるとかや。  
さる程に佐殿、時政に女あまたあるよし聞召し、伊  
東にも懲り給はず、上の空なる物思を、風のたより  
に音信ればやと思召し、内々人に問ひ給へば、當腹  
二人はこの外悪女なり、先腹二十一の方へ、御文  
ならば賜りて参らせんと申しけり。伊東にて物思ひ  
しも繼母ゆゑなり、如何に悪くとも當腹をと思召し  
定められて、十九の方へ御文をぞ遊ばしける。藤九  
郎盛長はこれを賜りて、つくづく思ひけるは、當腹  
どもは殊の外悪女の聞えあり、君思召し遂げん事あ  
るべからず、さあらば北條にさへ御仲達はせ給ひて  
は、何方に御入あるべき、果報こそ劣り奉るとも、  
手跳はいかで劣り奉るべきとて、御文を二十一の方

へぞ書きかへける。さて少將の局して参らせたりけ  
り。姫君御覽じて、思召し合はすることあり。この  
曉白き鳩一つ飛來りて、口より黄金の箱に文を入  
れて吹出し、妾が膝の上におき虚空に飛去りぬ。展  
きて見れば佐殿の御文なり。いそぎ箱にをさむると  
思へば夢なり。いま現に文を見る事の不思議さよと  
思召して打置きぬ。その後文の數かさなりければ、  
夜な／＼忍びて襪をぞ重ね給ひける。かくて年月を  
送り給ふほどに、北條四郎時政京より下りけるが、  
途にて此事を聞き、ゆゝしき大事出來たり、平家へ  
聞えては如何ならんと、大に騒ぎ思ひけり。さりな  
がら静にものを案するに、時政が先祖上總守直隆は、  
伊豫殿關東下向の時、智に取り奉りて八幡殿以下の  
子孫出來たり、今に繁昌ありつる事、世に隠れなし  
と思ひけるが、如何せましとぞ思はれける。

十一 兼隆を智に取る事

かくて北條は此事いかにせんと案するに、世に聞  
なくば、末悪しきまにはあらじと思ひけれども、平  
家の侍に、山木判官兼隆といふ者を同道して下りけ  
り。道にて何となき事の序に、御分を時政が智に取  
らんと云ひたりし言葉の違ひなば、源氏の流人智に  
取りたりと訴へられては、罪科通れがたし、如何せ  
んと思ひければ、伊豆の國府に著き、かの目代兼隆  
に云合せ、知らず顔にて女を山木判官に取らせけり。  
されども佐殿に契や深かりけん、一夜をも明さで、  
その夜の中に逃出で、近く召使ひける女房一人召  
具して、深き叢をわけ、足に任せて行く程に、足曳  
の山路を越え、夜もすがら伊豆の御山に分入り給ひ  
ぬ。契朽ちずは出雲路の、神の誓は淺からず、妹春  
の仲はかはらじとこそ守り給ふなれ。たのむ惠の朽  
ちやらで、末の世かけて諸共に、住果つべしと祈り  
給ひけるとかや。



### 十二 牽牛、職女の事

抑、出雲路の神と申すは、昔けいしやうといふ國に、男をば伯陽と申し、女をば遊子とて夫婦の者ありけるが、月に伴ひて、夜もすがら寝る事なくして道に立ち、夕には東山の嶺に心をすまし、月の遅く出づるを恨み、曉は晴天の雲に嘯き、曇なき夜を喜び、雨雲の空を悲みて年月を送りしに、伯陽九十九の年死門に臨まんとせし時、遊子に向ひ申すよう、我れ月に伴ひて愛づること世の人に超えたり、獨なりとも月を見ることを、怠ることなかれと云ひければ、遊子涙を流して、汝まさに死なば我れ獨月を見ることあるべからず、諸共に死なんと悲めば、伯陽かかねて申すやう、偕老同穴の契百歳にあたり、月を形見に見よとて、遂に果敢なくなりけり。契りし如く遊子はうちに入る事もなくして、月に伴ひ歩きしに、これも限りありければ、遂に果敢なくなりけり。

り。されども夫婦諸共に月に思を留めし故に、天上の果をうけ、二つの星となるとかや、牽牛織女之なり。又さいの神とも申すなり。だうそ神とも現れ、夫婦の中を守り給ふ御誓頼しくぞ覺えける。また傳聞く、漢の高祖伯陽山といふ山に籠り給ひしに、こころ太子諸共に、紫雲を案内として深き山路に分入りし志、これには過ぎしとぞ見えし。さて佐殿へ竊に人を參らせ、かくと申させ給ひしかば、鞭を揚げてぞかの山へ登り給ひける。目代は尋ねければ、なほ山深く入り給ひければ、力及ばず尋ね得ず、北條は知らず顔にて年月をぞ送りける。伊東が振舞には變りけるにや、果報のいたすところなり。

### 十三 盛長が夢見の事

こゝに 懷鳥の平權守景延といふ者あり。此程兵衛佐殿伊豆の御山に忍びてまします由傳聞き、斯様の時こそ奉公をば致さめとて、一夜宿直に參りけり。

### 十四 景延が夢合の事

さても景延申しけるは、盛長が示現に於ては景延合せ候はん。先づ君矢倉ヶ嶽にましくけるは、御先祖八幡殿の御子孫東八ヶ國を、屋敷どころにさせ給ふべきなり。御酒きこしめしけると見つるは理なり。當時君の御有様は、無明の酒に酔はせ給ふなり。然れば酔は遂に醒むるものにて、みきの三文字をかたどり、近くは三月、遠くは三年に御酔は醒むべしとぞ申しける。

### 十五 酒の事

景延かさねて申しけるは、酒は朋友の徳ありとて、疎きは親み親きはなほ親む。然るに依つて數の異名候。中にもみきと申す事は、昔漢の明帝の御時、三年間渴しければ、水に飢ゑて人民おほく死する。帝大に歎かせ給ひて。天に祈り給へども驗なし。如何

藤九郎盛長も同じく宿直仕る。夜半ばかりに打驚きて申しけるは、今夜盛長こそ、君の御爲にめでたき御示現を蒙りて候へ。御耳を敬て御心を静め確に聞き召し候へ。君は矢倉ヶ嶽に御腰をかけられしに、一保房は黄金の大瓶をいただき、實親は御壘をしき、成綱は白銀の析敷に黄金の御盃をすゑ、盛長は白銀の銚子に御盆を參らせつるに、君三度きこしめされて後、箱根の御參詣ありしに、左の御足にて外の濱を踏み、右の御足にては鬼界ヶ島を踏み給ふ。左右の御袂には日月を宿し奉り、小松三本頭にいたいき、南向にあゆませ給ふと見奉りぬと申しければ、佐殿聞召して大に喜び給ひて、頼朝この曉不思議の靈夢を蒙りつるぞや、たとへば虚空より山鳩三つ來りて、頼朝が髪に巢をくひ子を生むと見つるなり。これしかしながら、八幡大菩薩の守らせ給ふと、頼しく覺ゆると仰せられければ、希代なりける御奇瑞と思はぬ人はなかりけり。



せんと悲み給ひけり。其國の傍にせきそといふ賤しき民あり。彼が家の園に桑の木三本ありけるに、水鳥常に下居て遊ぶ。主怪みて行きて見れば、かの木の空洞に、竹の葉覆へるものあり。取除けて見るに水なり。嘗めてみれば美酒なり。即ち是を取りて國王に捧ぐ。然るにこの美酒一度口に含めば、七日飢を忘るゝ徳あり。帝感じ思召して、水鳥の落しおきたる葉をとり、飢ゑて死するものゝ口に注ぎ給へば、死人悉く蘇り、飢ゑたるものは力を得、めでたしとも云ふばかりなし。即ちせきを召して一國の守に任す。桑の木三本より出来たればとてみきと申すなり。さてこの酒は、如何にして出でくるとぞ尋ね給ふに、せきそが子にくわりといふ者あり。繼母ことに勝れて是を憎み、毒を入れ喰はせけり。されどもくわり繼母の習と思ひなすらへて、更に怨むる心なくして、此樹の空洞に入れておき、竹の葉を覆ひて置きたりけるが、始入れたるは麴と

なり、後にいれける飯は天より降る雨露の恵をうけて、美酒とぞなりにける。毒藥變じて藥となるとは、此時よりの言葉なり。また酒を飲みて風のさること三寸なれば、三寸とも書けり。これは家隆の卿の云ひけるなり。馬の寸をきといへば、その故もあるにや。また風妨ともいへり。風を妨ぐる義なり。またある者の家に杉三本あり、その木の滴岩の上に落ちたまり、酒となるといふ説あり。そのときは三木と書くべきか。またはしんほうに曰く、新酒百薬の命を助くと書けり。又慈童といひし者は、七百歳を經て彭祖と名をかへし仙人、菊水とてあそびけるもこの酒なり。これは法華經普門品の二句の偈を聞きし故に、菊の下行く水不死の藥となりけるを、この仙人は用ひけるとかや。公にも是をうつつして、重陽の宴とて酒に菊を入れて用ひ給ふ。上より降る雨露の恵、下にさしくる月日の光、あまねく君の御恵

に洩れたる品はなきにこそ、高きも卑きも酒は祝にすぐれ、神も納受し佛も憐愍ありとかや。君もきこしめされつる御酒の徳に、過ぎにし憂きを忘れさせ給ひ、日本國を從へさせ給ふべし。左右の御足にて、そとの濱と鬼界ヶ島を踏み給ひけるは、秋津洲殘なく從へさせ給ふべきにや。左右の御袂に月日を宿し給ひけるは、主上々皇の御後見においては、疑あるべからず候。小松三本頭にいたゞき給へるは、八幡三所の擁護あらたにして、千秋萬歳をたち給ふべき御瑞相なり。また南向に歩ませ給ひけるは、主上御在位るとき、大極殿の南面にして天子の御位を踐み給ふとこそ承り候へ。御運をひらき給はんことこれに同じと申しければ、佐殿喜び給ひて、景延が合するごとく、賴朝世に出づる事あらば、夢合の返答あるべしとぞ仰せける。

十六 賴朝謀叛の事

さるほどに、賴朝は天下を掌のうちにいよく思召し寄り給ひけるは、度々の御瑞相ども多き故、御謀叛のこと思召し立ちけり。殊に世間のやうを見給ふに、たとへば去んぬる平治元年に、右衛門督藤原信賴の卿、左馬頭源義朝を語ひて鼻惡を企てしに、清盛これを追伐し、件の兇徒を配流せしより以來、源氏は退散して平家繁昌す。されば朝恩に誇りて、叡慮を惱し奉ること古今に類なし。剩へその身一人師範にあらずして、忝くも太政大臣の位を汚す。かくの如く近衛の大將兄弟左右にならぶ事、凡人に於て先例なしといへども、始めてこの義を破る。また佛生の田苑を留め、神明の國郡を覆し、我朝六十九卿のうち三十餘ヶ國はかの一族知行す。また三公様の驕のあまりにや、さしたる科もなきに、臣下卿相多く罪科に行ひ、剩へ法皇を鳥羽殿に押籠め、天下を我が儘にす。つらく舊記を思へば、揚國忠が



叡慮に背き、安祿山が朝章を亂りし悪行も、斯の如くの事はなし。人臣王事を奪はざるの外、是體の悪行異國にも未だ先例を聞かず、況や我が朝に於てをや。かゝりければ、後白河院の第二の皇子高倉宮を源三位入道頼政謀叛を勸め奉り、治承四年四月二十四日の曉、諸國の源氏に令旨を下さる。御使は十郎藏人行家なり。同き五月八日に行家伊豆國に著き、兵衛佐殿に令旨をつけ奉る。令旨の案をかき、やがて常陸國に下り、志太三郎先生義憲に此由をふれ、信濃國に下り、木曾義仲にも見せけり。是に因つて國の源氏謀叛を企て、思ひくゝに案を廻す所に、平家の郎黨國々に起りければ、略傳聞きたりけり。

十七 兼隆が討たる事

かくて頼朝謀叛のよし、平家の侍和泉判官兼隆が聞きし上、即ち當國山木が館にありけるを、八月十七日の夜時政父子を始として、佐々木四郎高綱、伊

勢の加藤次景高景政以下の郎從尋を差遣して討取りけり。これを合戦の始なりける。こゝに相模國の住人大庭三郎景親、平家の重恩を報せんために當國石橋山に追驅け、さんくゝに戦うたり。これのみならず武藏上野の兵ども、我れ劣らじと馳向ひて防ぎ戦ふ。その中に鳥山重忠は、父重義叔父の有重、折節平家の勘當にて京都に召しおかるゝ最中なれば、その咎をもはらし國士の狼籍をも鎮めんと思ひ向ひけるが、三浦黨頼朝の謀叛に與力せんとして馳向ひけるに、鎌倉の由井といふ所にて行逢ひ、さんくゝに戦ひけるが、重忠打敗けて今日の命盡きて武藏に歸りけり。その後江戸上總を始として、武藏國の住人ども一千餘騎三浦へ押寄せ、身命を捨て、戦ひければ、三浦打敗けて今は大介一人になりけり。年九十餘になりけるが、子孫に向ひて申しけるは、兵衛佐殿の浮沈今にあり、己等一人も死残りたらば貢ぎ奉れと申置きて腹切り畢んぬ。さて伊東入道は素より

佐殿に意趣深きものなりければ、一合戦と馳向ひけるが、恃みし鳥山が打敗けにし折節なれば、伊豆の御山より引返しにけり。

十七 頼朝七騎落の事

さて頼朝は無勢たるに依つて、心は猛く思はれけれども、此合戦かなふべしとも見えざりけり。されども土肥次郎、岡崎悪四郎、佐々木四郎、命を惜まず戦ひけるその際に、佐殿は遁れ給ひて杉山に入り給ひぬ。北條三郎宗時、真田與市も討たれけり。佐殿は七騎に打ちなされ、大童になりて大木の中に隠れ、その曉山を忍出で安房國龍崎へ渡り給ふとて、海上にて三浦の人々、和田小太郎義盛に行逢うて、船共を漕寄せ、互に合戦の次第を語る。義盛は衣笠の戦に大介討たれし事ども語りければ、土肥岡崎はまた、石橋山の合戦に與市が討たれし事どもを語り、互に鎧の袖を濡しける。さて安房國に渡り、夫より上

總に越え、千葉介を相具して次第に攻上り給ひて、相模國鎌倉の館にぞ著き給ひける。これよりして、武士ども關東に歸服せざるはなかりけり。されば平家驚き騒ぎ、度々討手を向はすと雖、或は鳥の羽音を聞きて退く者もあり、又は戰場にこらへずして鞭にて打落さるゝもあり、これ普通の儀にあらず、ただ天命の致す所なり。昔周の文王いしんちうを討たんとせしに、東天に雲冴えて雪の降る事一丈餘なり。また五色の馬に乗る人門外に來りてその事を示し、かば、文王勝つことを得たりき。かるが故に逆臣はどなく敗北して、天下即ち穩なり。

十九 伊東の入道が斬らる事

さて不忠を授舞ひし伊東入道は、生捕られて聲の三浦ノ介義澄に預けられるを、先日罪科のがれ難くして、召出だし、鎧摺といふ所にて首を刎ねられ



けり。最後の十念にも及ばず、西方浄土をも願はず、先祖相傳の所領伊東、河津の方を見やりて、執念深げに思ひやるこそ無慙なれ。

### 二十 奈良の權操僧正の事

これや延暦年中に、奈良の權操僧正は、大旱魃に雨の祈のため、大和國布留の社にて、藥草喻品を一七日講せられけるに、何處ともなく童一人來りて、毎日御經を聽聞しける。七日に満ずるとき、何者にやと御尋ありければ、我はこの山の小龍なり、七日の聽聞によつて、安樂世界に生れ候ひなん嬉しさよとて、隨喜の涙を流しけり。その時僧正の曰く、龍は雨を心に任するものなれば、雨を降しめ候へと仰せければ、大龍王の許なくして、我が計にてはなり難く候へども、さりながら後生菩提を御助け給ひ候は、身は失せ候ふとも雨を降らし候はんと申す。左右にやおよぶ、追善あるべしと御諒承ありしかば、

即ち雷となりて天に上り、雨の降ること二時ばかりなり。されどもこの龍、その身碎けて五所へぞ落ちにける。僧正憐み給ひて、かの龍の落ちける所に於て、一日經を書寫せられけり。その後かの僧正の夢に、御弔により即ち邪心を轉じて佛道に生ずと見えたり。さてかの五所に五つの寺を建て、今にありと申すなり。寺號は龍門寺、龍泉寺、龍しよく寺、龍はう寺、龍そん寺これなり。紀國大和兩國にあり。勤行も長に懈らずとこそ聞えけれ。斯様の畜類だにも後生をば願ふぞかし。この伊東入道は最期の時にも、後生菩提を願はざるぞ愚なる。是を以て過ぎにし事を案ずるに、親の讓を背くのみならず、現在の兄を調伏し、持つまじき所領を横領せし故、天これを誡めけるとぞ覺えたる。されば惡は一旦の事なり、勝利ありと雖遂には正直にして道理道をゆくとかや。總じて頼朝に敵したる者こそ多き中に、面前に誅せられける因果通れざる理を思へば、昔天

竺に大王あり、貴き上人ありとて迎を遣し給ふに、この王朝夕暮を好み、臣下を集めて打ち給ふとき、上人參り給ひぬと申しければ、碁に切りて然るべき所ありけるを、切れと宣ひけるに、この上人の首を切れとの宣旨と聞きなして、即ち聖の首を打ち切りぬ。大王夢にも知り給はで、碁をうち果て、其上人こなたへと宣ふ。宣旨にまかせて斬りたりと申す。大王大に悲み、佛に歎き給ふ。時に佛の宣はく、昔國王は蛙にて土中にありしなり、上人はもと田を作る農人なり。然るに民春田をかへすとて、心ならず唐鋤にて蛙の首を鋤切りぬ。その因果通れずして斬られにけり。因果は斯様なるものをやと宣へば、國王未來の因果を悲みて、多くの志を盡して、彼の苦を免れ給ひけるとかや。人はたゞ報を知るべき事なりとぞ。

### 二十一 祐清京へ上る事

こゝに伊東九郎と申すも、父入道と一所にて誅せらるべきを、彼に於ては頼朝に奉公の者なり、死罪を宥められ召使はるべきよし仰下されしを、不忠のものゝ子面目なし、その上右橋山の合戦にまさしく君を討ち奉らんと打向ひし身が、命生きて候ふとも、人にひとしく頼まれ奉るべしとも存せず、さあらんに於ては、首を召されん事こそ深き御恩たるべしと、望み申しけるも優しくぞ覺えける。この心なればや君をも落し奉りけると、今更思知られたり。君聞召され、申上るところの辭義餘義なし、しかれども忠の者を斬りなば天の照覽も如何とて、斬らるまじきにぞ定りける。九郎かさねて申しけるは、御免候は、忽ち平家へまゐり、君の御敵となり參らせ、後矢仕るべしと、再三申しけれども御用ゐなく、假令敵となると云ふとも、頼朝が手にてはいかでか斬らるべきと仰下されければ、力及ばず、京都に上り平家に奉公いたしけるが、北陸道の合戦の時、加賀國



篠原にて齋藤別當と一所に討死して、名を後代に留む。よき侍の振舞、弓矢の義理これに如かじとて、惜まぬものはなかりけり。

二十一 鎌倉の家の事

さても佐殿北の御方取り奉りし江馬小四郎も討たれけり。そのあとを北條四郎時政に賜る。さてこそ江馬小四郎とも申しけれ。この外討たる侍ども、相模國には秦野馬允、大庭三郎、海老名源八、荻野五郎、上總國には上總介、陸奥には秀衡が子どもを始として、國々の侍五十餘人を討たれける。又平家には八島の大殿、右衛門督清宗、本三位中將重衡を先として、或は斬られ自害する輩を記すに及ばず。源氏には御舍弟三河守範頼、九郎判官義經、木曾義仲、甲斐國には一條次郎忠頼、小田入道、常陸國には志太三郎先生を始として以上三十八人、かれこれ討たる者百八十餘人なり。この中に冤べんの者は

僅に三人なり。一條次郎、三河守、上總介なり。この外はみな自業自得なりとぞ宣ひける。さて鎌倉に居所を占めて、郎従以下軒をならべ、貴賤袖をつらねけり。これやせいようの詞に、漢の文王は千里の馬を辭し、晋の武王はちとうの裘を焼くとは、今の御代に知られたり。民の竈は朝夕の煙ゆたかなり。賢王世にいづれば鳳凰翼をのべ、賢臣國に來れば麒麟蹄を研ぐといふ事も、この君の時に知られたり。めでたかりし御事なり。

二十二 八幡大菩薩の御事

抑、八幡大菩薩をば、忝くも鶴ヶ岡に崇め奉る。これを若宮と號す。頻繁の禮社壇にしげく、奉幣にんわうのせきしやなり。其垂迹三所に、仲哀、神功、應神、三皇の玉體なり。本地を思へば、彌陀三尊の聖影、行教和尚の三衣の袂を顯し給へり。百皇鎮護の誓を起して、一天靜謐の恵まします。實にこれ本朝の宗

廟として、源氏を守り給ふとかや。現世安穩の方便は觀音、勢至神力をうけ給ふ。後生善所の利益は無量壽佛の誓を施し給ふ。仰ぎても信すべきは、最この御神なり。父左馬頭のために小長壽院を建立し給ふ。今の大御堂これなり。そのほか堂社塔婆を造立し給ふ。佛像經卷をきやうそす。征罰の志はやく速にして、善根もまた莫大なり。壽永二年九月四日に坐ながら征夷將軍の院宣を蒙り、建久元年十一月七日に上洛して大納言に補し、同じき十二月五日に右大將に任ず。されば籌策を帷帳のうちに廻し、勝つことを千里の外に得たり。實にや遙に伊豆國に流罪せられ給ひしとき、斯かるべしとは誰か思ひけめ、一天四海を従へ、靡かぬ草木もなかりけり。實や史記の辭に、天下安寧なる時はけいしやくを用ゐずとは、今こそ思知られたれ。平家繁昌の折節は、誰やの人か此一門を亡すべしとは思ひける。さても伊豆の御山にて夢物語し、同く合せ奉りしものは勸

賞に預り、藤九郎盛長は上野の總追捕使になさる。景延は若宮の別當神人總官を賜る上に、大庭の御厨屋は先祖には代々數多に分れたりしを、今度は一圓に賜りけり。この外莊園五六ヶ所賜つて朝恩に誇りけり。さても先年河津三郎を討ちたりし工藤一龍祐經は、左衛門尉になりて伊東を賜る。其外所領あまた拜領して、随分權者にて、晝夜君の御側去らで伺候す。されども傷を蒙る鳥は、天に上りて翼を叩くと雖また地に落つる思あり、釣針を含む魚は、深き淵に入つて尾を振ると雖、遂には陸に上る憂あり。祐經もかやうに果報いみじくて、公方私おどろを倒にひくと雖、敵ある身は行末道難くして、終に討たれなんとぞ申しける。



曾我物語卷第二終

曾我物語卷第三

一 九月十三夜名ある月に一  
萬箱王庭に出でて父の事  
を歎きし事

抑々伊豆國赤澤山の麓にて、工藤左衛門尉祐經に討たれし河津三郎が子二人あり。兄をば一萬といひて五つになり、弟を箱王といひて三つにぞなりにける。父に後れてのち、いづれも母につき、繼父曾我が事を許して育ちけり。やうく成人する程に、父が事を忘れずして歎きけるこそ無慙なれ。人の語れば兄も知り、兄が語れば弟も知り、戀しさのみに明暮れて、積るは月日ばかりなり。心のつくに從ひて、いよく忘るゝ暇もなし。我等二十になり、父を討ちけん左衛門尉とやらんを討取りて、母の御心をも慰め、父の孝養にも奉せんと、忙しきは月日なり。

數ならぬ身にも日數の積ればにや、憂事どもに長へきて、一萬九つ箱王七つにぞなりにける。折節九月十三夜の、まことに名ある月ながら、隈なき影に兄弟は、庭に出でて遊びけるが、五つ連れたる雁がねの、西に飛びけるを一萬が見て、あれ御覽せよや箱王殿、雲居の雁の何處を指して飛行くらん、一つらも離れぬなかの羨しさよ。弟聞きて、何かはさ程羨むべき、我等が伴ふ者共も、遊べば俱に打連るゝ、歸れば連れて歸るなり。兄聞きて、さにはあらず、いづれも同じ鳥ならば、鴨をも鷺をもつれよかし、空を飛べどもおのれくが友ばかりなる事ぞとよ、五つあるは一つは父一つは母、三つは子どもにてぞあるらん、和殿は弟我は兄、母は眞の母なれども、曾我殿まことの父ならず、戀しと思ふその人の、行方も敵の業ぞかし。箱王聞き、親の敵とやらんの頸の骨は、石金よりも堅きものかと問へば、兄が聞きて袖にて弟が口を抑へ、驚し、人や聞くらん聲たか



し、隠す事ぞといへば、箱王聞きて、射殺すとも首斬るとも、隠して叶ふべき事か。さはなきぞとよ、それまでも忍ぶ習ぞかし、心にのみ思ひて、上にはものを習へとよ、能は稽古によるなるぞ、我等が父は弓の上手にて、鹿をも鳥をも射習ひけるなるぞ。あはれ父だにましまさば、馬をも鞍をも用意して賜びなまし、さあらば犬追物笠懸をも射習ひなん、我等より幼き者も世にあれば、馬に乗り物射る見るも羨しと口説きければ、箱王聞きて、父だにましまさば、自が弓の弦喰切りたる鼠の首は、射させ参らすべき物を、腹立やといへば、兄が聞きて、それよりも憎きものこそあれ。誰なるらん、自が乗りつる竹馬うち候ひつる事か。その事にてはなきぞ、父を討ちける者の憎きに、月日の遅きといへば、習はずとも弓矢とる身は弓射ぬ事や候ふべき。兄が聞き打笑ひ、和殿さやうに云ふとも、手馴れずしては如何あるべき、射てみよとて、竹の小弓に籠は薄な

る笹作の矢差番ひ、兄障子を彼方此方に射通し、何時か我等十五十三になり、父の敵に行逢ひ、かやうに心の儘に射通さん。箱王聞きて、さる事にては候へども、大事の敵弓にては如何と覺えたり、斯様に首を斬らんとて、障子の紙を切り高々と差上げ、側なる木太刀を取直し、二つ三つに切つて捨て、立ちたる眼ざし、人に變りてぞ見えたりける。

二 兄弟を母の制する事

かくて乳母はこれを忍び見て、恐しき人々の企かな、後は如何にも思ひければ、急ぎ母上に語りける。母聞きて大に驚き、彼等を一間所に呼びければ、箱王居直らざるに、障子の破れたるを叱り給ふべきと心得て、障子をば存じ候はず、他所の童が破りて候ふを、乳母が事々しく申すといひければ、母涙を流し、障子の事にてはなきぞとよ、汝等たしかに聞け、殿ばらが祖父伊東といひし人は、君の若君を殺

し奉るのみならず、謀叛の同意たりしに由つて斬られ奉りし上は、汝等もその孫なればとて、首をも足をも振がれ奉るべし。平家の公達をば、腹の中なるをだにも索め失はるゝぞかし。今より後、ゆめく思ひも寄り。云ひも出だすべからず。あさましき事なり。未だ上にも知らしめされぬか、御宥ありて知らず顔にて御尋もなきと覺ゆるなり、かまへて、遊ぶとも門より外へ出づべからず。汝等打連れ遊ぶを、物の隙より忍び見るに、勇み驕るときは自が心も共に勇しく、打萎るゝを見るときは、妾が心も俱に萎るゝものを。親にもそはぬ孤兒の、育つ行方の無慙さよ。後に立ちそひ見るぞとよ。乳母はかくも知らせぬぞ、近く寄り候へとて、二人が袖を取り引寄せ小聲にいふやう、まことや、さしも恐しき世の中に、悪事思立つとな。さやうの事、人に聞かれなば良かるべきか。上様の御耳に入りなば召捕られ、禁獄死罪にも行はれなん、恐しさよとぞ制しける。一萬

は顔うち赤め打傾きてゐたり。箱王は打笑ひ、乳母が申しなすと覺えたり、更に後先も知らぬ事なりと申しければ、母聞きて、今より後思ひも寄らざれ、構へてと云ひて立ちぬ。その後は人目を忍びて兄弟は語りけれども、人には更に知らせざりけり。或日の徒然に友の童もなく、軒の松風耳に留り、暮れやらぬ日は、一萬門に出でて、人目を忍びさめく泣きけり。箱王も同じく出でけるが、兄が顔をつくくを見て、何を思ひ給へば、兄御は向の山を見てさのみは泣かせ給ふぞやといふ。兄が聞きて、さればこそとよ、何とやらん殊のほか父の御思出でられて、戀しく覺ゆるぞといひければ、愚にわたらせ給ふものかな、何程思ひ給ふとも父は歸り給ふまじ、いざ歸り給へ、童どものまた参り候はん、嘯物して遊び候はんとして打連れて歸る時もあり。また或夕暮に夜に近き、軒端の雨のものを哀なる折節に、箱王門に立出で涙に咽ぶ時は、一萬弟が袖をひかへ、



何を思ひ給へば、四方の梢に眼をかけて、さのみ歎かせ給ふぞや。覺えぬ父御とやらんの戀しきは、かやうに心のすこきやらん、兄御は何とかおはするとて、さめくんとこそ泣居たれ。一萬弟が手を取りて、覺えず知らぬ父を戀しと思はんより、可憐とのみ仰せらるゝ母に、いざや參らんとて、袖を引きてぞ入りける。是も人眼を忍ばんとて、互に諫め諫められて、心ばかりと思へども、さすが幼き心にて、忍ぶ他所目の隙々の、洩るゝを見聞く人毎に、舌をふり哀を催さぬはなかりけり。良竹は生出づれば直なり、梅檀は嫩葉より香しとは、斯様の事に知られたり。されば遂に敵を思ふまゝに討ち、名を萬天の雲に揚げ、威勢一天に餘れり。哀にもいみじくも申し傳へたるは、この人々の事なりけり。

### 三 源太曾我へ兄弟召の御使 に行きし事

かくて三年の春秋の過ぐるも夢なれや、早くも一萬十一箱王九つにぞなりにける。その頃彼等が身の上には思はぬ不思議ぞ出来きたる。故を如何にと尋ぬるに、鎌倉殿、侍どもに仰せられけるは、保元の合戦に爲義義朝に斬られ、平治の亂に義朝長田に討たれしより以來、驕れる平家を悉く滅し、天下を心の儘にする事、我等が先祖におきては、頼朝にまさる果報者あらじと、仰下されければ、御前伺候の侍ども、一同にさん候ふと申上げければ、伊豆國の住人工藤左衛門祐經、畏つて申しけるは、仰の如く四海静り、きうたう狼煙立たざる所に、眼近き御膝の下におきて、幼くは候へども、末の御敵となるべき者こそ一二人候へと申しければ、御前にありける侍ども、知るも知らざるも、誰が身の上やらんと、目を見合せ拳を握らざるはなかりけり。君聞召されて御氣色かはり、頼朝こそ知らね、何者ぞと御尋ありければ、祐經承りて、先年斬られ參らせ候ひし伊東

入道が孫、五つ三つにて父河津に後れ、繼父曾我太郎が許に養ひおきぬ。成人の後御敵とやなり候ふべき。身にもまた野心ある者にて候ふと申上げたりければ、君聞召し、不思議なり、祐信は随分心安き者に思ひつるに、末の敵を養ひおくらん不思議さよ、急ぎ梶原召せとて召さるゝ。源太景季御前に畏りければ、急ぎ曾我へ下り、伊東入道が孫どもを隠置くよし聞ゆ、急ぎ具足して參るべし、若し思議に及ばば、それにて頭を刎ねよとぞ仰せける。景季承り御前を罷立ち、急ぎ曾我へぞ下りける。祐信が館近くなりしかば、使者を立て、曾我殿やまします、君の御使に景季參りたりと云はせければ、祐信何事なるらんと、思寄らざる御出珍らしといひければ、景季も暫く辭退して、さん候ふ上よりの御使と計り云ひて、面目なき事なれば左右なく云ひも出さず。やゝありて、御爲ゆゝしきことならぬ仰せを蒙りて候。その故は故伊東入道殿の孫養育のよし君聞召し

て、頼朝が末の敵なり、急ぎ具して參るべしとの御使蒙り、參りて候ふと申しければ、祐信とかくの返事にも及ばず。やゝありて、世間に歎深きものを尋ね候ふに、祐信に過ぐべからず。幼き者二人候ひし、五つ三つにて失ひ候。その思未だ晴れざるに、彼等が母に後れ候ひぬ。一方ならぬ思の淺からざりしに、彼等が母も夫に後れ、子を持ちたるよし聞き候ひしが、而も親しく候ふ上、失ひし子ども同じ年にて候。されば人の歎をも我等が思をも語り慰まんと思ひ押へ取り、今年は此者共も十一九つにまかりなり候。殊の外健氣に候ふ間、實子の如く養じたてて、此比かやうの仰を蒙るべしとこそ存じ候はね。子に縁なきものは、人の子をも養すまじき事にて候ひけるとて、袖を顔におしあてけり。景季も實に理とぞ思ひける。

### 四 母歎きし事



さても祐信は、御誼違背申すべきにあらず、召連れて参るべし、さりながらとて内に入り、彼等が母に申しけるは、故伊東殿君の御敵にて討たせ給ひしその孫とて、二人の幼き者どもを参らせよとの御使に、梶原殿の來れりといひければ、母は聞きもあへず、心憂や、是は何と成行く世の中ぞや、夢とも現とも覺えず、實に夢ならば覺むる現もありなまし、憂身の上の悲しきも、彼等二人を持ちてこそ、萬の憂さも慰みつれ。身の衰ふるをば知らず、何時か成人して大人しくもなりなんと、月日の如く頼もしく、後の世かけて思ひしに、斬られまゐらせてその後、憂身は何と長へん。たゞ諸共に具足して、兎にも角にもなし給へと泣きしむ、その聲は門の邊まで聞えけり。實にや園生に植ゑし紅の、焦るゝ色のあらはれて、他所に見えしぞ哀なる。堪へぬ思の餘りにや、母は子供を左右の膝に据置き、髪搔撫でて口説けるは、祖父伊東殿君に情なくあたり奉りし故に、その

孫とて汝等を召さるゝぞや。如何なる罪の報にて、人こそ多けれ、御敵とはなりぬらん心憂さよ。さりながら汝等が先祖、當國において誰にかは劣るべき、知らぬ人あるべからず、君の御前なりとも恐るゝ事なく、最期の所にて云甲表なくして叶ふまじ。さしも勇みし親祖父の世にありし故にこそ、御敵ともなり給ひしか。幼くとも思切りて、臆する色あるべからず、健氣にと申せども、涙にこそ咽びけれ。實にや叶はぬ事なれども、汝等を留置き、その代に妾出でて如何にもなりなば、心安かりなんと泣きければ、二人の子供は聞分けたる事はなけれども、たゞ泣くより外の事ぞなき。卑しき賤に至るまで、泣き悲むこと、叫喚大叫喚の悲も、これには過ぎじとぞ覺えし。時移りければ景季、使を以て母の方へ申しけるは、御名殘理と存じ候へ共、御思は盡くべきに非ず、疾くゝと責めければ、祐信承り候ふとて、嬉しからざる出立を急ぎける。母も今を限の事なれば、

介錯するぞ哀なる。一萬が装束には、籬に櫛縫うたる練貫の小袖に、精好の大口、顯紋紗の直垂をぞ著せたりける。箱王には、紅葉に鹿書きたる紅梅の小袖に、大口ばかりぞ著せたりける。かやうに介錯せん事も、今を限にてもやと、後に廻り前に立ち、つくづくとこれを見るに、一萬が著たる小袖の紋心得ぬものかな。さてもあだなる朝顔の、花の上露時の間も、残る例はなきものを。さてもまた箱王が小袖の紋、濡れてや鹿の獨啼くらんも、憂身の上の心地して、いよく袖こそ濡れまされ。古はなにも見ざりし衣裳の紋、今は眼に立ちて、思遺せる事もなし。やがて歸るべき途だにも、差當りたる別は悲しきに、歸らん事は不定なり、見々えん事も今ばかりぞと思へば、氣も魂も身にそはず。一萬おとなしやかに、餘な御歎き候ひそ、御思を見奉れば、冥途やすかるべしとも覺えず、若し斬られまゐらせば、前世の事と思召せといひければ、箱王、兄の仰せらるゝ如く、

御歎き候ひそ、我々手を出だして御敵仕る身にてもなし、その上いまだ幼く候へば、御許もや候ふべき、佛にも御申し候へと、誠にげにゝしく申すに付けても、愈々名殘ぞ惜しかりける。さりともとは思へども、正しき御敵なり、歸らん事は不定なり、留りて物思はん事も悲しければ、一所にて如何にもならんと、出立ちけるぞ哀なる。祐信これを見て大に制しける。さりとも斬らるゝまではあるまじ、誰誰もよきやうに申しなし給は、いかさま遠き國に流しおかれぬと覺えたり。左様なりとも命だにあらばと慰めおきて、二人の子どもを誘ひ出でける、心のうちこそ哀なれ。母は梶原が見るをも憚らず、事の斜の時にこそ耻も人目も包るれ、誠の別になりぬれば、徒歩跳にて乳母と諸共に庭上に迷出で、暫くやとの一萬、止めや箱王、我が身は何となるべきと、聲も惜まず泣き悲みければ、上下男女諸共に、今暫くと泣き悲む有様、譬ふべきかたもなし。或は馬の口に



取付き、或は直垂の袖をひかへければ、景季も猛き武夫とは申せども涙にせきあへず、よしなき御使を承つて、かゝる哀を見ることの悲さよとて、直衣の袖を顔に押當て、泣きけり。母はなほも留りかねて、門の外まで惑出でて、彼等が後姿を見送り、泣くより外の事ぞなき。子供も後のみ見返りしかば駒をも急がす、後に心は留りけり。互の思きこそと推測られて哀なれ。母は子供の後も見えず遠ざかり行きければ、即ち倒伏しにけり。女房達急ぎ引立て、やう／＼介錯して、泣く／＼内にぞ入りける。持佛堂に参りて口説きけるは、大慈大悲の誓願には、枯れたる草木にも花咲き實のなることを聞け、などや彼等が命をも助け給はざらん、我れ幼少の古より深く頼をかけ奉る、毎日に三卷の普門品懈らざる験に、彼等が命を助け給へと、問え焦れけるぞ無慙なる。せめての事にや、佛に向ひて口説きけるは、實にや彼等が父の討たれし時、如何なる淵瀬にも入り

なんと思焦れしに、彼等を世に立てんと思ひて、強面く命ながらへ、飽かぬ住居の心憂かりつるも、偏に子供の爲ぞかし、斬られ参らせて後、一日片時の程も、身は誰が爲に惜しかるべき、願くは我等が命も取り給ひて、彼等一所に迎取り給へと、聲も惜まらず泣き居たり。實や身に思のある時は、科もましまさぬ神佛を怨み奉り、泣きては口説き、怨みては泣き、伏沈みけるこそ、せめての事とは覺えけれ。

五 祐信兄弟をつれて鎌倉へ行きし事

さても祐信は梶原諸共に打連れて、駒を早むるとはなけれども、夜に入つて鎌倉へこそ著きにけれ。今宵ははるかに更けぬらんとて、景季が館に留めおきたり。祐信は二人の子ども近く居て、今宵ばかりと思ふにも、名残惜しくぞ思はれける。名残の夜半も明易く、隈なき軒を渡る月も、思の涙にかき曇り、

鶏と同じく泣明す、心の中こそ無慙なれ。早天に源太左衛門御所へ参りければ、祐信遙に門送して、彼等が事は一向に頼み奉る、如何にも善きやうに申しなされ、郎等二人ありと思召し候へと、眞に思入つたる有様哀にて、源太も不便に覺えて、實にや子ならずは何事か是程に宣ふべき、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、實に理と覺えて、景季も子ども數多もちたる身、さら／＼人の上とも存じ候はずとて、忍の涙を流しけり。心の及ぶ所は等閑あるべからず候、心安く思ひ給へとて出でければ、頼しくぞ思ひける。

六 兄弟を梶原請ひ申さるゝ事

其後梶原御前に畏りければ、君御覽じて、昨日は参らざりけるぞ、祐信は異議にや及びけるか。争か惜み申すべき、昨夜景季がもとまで、具足して候ひつるを、夜更け候ふ間、明くるを待ち申して候。從

ひ候うては、母や曾我太郎が歎なかく申すに及ばず、可愛き有様を見てこそ候へ。同じ仰にて、戰場にして一命を棄て候はん事は、物の數とも存じ候ふまじ、斯様に難義の事こそ候はざりしかと申しければ、君聞召されて、嘸母も惜みつらん、同じ科とは言ひながら、未だ幼き者共なり、歎きつるかと思せられければ、この御言葉に取付き畏つて申しけるは、斯様に申す事恐多く候へども、母が歎あまりに不便なる次第に候。未だ幼者どもにて候へば、成人の程景季に預けさせ給ひ候へかしと申しければ、君聞召されて、汝が申す所理と思へども、伊藤入道に情けなく當られし事を聞きも及びぬらん。三歳の若を失はれ、剩へ女房まで取返されて、歎の上に耻を見、其上山井の洞にて頼朝を討たんとせし怨、條々譬へてやるかたなし。せめて伊豆國一國の主にもならばやと明暮祈りしは、伊東に當返さんと願ひしぞかし。さればかの者の末といはんをば、を食非人なりとも、



生けて見んとは思はざりき。況や彼等は現在の孫なり、而も嫡孫ぞかし、急ぎ誅して若が孝養に報ずべし、頼朝怨むべからずと仰下されければ、重ねて申すに及ばで、御前を罷立ちにけり。時を移さず由井の濱にて害せよと承りて宿所に歸る。祐信遅しと待ちうけて、さて彼等が命いかにと問ふ。さればこそとよ、再三申しつれども故伊東殿の不忠、始より終に至るまで御物語ありて、若君の草の蔭にて思召す所もあり、この人々を斬りて、御追善に報せんと御意の上、力及ばずと申しければ、祐信頼みし力盡果て、今は叶ふまじきにやとて、二人の子供を近づけて、装束引繕ひ鬢の塵打拂ひ、汝如何なる報にて、乳のうちにして父に後れ、重代の所領に離れ、命だにも十五十三にもならず斬らるゝのみに非ず、母にもまた思を授くることと思議さよ。祐信も汝等に残れて、千歳を経るべきか、髻切り後世懸に弔ひてとらすべし。今生の宿縁薄くとも、來世にては

必ず一蓮に生れあふべしと涙に咽びけり。子供は聞き、祖父御の御事により、我等幼けれども免されず、斬られんこと力に及ばず、さりながら殿の御恩こそ有難く思ひ奉り候へ、御通世ゆめあるまじき事なり、母御の御思ひよく、重かるべし、それを慰めて給はり候へ、それならではとばかりにて、泣きより外の事ぞなき。景季が妻女も女房達引連れ中門に出で、物越に彼等が言葉を立聞き、實にやさる者の子供とは聞えたり、優に大人しやかに云ひつる言葉かな、餘所にて聞くだにも哀に無慙なるに、如何に今まで取育てぬる母や乳母の思ふらん、片輪なる子をさへ親は悲む習ぞかし。弓取の子の七つにて、親の敵を討ちけると申傳へたるも、彼等が大人しやかなるにて思知られたり。弓取の子なりとて涙に咽びければ、及ぶも及ばざるも皆袂をぞ絞りける。

七 由井の濱へ引出されし事

かくて景季や、遙にありて、子供の前に來り、時こそ移り候へと云ひければ、祐信彼等を出立たせ、由井の濱へぞ出だしける。今に始めぬ鎌倉中の事々しさは、彼等が斬らるゝを見んとて門前に市をなす。源太が館も濱の表程遠からで行く程に、羊の歩なほ近く、命も際になりけり。既に敷皮敷きて、二人の者ども直しにけり。今朝まではさりととも源太や申助けんと頼みし心も盡果て、彼等に向ひ申しけるは、母が方に思置く事はなきかと問ふ。たゞ何事も御心得候うて仰せられ候へ、但し最後は御教へ候ひし如く、思切りて未練にも候はざりしとばかり御語り候へ。箱王は如何にと問へば、同じ御心なり、今一度見奉りてと云ひもあへず、涙に咽び深く歎く色見えけり。一萬これを見て、母の仰せられしこと忘れ給ふか、親祖父の孫ぞと思切るべし、構へて母や乳母がこと思出すべからず、さやうなれば未練の心出來るぞ、たゞ一條に思切れと教へ給ひし事ぞとよ、人

もこそ見れと諫めければ、箱王この言葉にや耻ぢにけん、顔押拭ひ嘲笑ひ、涙を人に見せざりけり。貴賤惜まぬ者ななし。曾我太郎この色を見て、今は心安くて敷皮に居懸り、鬢の塵打拂ひ、心静かに介錯し、如何に汝等よく聞け、始めたる事にはあらねども、弓矢の家に生るゝ者は、命よりも名をば惜むものぞとよ。龍門原上の地に骨は埋めども、名をば雲居に遺せといふ言葉、かねて聞きぬらん。最期見苦しきは見えねども、心を亂さで眼をふさぎ、掌を合せ、彌陀如來吾等を助け給へと深く祈念せよ。一萬聞きて、如何に祈り候ふとも、助かる命にても候はぬものをと云ひければ、その助にてはなし、別の助ぞとよ。御分の父一所に迎取り給ふべき誓願の助ぞとよ。頼み候へと云ひければ、申すにや及ぶ、故郷を出でしより思定むる事なれば、何に心を遺すべき、父に遇ひ奉らん頼こそ嬉しく候へとて、西に向ひ各々小さき手を合せ、南無と高らかに聞えけれ



ば、堀彌太郎太刀抜きをばめ、二人が後に近付きて、兄を先づ斬らんは順次なり、然れども弟見て驚きなんも無慙なり、弟を斬るは逆なりと、思煩ひ立ちたりしを、祐信思に堪へかねて走寄り取付き、然るべくは打物を某に預けられ候へ、我等が手にかけて後生を弔はんと申しければ、御計とて太刀を取らせけり。祐信とりて先づ一萬を斬らんとて、太刀差上げ見れば、折ふし朝日輝きて、白く清げなる頸の骨に、太刀影の映りて見えければ、左右なく切るべき所も見えざりけり。祐信猛き武夫と申せども、打物を捨て、口説きけるは、なか／＼思切りて曾我に留るべかりしものを、これまで来りて憂目を見ることの口惜しさよ。然るべくは先づ某を斬りて後に、彼等を書し給へと歎きければ、見物の貴賤、理かな、幼少より育て、憐み給へばさぞ不便なるらんと、弔はぬものはなかりけり。

八 人々君へ参りて兄弟を請ひ申さるゝ事

爰に梶原平三景時近く寄りて、祐信に申しけるは、御歎を見奉るに、推測られて覺ゆるなり、暫く待ち給へ、一ばし申して見んといひければ、彌太郎大に喜びて、暫く時をぞ移しける。誠に景時さしきりて申されんには叶ひつべしと、人々頼しくぞ思ひける。景時御前に、畏りければ、君御覽じて、梶原こそ例ならず訴訟顔なれ。さん候、曾我太郎が養子の子供、只今濱にて誅せられ候、あはれ某に御預もや候へかし。景時が申す條聞召し入れらるべきと、遍く思ひ候ふものをやと申しければ、君聞召して、今朝より源太が申しつれども預けず、汝怨むべからずと仰下されければ、力及ばず、御前を罷立ちにけり。次に和田左衛門義盛御前に、畏り、景時が親子申して叶はざる所を、義盛重ねて申上ぐる條、且は畏少

からず候へども、人を助くる習さのみこそ候へ。義盛御大事に罷立つこと度々なりと雖、わきては衣笠の城にて御命に代り奉り、御世に出でさせ給ひ候ひぬ。その忠節に申しかへて、曾我の子供を預置き候は、生前の御恩と存じ候ふべしと申されければ、君聞召されて、かの者どもの事は、斬らで叶ふべからずと仰下されければ、義盛重ねて申されけるは、素より罪軽くして追罰せらるべきを申預りては、御恩と申し難し、重罪の者を賜りてこそ、掟を背く御恩にて候へ。義盛が一期の大事何事かこれに如かんと、さしきりて申されたりしかば、君も眞に難義に思召しけるが、暫し御思案に及び、御分の所望何をか背き申すべき。然れども此事に於いては頼朝にさしおき給へ。伊東が情なかりし振舞、只今報せんと仰せられければ、義盛力及ばずして、御前を罷立たれけり。その次に宇都宮彌三郎朝綱思ひけるは、面申して叶へられずして罷立たれぬ、さりながら若

やと存じ御前に伺候す。君御覽じて、今日の訴訟人は叶ふべからず、別に思ふ仔細ありとて、御氣色悪しかりければ、申出すに及ばず退出せられにけり。また千葉介常胤座敷に居替りて、畏つて、人々の申されて叶はざる所を申上ぐる條、誠にうだうの跡を尋ね、れいぎのおくひにて候へども、龍の鬚を撫で虎の尾を踏むも、事による事にて候へば、今日の人々の訴訟御聞入れ候は、畏り存じ候ふべき由、かた／＼申すに候ふと申上げければ、君聞召し、御分の事身に代へても餘あり、それを如何にといふに、頼朝石橋山の合戦に打敗けて唯七騎になりて、杉山を出でて結城の浦に著き、既に自害に及びし時、數千騎にて合力せられ奉り、今は世を取ること偏に御分の恩ぞかし、其故忘るべきにあらず。されども伊豆の伊東が怨しきは、知り給ひぬらんと仰せありて、その後は御返事もなし。常胤かさねて申されけるは、恐存じ候ふことなれども、某に限らず今日の



訴訟人時にとりての御大事、誰か身命を惜み不忠を思ひ奉るもの候ふべき。その御志に御免わたらせおはしまして、彼等を御助け候へかし。さても彼等が祖父は忠の者にはあらざるをや。さてこそ御慈悲にて御助け候へとは申せ。奈落に沈む極重の罪人をば、慈悲の佛にも救ひ給はずとこそ聞け。千葉介承つて地藏薩埵の第一の誓願には、無佛世界の衆生を救はんところ、誓の深くましますなれ。君聞召されて、地藏は未だ正覺なり給はずとこそ聞け。かやうの悪人を救ひ盡して、正覺あるべしと承はる、それは慈悲にてましますや。君聞召し、眞にそれは佛の御法の言葉、如來に逢ひて問ひたまへ。彼等は世上のせいとうなり、斬らでは叶ふべからずとて、御氣色悪しく見えければ、その後は物を申さず。御前伺候の人々も力を落し、如何せんとぞ思はれるこそうたてけれ。

九 畠山重忠請申さるゝ事

こゝに武藏國の住人畠山庄司次郎重忠、在鎌倉して筋違橋にありけるが、此事を聞き、取るものも取敢ず急ぎ御前に參られけり。君御覽じて、重忠珍しやと仰下されければ、さん候ふとて深く畏りぬ。や、あつて重忠申されけるは、伊東が孫どもを濱にて斬られ候ふなる、未だ幼く候へば、成人の程重忠に御預け候へかし。君聞召し、存じの如く伊藤が振舞、條々の旨忘るべきにあらず、彼等が子孫におきては如何に賤しき者なりとも、助けおかんとは覺えず、是等は正しき孫ながら嫡孫ぞかし、頼朝が末の敵となるべし、されば誅しても足らざるものを、頼朝怨み給ふべからずと仰せられければ、叶はじとの御詮重ねて申上ぐる條恐れにて候へども、成人の後如何なる振舞仕り候ふとも、重忠かゝり申すべし。其上二期に一度の大事をこそと存じ候うて、常には訴

訟を申さず候へ、これ一つをば御免わたらせ給へと申されければ、君の仰には、彼等が先祖の不忠みなみな存じの事、何とて斯程に宣ふ。此事かなへぬ意に、武藏國二十四郡を上らんと仰下されしぞ、誠に忝くは覺えける。重忠承り、御詮の趣畏り存ずれども、國を賜り彼等を誅せられては、世の聞重忠が耻辱にて候ふべし。某がもと賜りて候ふ所領を參らせ上げ、彼等を助け候ひてこそ、人の思はくも候へと申されければ、君御返事にも及ばせ給はず。重忠居丈高になりて、畏多き申事にて候へども、平治の亂に義朝討たれ給ひき、その御子として清盛に捕込められ、既に御命危く渡らせ給ひしに、池殿申されしに因つて助かりまし。御喜を思召し寄り、彼等を御助け候へかし。君御顔色かはり事悪しく見えければ、暫く物も申されず、悪様なり、申過しぬると存じて、たゞ謹んでありけり。や、暫くありて、君如何思召しけん御扇を颯と開き、實に

重忠宣ふ如く、平家の一門頼朝に情をかけ助置きて、頼朝に退治せられぬ。その如く彼等を助け置きて、末代に頼朝亡されぬと覺ゆる。されば彼等をば一々に斬りて由井の濱にかくべしと、荒らかにこそ仰せけれ。重忠も申しかゝりたる事なれば、言葉もたばはず、延上り、さん候、亡びし平家の悪行いかばかりとか思召す、佛法にも恐れず王法にも従はず、官を停め職を奪ひ子孫に傳はると雖、邪なる沙汰は天これを許さるに依つて自滅す。せいたうじゆんぎにして政專なれば、末代までも如何でか絶え候ふべき。唯神慮に乖かて邪なる事さへ候はずば、位は轉輪聖王と等しかるべしと申されければ、御れう聞召して、忠を高く感じ、科を深く誠むる事邪なるべきにや。其義にては候はず、たゞ御慈悲渡らせ給へとこそ候へ。御敵の末不忠の至陳じ申すには非ず。さりながら幼く候へば成人の程御預け候へかし、忝くも君の御恩に誇り、榮華にそなふること世の人に



優れたり。然れば重忠が訴訟何事も叶ふべしと人々存する所に、御許されなくば、命生きても無益なり、御前にて首を召され候へ。それ叶はずば淺間も御照覽候へ、重忠自害仕り候ふべし。物その身にては候はずとも、某御前にて失せぬと聞き候は、自害とは申し候はじ、一門馳集り御不審の歎を申上げ候ふべし、然らば今日の訴訟人定めて同意ありぬべし、さあらんに於ては、諸國の煩とこそ存じ候へ。君聞召し、左様の儀に到りては頼朝騒ぐべきにあらず、たゞ天の照覽を身に任せ候ふべしとて、御返事もなかりけり。

十 ちやうしが事にて兄弟たすかる事

重忠畏つて、恐存する次第にて候へども、昔大國に大王あり。武勇の臣下を集めて千人愛し、玉の冠黄金の沓を與へて召使ふ。その中の臣下に、ちやう

しといふ賢人あり。大王これを召して仰せけるは、朕が七珍萬寶一つとして不足なる事なし、然るに並びの國の市に、寶の數を賣るなり、汝その市に往きて、我が倉のうちに無からん寶を買うて來るべしとて、多くの寶を與へぬ。ちやうしこれを受取り、かの市に往きて見るに、一つとして洩れたる物なし、然れども王宮には善根ながく絶えてなかりけり。これを買取らんと思ひ、保つ所の財寶を、彼の國の非人どもを集めて悉く施し、手を空しくして歸りぬ。大王問うて曰く、買取る所の珍寶はいかに、見んと宣ふ。其時ちやうし答へて曰く、王宮の寶藏を見るに、金銀珠玉を始として不足なる事なし、されども善根のなかりしかば、買取りぬと答ふ。大王歡喜してその善根見んと宣ふ。ちやうしが曰く、かの國の貧乏者を集め、持つ所の寶を取らせぬと答ふ。大王不思議に思ひしかども、賢人の計ふ事なりしかば、さてのみ過し給ふ。其頃國の胡夷起りて大王を傾く。

合戦に打敗けて並びの國に移りぬ。其時千人の臣下さしも愛せし恩を捨て、一度に遁失せにけり。王一人になりて既に自害に及びける時、ちやうしが曰く、暫く抑へていふ、待ち給へ、この國の市にて買ひおきし善根、此度尋ねて見んとて往く、その寶を得たりし非人の中に、しばうといふ武勇の達者、深き志を感じて多くの兵を語ひ、此王の爲に城郭をこしらへ、暫く引籠りぬ。時あつて運を開き、再び國に歸り給ふ。これ偏にちやうしが買置きし善根の故と國王感じ給ふ。一人當千といふ事、此時よりも始まりけり。其時もと逃失せし千人の臣下、また出で、仕へんといふ。大王聞き給ひて、また事あらば逃げぬべし、新しき臣下を召使ふべしと宣ふ。ちやうし諫めて曰く、始めたる臣下は心知難し、唯もと逃失せし臣下を召使ひ給へ、二度の恩を忘れんやといふ。大王理を聞き、逃失せし臣下を悉く尋出し召使ふ。時にまた國大に起りて、王の宮を傾く。

歸來る所の臣下二度の忘恩を恥ぢて、身を捨て命を惜ず防戦ふ。されば勝つ事を千里の外に得、位を永久に保ち給ふと申傳へて候。彼等も然る者の子にて候へば、御恩を忘れ奉るべきにあらず、遂には御用に立ち申し候はんすれ。君聞召し、それも臣が貴きにはあらず、ちやうしが賢なるに由つてなり。さらば某をちやうしと思召し、彼等を臣下に準へて御助け候は、御の御先途にもや立ち候ひなん。君君たる時は臣禮を以てし、臣臣たる時は、君恩を施すところ見えて候へ。頼朝聞召し、彼等何の禮ありし。重忠承つて、御助け候はいかでかその禮なかるべき、君御許なくば、我々までも榮華に驕るべきにあらず、さあらんに於ては、合はざる訴訟なりとも、一度はなどか御免なからん。理を破る法はあれども法を破る理はなし、罪科と云ひ法と云ひ、如何でか彼等遁るべき。重忠も申しかゝりたる事なれば、身をも命をも惜まず、高聲になりて申しけるは、



國を亡すてんげんも、三世はきかずとこそ承はりて候へ。釋迦如來の、昔せんる仙人と申せし時、道を作り給ふ時、然燈佛通り給ふに、道悪しくして行煩ひ給ふ時に、仙人泥の上に臥し給ひて、御髪を敷き佛を通し奉る。薩埵王子は飢ゑたる虎に身を與へ、慈悲大王は鳩の代に身を掛くる。これ皆末代の衆生を思召す御慈悲の故ぞかし。就中諸國を治め給ふ事、理非を糺し情を旨とし、慙を本とし給ふべきに、是程面々の申されて、彼等を御助けなくば、人頼少く思ひ奉るべし、重忠が一期の大事と思召し、助置かれ候へかしと、眞に思切つたる氣色にて、佛法世法唐土天竺のことまで、引きかけく申されければ、君御思案ありて、誠に此人は内には五戒を保ち、外には仁義を本とす賢人ぞかし、この重忠を失ひなば神の恵に背き、天下も穩なるまじと思召しければ、さらばこの者共を助け候へ、但し御分一人には預けぬぞ、今日の訟訴人どもに悉く許すと仰下されけり。

御前祇候の侍ども、思はずにあつとぞ感じける。實にや、重忠身に代へて申さる、一人には御許もなく、今日の訟訴人どもにと仰下さる、有難さよ、されば天下の主ともなり給ふと、重忠感じ申されけるとかや。

十一 兄弟我曾へ歸り喜びし事

その後重忠は成清を呼びて、幼き人々の事やうくに申し預り候ひぬ。早々子ども召連れられ、祐信に御歸り候へ、曾我に心許なく思ひ給ふべし。御見參に入りたく候へども、御前に候ふ間と云送りければ、曾我太郎是非を辨へかねて、畏り存するとはかりに申されける。さて二人の子供の馬を先に立て、曾我へ歸りける心のうち譬へん方もなし。母が宿所にはこれをば知らで、唯泣くばかりなる所へ、人々歸り給ふと告げければ、母を始めて喜ぶこと限なし。一萬が乳母月冴といふ女房、庭上に走り迎ひ馬の口を

とり、君達の御歸といはんとて、餘に周章て、馬達の歸り給ふぞやと呼はりけり。兄弟の人々馬より下り、母が方に行きければ、一門馳集まり喜の見參ひまもなし。されば頼朝御憤深く、御慙の遍く廣き事は、明哲の君は時にへいようの累をなし、じゆんゑんの臣は屢々親子の悲を懐くとは、文選の辭なるをや、今更思知られたり。



### 曾我物語卷第三終

### 曾我物語卷第四

#### 一 十郎元服の事

光陰惜しむべし、時人を待たざる理、隙ゆく駒繫がぬ月日重りて、一萬は十三歳になりける。身の不祥なるにつけても、また公方を憚る事なれば、竊に元服して繼父の苗字を取り、曾我十郎祐成とぞ名乗りける。

#### 二 箱王箱根へ上る事

母弟の箱王を呼寄せて宣ひけるは、吾殿は箱根の別當の許へ行き法師になり、學問して親の後世弔へ、ゆめく男羨しく思ふべからず、世を通る、身なれば、綾羅綿繡の袖も苦の衣に同じ、十善帝王も身を捨て、人に對するに所なし、憂きも辛きも世の中は、夢ぞと思定むべし。傳聞く、大目連尊者は、母

の教へ給ひし御言葉を、耳の底に保ち給ひてこそ、五百の大阿羅漢には超え給ひしぞかし。構へて法師となりて、父の跡をも我が後世をも助け給へと申しければ、箱王身に思ふ事ありと思ひけれども、承り候ふとぞ云ひける。母悦びて生年十一歳より箱根に上せ、年月を送りける。十二月下旬の頃、かの坊の稚兒同宿二十餘人ありける者どもの許へ、親親しき方より面々に音信どもありけるに、下れと書きたる文もあり、或は元三の装束に、師の御坊への贈物添へたる文もあり、或は父の文母の文、叔父叔母の文とて、二つ三つ讀む稚兒もあり、五つ六つ讀む稚兒もありけり。中にも箱王はたい母の文ばかりに、からく装束添へて送りける。萬羨しくて、文を袂に引入れ傍に行き泣かれて、或稚兒に逢うて云ひけるは、人はみな父母の文親しき方の御文とて、數多讀み給ふに、我れはたい母の御文ばかりにて、父とやらんの御文は知らず、何と書かれたるものぞや



見せ給へ。十郎殿と二の宮殿は、何とやらん此程は  
かき絶え訪ひ給はず、曾我殿はましませども、一度  
の言傳にも預らず、一月に一度なりとも、父の御文  
として、學問よくせよ武勇するな、ど、いはれ奉らば、  
如何ばかりか嬉しく恐しくもありなまし、何時より  
も怨しきは今年の暮、戀しく見たきものは父の御文  
なりとて、さめくくとぞ泣きける。心なき稚兒も理  
とや思ひけん、俱に涙を流しけり。されば箱王は新  
玉の年の祝言をも忘れ、新しき春の朝拜をも物なら  
ず思焦れて、晝夜権現に参りて、南無歸命頂禮、願  
くは父の敵を討たしめ給へと、歩を運びけるぞ無慙  
なる。

### 三 鎌倉殿箱根御参詣の事

かくて権現の計にや、正月十五日に鎌倉殿二所御参  
詣とぞ聞えける。箱王これを聞き、年來の祈の功積  
り、神慮の御惑に如かじとぞ喜びける。實にや九

層の臺は累土より起り、千里の行は一步より始まる  
といふ老子の教も、功は積りて遂に事をなすものを  
と、頼しくぞ思ひける。工藤祐経は切者にてあるな  
れば、定めて御供には参り候はんを、見知らん事よ  
と喜び、其日を待ちし心の中、たゞ千歳を送るばか  
りなり。傳聞くほくしうの命も千歳の限を保つなり  
それも限あればにや、繫がぬ日數重なりてその折節  
にもなりにけり。御伴の人々には、和田、畠山、川  
越、高坂、江戸、豊島、玉井、小山、宇都宮、山名、  
里見の人々を始として以上三百五十餘騎、花を織り  
紅葉を重ね、装束ども綺羅天を輝かし、陣頭に雲を  
覆ひ、水干、淨衣、白直垂、布衣、權勢あたりを拂  
ひ高僧目を驚かす。大凡仲間難色に至るまで、景色  
に色を盡す。後陣警護の武士は甲冑を鎧ひ、弓箭を  
帶する隨兵は上下に番ひ、左右の帶刀二行に並び、  
御調度掛の人弓手馬手に相并ぶ。御迎の伶人は伎樂  
を調へ、羅綾の袂を翻へす。御前の舞人は鷄婁を撃

つて、ふかうの踵を敲つ。君の召さるゝ御船は、大  
船數多組合せ幔幕をひき、沈の匂四方に満つ。是や  
諸佛の弘誓の船も、かくやと思知られたり。侍ども  
の乗りける船數百艘に及べり。いづれも館を打ちた  
りけり。無雙の武具を立雙べ、静りかへり漕ぎつれ  
たり。上代は知らず、未代かゝる見物あらじと、貴  
賤群集をぞなしける。台主稚兒達を引連れ、船津ま  
で御迎に参る。船より社頭までは、四方輿にぞ召さ  
れる。神前には禰宜神主幣帛を大床に捧げ、別當  
社僧は經の紐を玉の薨に解き、神樂男は銅拍子を合  
せて拜殿に祇候す。加之臨時の加役當座の神樂、  
朝倉返しの謠物は、拍子の甲乙を調べて、れいてん  
しよさいの儀をかへり申す、しんかんのおこるをけ  
んてうにして、結縁もまた莫大なり、耳目の及ぶ所  
まうひつに違あらず、かうさつを仰ぐのみにぞ覺え  
ける。

### 四 箱王、祐経に遭ひし事

かくて箱王は御奉幣の時までも、一人一人もつれず、  
介錯の僧一人相具し、御座所の後に隠居て、御供の  
人々を、彼は誰ぞ、是は如何にと委しく問ひければ、  
この僧鎌倉の案内者にて、大名小名の名よく知り  
たれば教へけり。されども未だ祐経をば明さず、あ  
はれ問はばやと思へども、怪しく思はれじとて、殘  
の人を問廻す。君の左の一の座は誰ぞ。彼こそ秩父  
重忠よ。右の一の座は如何に。これぞ三浦義盛よ。  
さて其次は誰人ぞ。里見源太といふ人よ。さてその  
次は。豊島冠者といふ人なれ。唯今のもの仰せられ  
しは誰やらん。これこそは當時聞ゆる根原平三景時  
とて、侍どもの鬼神に思ふものよ。また馬手の方に  
すこし引退きて、半装束の珠數をもちて、香の直垂  
著たるは如何なる人にてあるやらん。彼こそ御分達  
の一門、伊東の主工藤左衛門祐経よ、御分の父河津



殿とは従弟なり、御前さらぬ切者とぞ教へける。さてはそれにてありけるよ、此事思ひよりていふやらん、知りぬれども何事かあらんと思ひこなして云ふやらんと、何時しか胸打騒ぎ、思寄らざる様にて、此者はよき男にてありけるや、三十三にぞなるらん、自が父にや似たると問ふ。少しも似給はず、正しき兄弟さへ似たるは少し、況して従兄弟に似たるものはなし、年こそ河津殿の討たれ給ひし程なれ、其人のましまさば四十餘にてあるべし、これより遙に丈高く骨太くして、前より見れば胸そり、後より見れば俯き、側より見れば四角なる大の男にてましまし、馬の上徒立ならぶ人なし、殊に鹿の上手にて、力の強き事四五ヶ國には雙なき大力なり。されば相模國の住人大庭三郎が弟侯野五郎景久とて、角觥に負けざる大力を、伊豆の奥野の狩場にて、片手を放ちて角觥に三番勝ちてこそ、いと名を揚げ給ひしか。それを最後にて、歸りさまに敢なく討た

れ給ひき、大力と申せども死の道には力及ばずとぞ語りける。箱王は父が昔をつくづくと聞きて、今更なる心地して、忍の涙に咽びけり。やゝありて、我れこの間祈りし願の叶ふにこそあるべし、窺寄りて便宜よくば一刀刺し、如何にもならんと想定めて、御坊はこれにましませ、法師こそよらね、童は近く寄りても苦しからず、山寺に住めばとて人を見知らぬは無下なり、近く寄りて見知らんとて、赤地の錦にて柄鞘巻きたる守刀を脇に差隠し、大衆の中を脱出で、祐經が後近くぞ狙寄りける。祐經も暫の冥加がありけん、梶原三郎兵衛を隔て、箱王を見付けて、これなる童の眼ざし河津三郎に似たるものかな、真やこの御山には伊東が孫のありと聞けば、若しやこれにてやあるらんと、目を離さず守りければ、左右なく寄らざりけり。祐經なほよく見れば、眼の見返し顔魂すこしも違ふ所なし。祐經は念誦果て、の後、大衆の中へ立入つて、伊東入道が孫この

御山に候ふと聞く、何處の坊に候ふぞや、名をば何と申し候ふぞと問ひければ、或僧申すやう、御名をば箱王殿と申して別當の坊にましく候。此頃ほ里に候ふか是に候ふかと問ひければ、これこそとて東西を見廻し、長絹の直垂に松に藤を縫うて、蒨黄の糸にて菊綴して、此方向に立ち給ふこそと教へければ、さればこそと思ひもとの座にかへり、箱王を招きければ、願ふ所と喜びて、祐經が膝近く寄添ひけり。左の手にて箱王が肩を仰へ、右の手にては髪を搔撫でて、天晴父に似給ふものかな、今まで見奉らざる事の本意なまよ。和殿は河津殿の子息と聞くは真か、兄は男になり給ふか、曾我太郎は愛しくあたり奉るか、知らざる者の馴れ馴れしく斯様に申すとはし思ひ給ふな、御分の父河津殿とは従兄弟なり、殿原にも親しきものとは祐經ばかりなり。見奉れば昔の思出でられて、今更哀に存するぞ。急ぎ法師になり別當につき給へ、弟子多しといふとも、祐經

ほどの方人持ちたる人あらじ、便宜を以て上様へも能きやうに申し、師門の訴訟あらば申立つべし。今より後は如何なる大事なりとも、心をおかす仰せられよ、叶へて奉るべし、和殿の兄にもかやうに申すと傳へ給へ。父にも添はで如何に便なくましますらん、行藤乗馬などの用の時は承るべし、身貧にして他人に交らんよりは、親しければ常に訪ひ給へ。實や古き言葉に、貴は賤が嫉み、智者をば愚人が悪む、さいじよは千歳に足らず、報は千劫に足らずと申傳へたり。さても見參の始に折節引出物こそなけれ、また空しからも無念なれ、これをとて懐より赤木の柄に胴金入れたる刀一腰取出だし、箱王にこそ取らせけれ。何となく請取れども、箱王は涙に咽びけり。便宜よくば一刀刺さんと思へども、眼を放さず、その上大の男の常に刀を置きければ、怒なる事を仕出して、小脇とられて人に笑はれじと思止りぬ。たいいふ事とてはさん候とばかりなり。率



爾の見參こそ所存の外なれ、さりながら喜入り存じ候。里下の序には、和殿の兄十郎殿と打連れて來り候へ、返すくと云ひて立ちにけり。箱王力及ばず止まりぬ。且暮れば若しやと便宜を窺ひけれども、宵の程は御前に祇候し居れば、夜更けて罷出づる所を窺ひけれども、庭上に兵、薨をなす、火は天の眼のやうなれば、却りて我身を隠さんと立忍ぶことなれば、人までの事は思も寄らず、左衛門尉が宿坊と御前との間なる石橋の邊に、徘徊し待ちけれども、鱧板の陰に郎黨ども立圍み、前後左右にありければ、それも叶はで、曉に及ぶまで心を盡し狙へども、少しの隙なければ、徒に夜を明す心の中ぞ無慚なる。次の日は君御下向の船に召され、滄海を渡り給ふ。箱王は船津まで人目隠に交りて、敵の後を見送れば、侍ども思ひ／＼の館船にて御供申す。箱王は左衛門が船の中のみ見送りて、泣くより外の事ぞなき。かの松浦佐保姫が雲井の船を見送りて、石と

なりけん昔を思ひやられて、空しく坊に歸りけり。その後いよ／＼此事のみ心にかゝりて、一時も忘れじと思ふ經文をも打捨て、晝夜權現に參り、今度こそ空しく候ふとも、遂には我が手に懸け給へと、祈り申すぞ哀なる。

五 眉間尺が事

されば箱王が親の敵を深く思入りたるにつけて昔を想ふに、ある大國に楚莊王といふ大王あり。后數多もち給ふなかに、とうよう夫人と申す后、御身つねに熱りければ、鐵の柱にむつれつゝ、御身を冷し給ひけるが、程なく懷妊し給ひけり。大王聞き給ひて、位を讓るべき王子もなかりつるに、誕生なり給はん事よと喜び給ひけれども、三年まで生れ給はず。大王不思議に思召し、博士を召し御尋ありければ、眞に君の御實なり、但し人にてはあるべからずと申す。何者なるべきと心許なくて待ち給ふ所に、博士の中

す如く人にはあらで、鐵の丸を二つ生み給ひけり。大王これを取りて莫邪を召し、劍に作らせ給ひければ、光世に超え驗あらたなる名劍にてありけり。大王賞玩し、晝夜御身を離し給ふことなし。然るにこの劍つねに汗をぞかきける。不思議なりとてまた博士をめし占はせ給ふ。勘文にて申上げけるは、過ぎにし金は雌劍雄劍とて劍二つ作りしが、これ夫婦なり。雄劍ばかり參らせて雌劍を隠す故に、妻を戀ひて汗をかき候。れを召して添へて置かるべしと奏聞申しければ、即ちその鍛冶を召されけり。鍛冶家を出づるとて妻女にあひて申しけるは、我が隠置きたる劍を尋ね給ふべきにぞ召さるらん。取出すまじければ、定めて責殺されなん。彼の劍は南山のそこもとに埋みおきたり、我が三歳の男子成人の後、堀出して取らせよと云置きて王宮へ參りぬ。案の如く今一つの劍の行方を尋ね給ふ。知らざる由陳じ申しければ、拷問の後終に責殺されにけり。さて鍛冶

の子二十一歳にして、母の教に従ひ彼の劍を堀出して持ちけり。されども王威を恐れて里へは出でず、山に隠居たりけるが、ある時君王の夢に、眉の間一尺ある者來り、我を殺すべし、その名を眉間尺といふと見えたり。王此夢に恐れて、斯様の者あらば搦めて參らせよと、國々に宣旨を下さる。勳功は功によるべしとぞ聞えし。こゝに伯仲といふもの眉間尺が許に行き、汝が首多くの功に仰觸れられたり。然るに汝がために君王は正しき親の敵ぞかし、さぞ討ちたく思ふらん、我が爲にもまた重き敵なり。己が首を斬りて我れに貸せ、件の劍ともに持ちて行き、大王に近づき討たんこと易かるべし。されば御分が首を借りて本意を遂ぐるに於ては、我れとても遅速の命、王の爲に失ひなんと申しければ、眉間尺聞きて、父の敵討たんに於ては、我が命なにか惜しかるべき、構へてといひて、自ら首を搔落して出だしけり。されども件の劍の先を喰切りて、口に含み持ち



けり。伯仲は劍に取添へて王宮に捧ぐ。大臣に見せられければ、夢に違はず眉の間一尺ある首、また劔も我が持ちたる劔に露も違はずとて、君王喜び給ふこと限なし。されども此首の勢未だ盡きず、眼を見開きたり。大王いよ／＼恐れ給ひて、さらば釜に入れて煮たりける。然れどもなほ眼を塞がず、嘲笑ひてありければ、其時伯仲申すやう、これは大王の御敵なれば、帝を見奉らんと執心により、勢のこると覺え候。何かは苦しく候ふべき、一眼見えさせ給ひて、彼が念をも晴らせ給へかしと申したりければ、君王聞召し、さらばとて端近く出でさせ給ひて、釜の邊に近づき給ふ。其時眉間尺が首、口に含置きし劔の先を王に吹懸けければ、即ち大王に飛びつき首を打落す。伯仲走寄り大王の頭を取り、眉間尺が煮らるゝ釜のうちへ投入れたり。王の首も勢劣らず、眉間尺が首と喰合ひけり。其時伯仲山にて約束せし事

なれば、我も大王に野心深し、此爲ぞかしといひも果てず、我が首を搔斬り釜の中へ投入れたり。この三つの首釜の中にて一日一夜ぞ喰合ひける。つひに王の首負けにけり。その後二つの首も威勢衰へにけり。執心のほどぞ恐しき。さてこの三つの首を三つの塚につきこめて、三王の三塚とて今にとりてぞ傳へける。今箱王も未だ幼きものなれども、親の敵に心をかけ晝夜忘れぬ志、是にも劣らじとぞ見えける。これや文選の言にも、流長じては則ち盡難く、願深くしては則ち朽難しと見えたり。さればこの人の成長の末、さこそと言はぬはなかりけり。

六 箱王曾我へ下りし事

さる程に歲月過行ければ、十七にぞなりにける。或時別當箱王を近づけて、御分は早や十七になり給へば、上洛し受戒をし給ふべし。垂髪にて上り給はば、ものゝ清からで叶ふまじければまた大事なり、

是にて髪を下して上るべしと宣ひければ、身に思のあるものを思ひながら、御計とぞ申されける。さらばとて大衆に觸れ、出家の用意ある。母の方へも言下しけり。既に明日と定りければ、箱王つくづくと思ひけるは、法師になりたりとも、折節につけて此のこと思ひ思は、罪深かるべし、一向に思切り男になりて本意を遂ぐべし、その砌には後悔するとも叶ふまじ、此事を十郎殿と云合せて、ともかくにも定めてと案じ、人にも知らせずして、唯一人夜にまぎれて曾我の里へぞ下りける。山月東に前途を指して而も思を勞す、邊雲秋冷しくして、後會を同じくして而も魂を銷すといふ、藤原のこくほが饒別の詩、今更思出でられて、曾我の里にぞ著きにける。十郎が乳母の家に立入りて、十郎を呼出して對面しければ、如何にしてみましたや、明日は一定出家のよし聞きつる間、上りて見奉らんと存する所に、下り給ふ事の嬉しさよと云ひければ、箱王聞きて、の

びくの御心なるべしと思ひつるに少しも違はず、かやうの事はと豫てより御定め候へかし。既に明けなば事定るべし、打延びて道行くべきにあらず。よくぞ参り候ひけるものかな、御左右を待ち参らせなば、空しく髪剃られなん。それにつきては一年、鎌倉殿箱根御参詣の時、祐經御供せしを見初めしより、少しも忘るゝ隙もなし、たとひ法師になり候ふとも、この悪念は晴れ候ふまじ。一念無量劫となる事、今に始めざる事にて候へば、思煩ひて罷下りて候。定めて御上り候はんと存じ候ひしかども、其儀も候はず、申合せてこそ兎にも角にもなり候はめ。若しまた思召し捨てさせ給はば、この序に上洛して、我が山にて髪剃落し、肌を墨に染隠し、足に委せて頭陀を食して、一期の程親の後世懇に弔ひ奉るべし。また男になり御豫の御事は承り切るべし、身の浮沈今に候ふなり。怒に罷下りて歸參せんも見



苦し、あとに如何ばかり騒ぎ候はん、夜も更行き候ふと責めければ、やゝあつて、祐成が心を見んとて斯様に宣ふか、烏帽子を著せん事をこそ案すれ、何しに思案に及ぶべきといふ。箱王聞きて、さ程思召し定むる事、などや豫てより承り候はぬや。某罷下り候はずば、御左右あるまじきにやと云ひければ、十郎聞きて、これ別當も知り給はぬ事あらじ、夜明けて上らんと存じ候ひしに、嬉しくも下り給ひけるといひければ、箱王申しけるは、母や師匠の御心に違はんこと如何はすべきなれども、何方の御事も一旦の事と覺えたりと云ひければ、十郎聞きて、その科をば祐成に任せよ、如何にも申し許すべし、夜も明け、ればいざやとて、馬に乗りたゞ二騎曾我を出でて、北條へこそ行きにけれ。

七 箱王が元服の事

かくて兄弟の人々は、さきくも常に越えて遊ぶ所

なりければ、時政見参して、如何に珍しやと色代しければ、十郎笏とりなほし申しけるは、弟にて候ふ童を、母が箱根へ上せて法師になさんと仕り候へば、世に武勇にて學問の名字をも聞かず、剩へ鹿取喰はで叶はじと申し候ふ間、堅固の徒者、教に順はざらん弟子をば、早く父母に返すべきといふ言葉につき、里へ追下さるゝ折を得て男にならんと仕り候ふを、母にて候ふ者、曾我太郎など、頻に制し候ふ間、親しき三浦の人々伊東の方さまにてと存じ候へども、御前にてと存じ相具して参りて候。假令道の傍にて頭を切りて候ふとも、御前にて申し候はゞ、其身の勘當は候ふまじと申しければ、誠に面々の御事見放し申すべきにあらず、然れば餘所にてあらば無念なるべし、尤も本望なり、時政が子と申さんとて、髪を取上げて烏帽子を著せ、曾我五郎時致と名乗らせ、鹿毛なる馬の五さう選しきに、白覆輪の鞍おかせ、黒糸の腹巻一領添へて引かれけり。常に越えて

遊び給へ、定めて母の心には違ひ給ふべしと、色代して歸りけり。

八 母の勘當蒙る事

さても箱根の別當は、箱王が曾我へ下りし事をば知らで明け、れば、授戒の用意として箱王を尋ねけるに、聞の枕も衾もかはらで、主は見えざりければ、急ぎ曾我へ人を下し尋ねけれども、これにもなしと答へければ、別當大に驚き、方々を尋ね給ふぞ思なる。その後十郎は五郎と打連れて、曾我へ歸り來りぬ。内の者ども見て、箱王殿を男になし、十郎殿の連立ち參らせてましくたりといひければ、母聞きて、別當の物騒しく尋ね給ひけるぞや。十郎昨日より見えざるといひつるが、弟が法師になるを見んとて箱根へ上りけるかや。稚兒にてよりも悪きやらんと、男になりたるといふを、法師になりたると聞紛ひ、何時もの處へ出で、これへと宣へども、身の科によ

り、五郎は左右なく内へも入らざりけり。母待兼ねて急ぎ見んとて障子を開け、れば、男になりてぞ居たりける。母思の外にて二目とも見ず障子を引きたて、これは夢かや現かや、心憂や、今より後子とも思ふべからず、見もせず音にも聞かざらん、何方へも迷行け、假初にも見ゆべからず。何のいみじさに男にはなりたるぞや、十郎が有様を羨しく思ふか。一疋持ちたる馬をだにけなだらかに飼はず、一人具したる下人にだに、四季折々に扶持もせず、明暮見苦しげにて目も當てられず、世にある人々の子供を見るときは、誰にか劣るべきと思ふにも、涙の隙はなきぞとよ。思知らずして物に狂ふか恨しや。法師になりぬれば、上臈も下臈も乞食頭陀をしても耻ならず、また下臈なれども慧智才覺あれば、法師に謗なし。十郎だにも男になし、事の悔しくて、入道せよかと思ひたる所に、口惜の有様や。善を見ては喜び悪を見ては驚けとこそいへ、あはれ河津殿ほど



罪深き人はなし、後世弔ふべき人は御敵とて亡び果てぬ、たましく持ちたる子供さへ、孝養すべき者一人もなし。まことに末の絶えなば、現の本領をよそに見んも悲しくて、若しやと思ふ頼に、兄は男になしたれども、親の後をこそ継がざらめ、名をさへ替へて曾我十郎などと云はるゝも口惜しく、一人の子は父死して後生れしかば、捨てんとせしを叔父伊東九郎養育せしかば、それも平家へ参り給ひて後は、思ひかけざる武藏守義信とりて養育して、今は越後のくがみといふ山寺にありと聞けども、父をも見す母にも親まねば、思出だして一遍の念佛を申す事もあらず、それはたゞ他人のごとし。かの子をこそ法師になして、父の孝養をもさせんと思ひしに、かやうになりゆく事の悲しさよ。而も忘るゝ事はなけれども、心ならず忍びてこそ過せ、今は誰にか後の世を弔はるべき。あはれかゝる憂身の生をかゆる憤、昔よりなどやなかるらん。それ良薬は口に苦

くして而も病に利あり、忠言は耳に逆ひて而も行を利せりと申す言葉のあるなるに、よく案じても見給へと、泣くく口説きければ、五郎物越に聞き泣居たりけるが、兄の方に歸りて申しけるは、只今の母の仰せられし事ども、一々にその謂ありと覺え候。死し給へる父を悲みて孝養を致さんとすれば、生きてまします母の不興を蒙ること、これ誠に不孝の至なり、身の罪の程こそ思知られて候へ。遍く人の知らざる先に、髪を切り候はんと申しければ、十郎いひけるは、母の勘當はかねてより思設けし事なり、さればとて昨日男になりて、今日また入道するに及ばず。人こそ數多知らず共、先づ北條殿の思はれん事も軽々しく、且は物狂しきにも似たり、死生の事にてはあらず、いざや何方へも行き去り候はんとて、打連れてぞ出でにける。遊ぶ所は、三浦介義澄は叔母智なり、土肥次郎が嫡子の彌太郎も叔母智なり、平六兵衛は従姉妹智、北條殿は烏帽子親、

二宮太郎は姉智なれば、彼等が許に通ひつゝ、二三日四五日づつぞ遊びける。たましく曾我に歸りても、五郎は不興の身なれば十郎が許に隠居て、母の戀しき折々は物の隙より見奉れども、我が身は見えずと隠れける。さては人界に生るゝとはいへども、白駒の際を過ぐるに似たり、老少不定の習なれば、彼も我き後れ先立つ慣、空しかるべきこそ無念なれ。時致も法師になるべき身の、男になりて母の勘當を蒙るもこの故なり、いかにも疾く急ぎ給へと申しければ、祐成も嘸と思ひ候へ、さりながら今一人も語ふべしとぞ申しける。

九 小次郎語ひ得ざる事

こゝに京の小次郎とて一腹の兄弟あり、かれは河津殿より先に、京の人に相馴れて設け給ふ子なり。彼を呼寄せて語はんと云ひければ、五郎聞きて、御計こそ大事にて候へ、一腹一生の兄ならば、如何に臆

病に候ふとも、罪科通れ難くて同意すべし、彼は別の事なり、いかでか左右なく大事を仰出だされん、治りがたく覺え候、御思案には過ぐべからず候、若し聞入れずば悪き事や出来なん。橋はいほくに生じて積殻となる、水土の異ればなり。隔のあれば兄弟なり共、心を置くべきものをやと云ひければ、十郎聞きて、さりとも其義はあらず、男といはるゝ程の者、一定他人なりとも、打頼まんに聞かざる事やあらん、況して一腹の兄弟にて、いかで同心せざるべきとて、小次郎を呼びて云ふ様、豫ても大方知り給ひぬらん、此事を思立ち候。されば一期の大事はなれば、唯二人して遂難し、三人寄合ふものならば易かるべしといひければ、小次郎聞きて大に騒ぎ、此事如何思ひ給ふ、當代左様になりては、親の敵其數ありと雖、勝負を決する事なし、たい上意を重くして肩を並べ膝を組む次第なれば、是を恥ともいはずして、所領を持つ折節なり、當時左様の事する者



は、剛の者とは云はで痴者とこそ申せ、まことに敵を現前におきて見給ふ事の淺ましくば京都に上り、如何にもして本所の未座にも列りて、院内の御見参に入り、冥加あらば御氣色を窺ひ、院宣旨を申下し鎌倉殿につけ奉り、敵を本所に召上せ、記録所にて問答し敵を負かし、所領を心に任すべし、朝敵となりては叶ふべからず。古人の言葉にも、徳を以て人に勝つものは榮え、力を以て人に勝つものは遂に亡ぶと見えたり、其上さばかり果報めでたき左衛門尉を、各の力にて討ち給はん事かなふまじ、止り給へと言捨て、ぞ立ちにける。兄弟の人々は、大事をば云聞かせ、言葉にもかけず座敷を蹴立てられぬ、呆果て、ぞ居たりける。稍、ありて五郎申しけるは、さればこそ今はよき事あらじ、日本一の不覺人にてありけるもの。所知莊園の敵ならばこそ訴訟をもちたさめ、不思議の事をいひつるものかな。金を試みるは火なり、人を試みるは酒なり、かの者は酒をだ

に飲みぬれば何事かな云はんと思ふものなり。それ大海の邊の狸々は、酒に著して血を絞られ、蒼海の底の犀は、酒を好みて角を切らるゝなり、斯様の理を知りながら、云ひつる事こそ口惜しけれ。一定母や二宮太郎にいひつる事と覺えたり、それならば曾我殿に語りなん、さあらば母も知り給ふべし、かれこれ以て祐經に知られて却つて狙はれんこと疑なし、かゝる大事こそ候はね、第一上に聞召されては、死罪流罪にも行はれ、身を徒にせん事の無念さよ、いざや此事洩れぬ先に、小次郎が細頸打落し、九萬八千の軍神の血祭にせん、我等が爲たるとは誰か知るべきと云ひければ、十郎聞きて、さればとて斯程の大事いかでか洩すべき、罪の疑をば軽くし功の疑をば重くせよ、喜ぶ時は安に無功を賞し、怒る時は濫に無罪を殺す、これは大なる誤なり、佛も深く誠め給ふ、心得べしといひければ、五郎聞き、これは無罪を殺すにては候はず、斯る不覺人、有罪とも無

罪とも言葉に立たざる奴をば、急ぎ暇をくれ候ふべきにて候ふと申しければ、いかでか他人にかくと云ふべき、是もたゞ我等を世にあれと思ひてこそ云ひつらめ、さらば口を堅めんとて追付き、唯今申しつる事は戲事なり、眞顔に人に語り給ふな、若し聞ゆるものならば、偏に御邊の所爲と存じ、永く怨み奉るべし、返すくゝと云ひければ、承るとて去りにけり。この約束ありながら、小次郎思ひけるは、餘所へ洩さばこそ悪しからめ、母に見參して此事を委しく語るに、母聞きもあへず十郎を呼びければ、五郎さきに心得て、此事と覺えたり、時致も身を隠し御供して聞き候はんとて、十郎と打連れて母の所へ來り物越に聞けば、母、女房達を遠退けて、泣くゝ宣ひけるは、實か、和殿はらは、さばかり恐しき世の中に、謀叛起さんと宣ふなるか、妾や二宮の姉をば何となれと思ひて、斯る悪事をば思立ち給ふぞ。死したる親のみにて生きたる妾は親ならずや。箱王が

男になるも和殿が賺出してこそ男にはなしつらめ、和殿無用のこと企てつるもの哉、耻は家の疾にて末代まで失せずと雖、事にこそよれ、世にあらんと思は、耻を忍びて益を蒙れとこそは申せ。實にや河津殿の討たれし時、妾思に堪へかねて云ひし事を聞き保ち給ふか、一旦はさこそ思ひしが。狩場へ打出で給ふに、四五百騎の中に優れて見えしが、歸りざまに引換へたりし悲さに、火にも水にも沈まんと思ひしに、五つや三つになりしを左右の膝に据ゑて、汝二十にならざるさきに、親の讎を討ちて見せよと妾いひし時、箱王は聞きも知らず、和殿云ひつるは、早く大人しくなりて、父の讎の首を何時か斬らんとすして、母がいひし事なればとて、斯様に思立ち給ふかや、うたてさよ、返すくゝも止まり給へ。此頃

は昔の世にも似ず、平家の世には伊豆騎河にて敵討ちたる人も、武藏、相模、安房、上總へも越えぬれ



ば、日數積り年隔りぬれば、さてのみこそあれ。當代には聊も悪事をする者は、蝦夷が島へ渡りてもその科通れず、又親しき者までもその科通れ難し、女とても所にもおかれず、幼けれども助かる事なし。斯様にさしも厳しき世の中に、いかで悪事を思立ち給ふぞ。汝等十一九つになりし時、祖父伊東の御末とて召出し、すでに斬らるべかりしを、畠山殿自然の事あらばかゝり申すべしとて預り申し、命どもを助けられしぞかし。數ならぬ妾が事はさて措きぬ、重忠の大事をば如何し給ふべき。妾が生きたらん程は眼を塞ぎ耻をも餘所にしてまませ、心憂きめを見せ給ふな殿原。今までありつけざるこそ心にかゝり候へども、何事も思ふやうにあらねばぞとよ。妾が身にては憚あれども、男は思はしき者にだに逢へば、さやうの詮なき心は失するぞや。あはれ父だにましまさば、妾に心に盡させじ。如何なる人の聲にもなり、思止りて念佛をも申し、父にも回向し妾をも助

けよ。論語に曰く、極めて衰ふる時は、必ず復盛なる時ありと申すに、などや方々のさのみ申す事の叶はざらん悲さよ。箱王は如何に男にはならんといふとも、御邊の止めんに左右なく男にはなるべからず。あはれ實にかなはぬ事なれども、妾死して父だに生きてましまさば、如何なる不思議を思立つとも、父の命をば背かじ。二宮の女如何なる事を思立つ共、妾が打口説きいはんに、なかは聞かで候ふべき。男子の爲に母親は何にも立たずとて、さめぐと泣き給ふぞ哀なる。十郎流る、涙を直垂の袖にて押しめ、謹んで居たりける。やゝありて母宣ひけるは、此事を小次郎大に驚き制させんとて聞かせたるぞ、さればとて小次郎を怨み給ふな、人に知らすなとて、自が口を固めたるぞ。それ程の大事を左右なく語り申すは、この殿ばら歸り聞きては悪様に思ひ候はんすらめども、人々の祖父こそあらめ、さのみ末々まで絶さんこと不便なりと思召され、君より御尋あ

りて、先祖の所領を安堵するか、然らば別の御恩を蒙り候はば、各々迄も面目にて候ふべしとて申して立ちつるぞ、それも殿原を思ひてこそ言ひつらめ、ゆめ／＼憤り給ふべからず、理を枉げて思止まり給へと宣ひければ、十郎、承りぬ、但し此事は何となき戯に申しつるを、實顔に申されつらん不覺さよ、且は御推量も候へ、當時我等が姿にて思も寄らぬ事とて立ちければ、五郎も足拔して立ちけるが、十郎に申しけるは、さればこそ申しつれ、小次郎を失ふべかりつるものを。助置きてかゝる大事を漏されぬこそ安からね。心に懸らん事をば逡巡ひ候はず一さうにすべきものを、憐み胸をも焼くとはかゝる事をや申すべき。今はかなはじ、我等が所爲と思はめて敦圀き居たり。さて此こと思止るべきやうに、妻子持ちて安堵せよと仰せられつるこそ耳に留りて候へ。寒き者は珠玉をも貪らで暖寒を思ひ、飢ゑたる者は千金をも願ずして一食をひす。身に思のあれ

ば萬事を願ずして、所領所帯も望なし、思ふ事こそ忙しく存すれ。男の心止るものは妻子に過ぎずと雖、我等が討死の後、遺留りて山野に交らんも不便なり、また男女の習若き子一人も出来たらば如何せん。我れ法師になるべき身なれども、この爲に斯様になりぬれば、定めたる妻持つべからず、遊者などには夫の僻事かゝるまではあらず、されば手越黄瀬川の邊にて、然りぬべき遊君あらば遊馴れて通ひ給へ、しかも道の邊なり、敵を窺ふべき便も然るべしと申しければ、さ承り候、さりながら執心後世のため然るべからず、一日も命あらん限は、心静に念佛申して後世を願ふべし。我等が命あるかなきかの如し、今あればあるがやうなり、只今も便宜よくば打出でなん、阿彌陀佛と申して過行きける、心のうちこそ無慙なれ。

十 大磯の虎思染むる事



されば執著身を離れず、をんせい盡きずして、大磯の長者の女虎といひて十七歳になりける遊君を、祐成年頃思染めて、竊に三年ぞ通ひける。是や古き言葉に、寫得たり楊妃たうの態をなし、表せり人民仰ぎたる唇をなんと思出して、折々情を殘しける。五郎も影の如く時の間も離れずして、諸共に通ひけり。是もたい敵を若しやと便宜を狙はんとぞ見えし、志のほど無慙といふも餘あり。或時敵左衛門尉伊豆より鎌倉へ参りける折節、曾我兄弟大磯にありけるが、五郎見付けて十郎に告げたりけるは、斯様の便宜を狙はん爲にこそ、年來これへも通ひつれ、とがみか原こそよき原なれ、いざや追付き矢一つ射んとて、弓押張り矢掻負ひ、馬に打乗り追付き見れば、江間小四郎打連れて、五十騎ばかりにて打圍み歩ませければ、左右なく二騎驅入りて討たん事も叶ふまじ、一期の大事にてありければ、仕損じ笑はれんより、たい何となく通らんと思ふは如何にといふ。時致も

斯うこそとて、打連れて通りけり。是より歸らば人も怪しと思ふべし、序に三浦へ通り候へとて、遙に引下りて歩せゆく程に、彼は鎌倉へ往きぬ。兄弟は三浦へこそ往きにけれ。

十一 平六兵衛が喧嘩の事

爰に十郎が身にあて、思はぬ不思議ぞ出来にける。故を如何にと尋ぬるに、三浦の平六兵衛が妻女は、相澤の土肥彌太郎が女なり。この人々とは従兄弟なり。幼年より叔母に養せられて伊東にありける程に、十郎と一所に育ちけり。やう／＼成人する程に、十郎彼に忍びて情を懸けたりけり。互の志深かりければ、家にも取据ゑ實の妻にも定むべかりしを、敵を討たんと思ひける間、家を忘れてたゞ女の許へぞ通ひける。かくて日數を徑る程に、父是をば知らずして、平六兵衛に娶すべしとて請ひけり。忍ぶことのありければ人知らで、成人の女ひとり置おくべき

にあらずとて、三浦へ遣りにけり。女またかゝる事ありと言ふべきにあらねば、十郎が方へ文をやり委しく問ふ。されどもけはしく實の妻とも頼まざりければ、怨の袖奏るゝのみにて、親に計はれて、力及ばずして義村が方へ行きにけり。されども志の深ければ、或時義村が在京の際に、忍びて十郎が許へ文を遣しけり。従妹の文なりければ、祐成見て苦しからずと思ひけれども、留守の間は然るべからずとて返事もせざりけり。人の口の善悪なさは、義村に知らせたり。不思議に思ひ内々尋聞かばやと思ふ程に、京都の御用過ぎて鎌倉へ参りけるに、曾我の人々は三浦より歸様に腰越にて行合ひけり。兄弟の人々は三浦の殿原とは知らで、馬鞍見苦しと思ひければ傍へ駒打寄せ、人々を通さんとす。平六兵衛は曾我十郎と見て、日比の便宜を喜び、郎等二三騎あるを遙のあとに残置き、宗徒の者六七人相具して、この人々の隠れたる舟の陰に押寄せ、實や御分は

義村が在京の間に聞く事ありと、苦々しく云ひかけたり。されども十郎事ともせず嘲笑ひ、如何様人の讒言と覺え候、よく／＼尋ね聞召し候へ、かやうの次第見参に入り直に承り、所縁のしるしと存するなり、假令身に過ありとも、一度は御免にや蒙るべきとぞいひける。五郎は義村が大に怒りたる氣色を見て、靱より大雁股拔出し、矢先を義村にあて、唯一矢にも思ふ顔魂さし現れたり。義村五郎が勢を見て、誠に大剛の烏譚の者なり、今勝負しては損なり、後日こそと思鎮めて、何となき辭義にいひなして静りぬ。この人々事弱くも見えなば、即ち討果すべき體なりしかども、五郎も思切りたる色見えければ、その儘通りにけり。身を軽くして名を重くすれば、十分に死ぬべき害を免るゝとは、斯様の事をいふべきにや、不思議なりし事ともなり。

十一 三浦のかたかひが事



爰に此人々の叔母智に、三浦別當といふ者あり。これにかたかひといひて優なる美女を召使ひけり。別當折々情をかけたらしを、女房安からずと思ひ、淵河にも身を沈めんと云ひければ、如何でか彼等體の者に思換へ奉るべき、月待つほどの夕まぐれ、風の便の徒然を慰むにこそ。今より後は思捨つべし、心安くといひけれども、猶も思止らで、埋火の下に焦る、薰物の匂は餘所に現れて、移る心をこのまゝにて事を限らんと思ひつゝ、十郎に言合せんとて、急ぎ人を遣して十郎を呼寄せけり。何時となく行き睦ることなれば、叔母は十郎を傍に招寄せ、これにかたかひとて召使ふ女あり、容心様優に品世に超えたり、獨あれば如何なる事もこそと覺束なく覺ゆれば、風の便の音信に待つには音する習なり、何かは苦しかるべき、曾我へ具足し給へかしと語りければ、親方のいふことなり、かねて斯様の事ありとは夢にも知らず、承りぬといふ。叔母やがてかたかひを呼

出して、しかなくと語る。十郎は曾我に用の事ありければ、その夜を待つまでもなく暮程に歸りけり。このこと別當が郎等ども仄聞きて、かたかひを曾我へ取りて行くぞと心得て、伊澤平藏、はかせの源八、難波の太郎を先として、宗徒の者ども七八人寄合ひて、不思議の事を振舞ひ給ふ祐成かな。是程のこと別當に申すまでもあるべからず、いざや行きてかの女房奪返さん、然るべしとて、馬引寄せ、打乗つて、三浦を打出でつぶな川の端にて追付きたり。彼等かたて矢をはげて矢筈を取り、餘すまじとて追驅たり。十郎何事とは知らねども、仔細ありと心得て馬より下立ち弓取直し、何事にやと問ふ。此者ども追驅け見ればかたかひはなし。されども言懸りたる事なれば、御振舞然るべからず、尋ねて參らん爲なりとて、既に事實に見えけり。始終をも知らず敵はまた叔母の若黨なり、打ちちがへても詮なし、如何にもして遁ればやと思ひければ、自ら弓を投出

し、陳ずるには似たれども、身におきて事を覺えず、さもあれ曲事ありとも斯様にはあるまじ、静り給へ、別に思ふ仔細ありて降を請ひ申すなり、自然の時思知るべしと云ひければ、伊澤平藏、仰の如く人の讒言にてもやあるらん、正しくかたかひをば具足して御越とこそ聞きつるに、さもあらねば改むるに及ばず、其上御ちんはうの上は重ねて申すべからずと、皆三浦へ歸りけり。十郎はこゝにて腹を切り、打違へても慊らす思ひけれども、父の爲に供へおきたる命、思はざる事に果つべきかと思ひ、害を遁れけるこそ無慙なれ。別當これを後に聞きて、涙を流し宣ひけるは、思忘るゝかと案じつるに、未だ心にかけるゝや、十郎呼べとて呼ばせけり。過たず歸來りぬ。三浦別當對面して、さてもこれなる者共の聞分けたる事もなくて、不思議の振舞仕るとな、全く某は知らず候。若し詐り申さば二所大權現も御照覧候へ、弓矢の冥加立所に絶えなん、思寄らざる事

なり。たとひ面々の過十分にありとも、如何でか斯様の沙汰を致すべき、それ程の事に迷ふべき身ならず、豫ても知り給ひぬらん、思遣り給へとて、かたかひを呼出し、十郎に取らせけり。謹んで申しけるは、仰までも候はず、御計とは夢々存せず、その上身に過候はねば無念と申すべきにもあらず、さるに取りては苦しく候ひぬとて、かたかひをば別當の許に捨置き、曾我の里へぞ歸りける。かの郎等ども深く勘當しけるとかや。此事を委しく問ひければ、女のわざにてぞありける。されば嫉妬の深き女は、前後を辨へずして家を失ふ、例へは今に初めずといへども、斯程の大事出でなんと知らず、言合せけるぞ實の嫉妬にてぞありける。別當は、如かじたい向顔せざるまでとて、女を離別しける。理とぞ聞えし。さても十郎が爰を遁れけるにて、左傳の詞を思ふに、身に思のある時は、萬耻をすて、害を遁れよとなり、おひ合ふ心なるとかや。



### 十三 虎を具して曾我へ行き し事

かくて月日を送りけるが、定むる妻持つべからずとて、たゞ虎が情ばかりに引かれて折々通馴れける。互の志の深き事はふつくんにも劣らず、千代萬代とぞ契りける。抑々この者と申すは、母は大磯の長者、父は一年東に流されし伏見大納言實基卿にてぞましましける。男女の習、旅宿の徒然、一夜の忘形見なり。されば虎が心さま尋常にして、和歌の道に心を寄せ、人丸赤人のあとを尋ね、業平の昔、源氏伊勢物語に情をうつし、春は花の梢に散りまがふ、霞がくれの天の雁、雲居の上に心を残し、秋は月の前に、曇らぬ時雨の夜嵐に、明行く雲の浮枕、鹿の音近き野邊ごとに、蟲の聲々物凄く、哀を催す小田守の、庵さびしき木枯まで、心をやらぬ方はなし。住みも定めぬ世の中の、移變るも怨しく、戀のくれと

や許を、頼み顔なるうら情、向ひていふも流石なり。さてまた何時と夕づかた、五月始の事なるに、南表の御簾近く立出でて、來方行末の事ども、つくづくと思ひつらぬるに、實に男の心ほど、頼み少きものはなし。實に淺からず契りしも、空しかりける妹春の中、頼みし末も何時しかに、變果てぬる言の葉かな。さてまた何時の同じ世に、逢ひて怨を語るべき。實にや昔を思ふに、物は遠きを珍しく、年は稀なるを貴しとすと雖、何とてさのみ疎きやらんと、涙に咽ぶ夕暮に、五月雨の風より晴る、雲の絶間、それとしもなき時鳥、たゞ一聲に聞き堪へぬ。憂身の上もかくやらんと、古き歌を思出して、

夏山に鳴く時鳥心あらば  
もの思ふ身に聲な聞かせそ

と打詠めて立ちたるところに、十郎三浦より歸りけるが、佇みたる縁の際に駒打寄せ廣縁に下り、如何にや、程遙に見参に入らず、心もとなきとて、鞭に

て簾打揚げ立入りければ、虎は返事もせずして内に入りぬ。祐成心得ず思ひ、情は人の爲ならず、無骨の所へ参りたり、復こそ参らめとて駒打寄せ乗らんとす。虎いそぎ立出でて、さやうに思ひ奉らず、此程かき絶え給へる怨しさといひ、萬世の中の味氣なくて、涙の零る、顔の恥しくてと打笑ひ、袖差翳し、申すべき事の候ふ暫しやとて、直垂の袖に取付きたり。心弱くも祐成は、引かる、袖に立歸り、さぞ思すらん、此程は立つ名の餘所に洩るゝと疎略はなきを、何となく打紛れつる本意なきよと、細々と語り、今宵は此處に止りつ、枕の上の睦言を夢にもさぞと思へども、さして所用の仔細あり、いざさせ給へとて誘ひ、乗りたる馬に打乗せ、曾我の里へぞ歸りける。日頃よになしもの、君を思ふとて、内々母の制し給ふよし聞きければ、幾程あるまじき身の、心苦しき思はれ奉らじとて、母が許より北に造りたる家あり、此處に隠置きぬ。祐成此程遙に母を見奉ら

ず、参りて見参らせんとて、杳行驟いまだ脱がざるに、母の方へぞ出でける。祐成を見給ひて、如何にや遙にこそ覺ゆれ、中々御方がやうにあらば、見んとも思寄らじ、生きて妾が孝養に常に見え給へ。和殿の父討たれ給ひて後は、偏に形見と思ひ、いとほしくも頼しくも思ふぞとよ。箱王と申せし若者は不孝にして行方も知らず、和殿は何を不審して、此程遙に見え給はぬぞと口説き給ひけり。後に思合すれば、添果つまじきにて、斯様なりと哀なり。十郎承つて、無慙の子やと御覽せんも今幾程と哀にて、何となく親しき方に遊び候ふとて、扇をとり直し、忍ぶ涙は隙もなし。母また仰せられけるは、是程に事事しく親に思はれて何かはせん、せめて五日に一度は見え給へとありければ、十郎涙をおさへて、承りぬとて罷立ちにけり。虎をばその夜留置きけり。



曾我物語卷第四終

曾我物語卷第五

一 淺間の御狩の事

刑鞭蒲朽ちて螢空しく去り、諫鼓善深うして鳥驚かぬ、御代静なるによりて、頼朝は晝夜の遊覧に、月日の行くを忘れさせ給ひけり。或時梶原を召して、さしたる事もなきに國々の侍を召すに及ばず、近國の方々在合はんに從ひて用意あるべし、信濃國淺間野を狩らせて見んと仰下されけり。景時承つて此山を相觸れけり。面々の仕度分々の大事とぞ見えし。曾我五郎聞きて兄に申しけるは、信濃の淺間を狩らせらるべきにて、近國の侍に觸れられ候。あはれ御供申して便宜を窺ひ候はいや、かやうの處こそよき隙もありぬべく候へ、思召し立ち候へと申しければ、如何せん信濃まで御供仕り候はい、我等がなかに馬の四五疋もありてこそ思立ためといふ。

斯様に思召し候はい、此事一期の間かなふべからず、恐入つて候へども、悪しき御心得と存じ候。君に仕へ御恩蒙りいみじき身にて候はい、馬をも牽かせ乗換をも具して美々しく候ふべし。かやうのこと思立つ身は耻をも思ふべからず、榮華名聞世にありての事にて候。唯蓑笠糧料持つ者四五人召具し、姿をかへて藁沓縛履きて、弓矢は事々し、太刀ばかりにて雜人に交り、宿々にて便宜を窺ふには如くべからす。曾我には、三浦北條にていつもの如く遊ぶらんと思召し候ひなんと申しければ、然るべしとて出でにけり。其日ばかりに馬にぞ乗つたりける。誠に思入つたる姿哀にぞ見えし。鎌倉殿は武藏國關戸の宿に著かせ給ふ。旅宿の慣、盗人に馬取らるゝな、怪しき者あらば堅く咎むべしなど、用心厳しかりければ、寸の間も隙なかりけり。兄弟の人々は、夜もすがら微睡むほどの枕にも打寝すして、此處や彼處に徘徊して、明しけるこそ無慙なれ。明ければ、



入馬の久米にて追鳥狩ぞありける。此人々は列卒の者どもに打難り、狩杖振立て、心も起らぬ鳥をたて、落場に目をば懸けずして、若しも尋ぬる人もやと、岡の遠見に立難り、此處や彼處に狙へども、敵は馬にて馳廻り、彼等は徒立なるに、其上弓矢も持たざれば、空しく餘所目ばかりにて、其日も暮れて果てにけり。入間川の宿にその夜は著かせ給ふ。國々の人々参りて辻々を固め厳しかりければ、この人々は夜廻の者に打紛れ、御用心候へ、他國より盜賊數多こして候ふなり、宿々の番の人々打解け給ふべからずと、太刀ひきそばめ館々をいひ廻る。見知りたる人なければ、あはれよきぞと打領き、祐經が館へぞ忍入る。不運の極めにや折ふし新田三郎客人にて、若黨數多立隔て、馬見て庭に立ちたりしが、笠の内怪し、と見入れ、立退けばまた便宜悪しくして、これは御前へ参り候ふ難色なり、歸りて参らんといふ様にて、足早にこそ出でにけれ。島山重忠御前よ

り歸られけるに行逢ふたり。逢ふまじと思ひ松明の陰へぞ忍びける。雑色燈を振立て、何者ぞと咎めけり。重忠聞きて、咎めず、伴の者ぞと宣へば、物をも云はで過ぎにけり。姿ばかりにて見知り給ひつると、後には思知られけり。重忠この人々の館へ消息あり、御志ども哀に覺え候。わざと委しくは申さず候。後楯にはなり申すべし。御用意こそ候ふらめどもとて、糧物少し贈られけり。此人々は返事云難くして、唯畏り存じ候ふとばかり言ひて返しけり。隠るゝとはすれども、然るべき人は知りけり。萬餘所目を忍ぶ事なれば、その夜も空しく明けにけり。次の日は大倉小玉の宿々にて便宜を窺ひければ、番の人々用心厳しくしければ、其日も討たて暮れにけり。その夜は上野國松井田の宿に著き給ふ。その夜それにて狙へども、山名里見の人々宿直に参り用心隙なくて、討つべきやうはなかりけり。明くれば信濃と上野との境なる、碓氷の南の坂の下に著

き給ふ。その夜も兩國の御家人集りて辻々を固め、知らざる者を咎むれば、寄りて討つべきやうもなし。次の日は碓氷の峠に打上りて、矢立明神に上矢をまゐらせ、御狩始わたらせ給ひけり。朝倉山に影ふかく、露吹結ぶ風の音、待つばかりとや戯らん。未だ立残る薄雲の、峯より晴る、朝ぼらけ、梢まばらの遠里は、小野の里にやつくらん。所々の高草の、下に聲ある谷の水、岩間々々に傳ひきて、勢子聲狩杖音しげく、折から心凄くぞ狩らせ給ひける。野守も驚くばかりなり。さる程に晴れたる空俄に搔曇り、鳴神驟しくして、雨かきくれて降りければ、鎌倉殿を始として、皆々とこほり興を失ひ、花やかなりし姿ども、思の外に引替へて、千草の蓑、菅の小笠、變り果てたる村雨に、袂はしをれ裾は濡れ、上下ともに露けき色、不興といふも餘あり。其日は碓氷に歸り給ひて、旅宿の用心あるべしとて、國々の侍参集り、辻々をぞ固めける。

二 五郎と源太と喧嘩の事

さる程に曾我の人々は雑人にや粉るゝと、深き蓑の編笠ふかく引込で、太刀脇狭み通る處に、折節源太左衛門景孝三浦の館より歸りけるに、十文字に行逢ひぬ。この人々は源太と見なし、笠を深く傾け眺にかけてぞ通りける。源太駒を控へつゝ、これなる者どもの怪しさよ、止れとぞ咎めける。十郎立歸り笠の下より、和田殿の難色なりといふ。それは何とて忍ぶぞや、名をば何といふぞ。藤源次と申す者なり、和田殿の御所へ参られ候ひつる隙をはかり、御館の次第を見物仕り候。義盛歸られ時になり候ふ間、急ぎ歸り候ふといふ所に、梶原が難色進出で、藤源次は某見知りて候。是はあらぬ者にて候ふといひければ、さればこそ怪しかりつるに、先づ打止めよとて争きけり。五郎堪へぬ男にて太刀を取直し、あら事々し雑人に目はかくまじ、源太が駒の向驢落



さんによも堪へし、落ちん所を刺殺し、腹切るまでと呟きて、兄を排除けかりけり。十郎暫しと止むる時、折節義盛は御前より歸り給ひしが、源太が聲の高ければ、何事にやとて立寄りけり。是は和田殿の御内の者といふ聲、十郎祐成と聞きなし、よく見れば案にも違はず。兄弟の人々思はぬ姿に身を窺し思入りたる志、見るに涙ぞこぼれける。あの冠者ばらは義盛が内の者にて候。奇怪なり罷退れと怒られければ、この人々死にたき所にてあらざれば、傍にこそ忍ばれけれ。源太はその後駒打寄せ、大方に色代して互に館へ歸りけり。さても源太が勢はいかに。五郎聞きて、なき鬼神なりとも、彼が首は危くこそ覺えしかといふ。十郎聞きて、身に思だにあらばいふに及ばず、心のものにかゝりては、如何でかさやうの事あるべき。源太討たん事はいと易し、我等が命も生きがたし、さては梶原を討たんとて心を盡しけるか。向後は心得給ひて身を護ひ、命を全く

して心を遂げ給ふべし、返すくといひながら、夜の更くるまでぞ居たりける。

### 三 和田より雜掌の事

かくて兄弟の人々は、荻谷の宿にありければ、夜半ばかりに數十人が聲して、正しくこの邊なりつるぞ、此方にめぐれ、彼處を尋ねよ、聲な高くせそとて、物具の音頻なり。五郎聞きて、晝の梶原が遺恨にて、徒なる者ども討手におこせりと覺えたり。十郎聞きて、静り候へ、疎忽の沙汰あるべからず、内の體も見苦し、先づ燈を消せとて打消させ、今やくと待ちかけたり。五郎は太刀押取つて、既に館を出でんとす。十郎袖を控へて、静り給へ、晝こそあらめ夜なれば、一方打破りて忍ばんこといと易し。たとひ何十人來るといふとも、先づ一番を斬伏せよ、二番につゞきてよも入らじ、況して三番しらむべし。たとひ乗越え斬入るとも、裾を薙ぎて薙伏せよ。

構へて御分離るゝな、隔てられては叶ふまじ、急ぎて外へは出づべからず、隙間を守りて諸共に出でて通れば遁るべし、若しまた遁れ難くば、刺違へては死ぬるとも、雑兵の手にばしかゝるなと云ひつ

の蔭なる父生靈も哀と、思ひ給ふらん、心懸こそやさしけれ。

### 四 三原野の御狩の事

つ、側に立てたる太刀とりて、今や入るかと待ちかたり。來る者共思はずに、静り返つて音もせず。不思議なりとて聞く所に、竊に門を敲きけり。人を出だして誰そと問ふ。和田殿よりの御使なり、晝の喧嘩は危くこそ見えしが、御志を見るに思はず袖をこそ絞り候ひつれ。わざと此方へとは申さず候。御用意こそは存すれども、國より持たせ候ふとて、樽二つ三つ、糧米添へてといふ聲を聞けば、義盛の郎等に、しどろの源七が聲と聞き、急ぎ十郎立出でて返事にも及ばず、畏入り候。罷歸り候は、參り申すべしとて歸しけり。さて酒ども取散し、連れたる者どもにも飲ませ、夜も明方になりぬれば、雑人に交らんとて、篋笠簀香縛履き、夜と共に出でし志、草

其日は同じ國の三原野を狩らせらるべきにてぞありし。各々花を折り出立ちけるも、理なり。日本國にての晴、何かはこれに勝るべき。既に君御出ありければ、御供の人々は申すに及ばず、見物の貴賤野山も動ぐばかりなり。梶原源太馬驅廻し、誰もおろかはあるまじけれども、今日の御狩に御前に於て、功名の人は勸賞あるべし、忠節を勵ませとの御詔とて馳廻る體の美々しさ、四邊を拂ひてぞ見えし。近年狩らざる野なりければ鹿数を盡す。老若家を忘れて、我も我もと君の御見參に參る。其日の午の刻にまた空俄に曇り、雷鳴つて雨やう／＼こぼれ笠を濡す。大將殿景季を召して、昨日淺間野の雨はさて措



きぬ、また三原の雨こそ無念なれば、歌一首と仰下されければ、源太取敢ず、

昨日こそあさまは降らめ今日はまた

みはらしたまへゆふだちの神

と申しければ、鎌倉殿御感の餘に、碓氷の麓五百餘町の所をぞ賜りける。鳴神も此歌にや愛でたりけん、即ち雨晴れ風止みければ、いよく源太が面目これに如かじとぞ人々申合はれける。君も實に御心よげに渡らせ給ひければ、御前伺候の侍ども、御毗にかゝらんと思はぬ者はなかりけり。されども曾我の人々は、君の御前をも知らず、野干に心をも入れず、其人ばかりをぞ尋ねける。雜人に交り馬にも乗らざれば、一日に一度餘所ながら見る日もあり、たゞ空しくのみぞ日を送りける。さても御狩の人々は、日の暮るゝをも時の移るをも知らずして狩りけるに、狐啼きて北を指して飛去りけり。人々これを止めんとて矢筈を取つて追懸けたり。君御覽せられ彼等を

召返して、秋の野の狐とこそ云へ、夏の野に狐鳴くこと不思議なり、誰か候、歌よみ候へと仰下されければ、祐經承つて、實に源太が歌には鳴神も愛でて雨晴れ候ひぬ、これにも歌あらば苦しかるまじ、誰々もと申されければ、大名小名我もくと案じ詠じて見んとすれども、詠む人なかりけり。こゝに武藏國の住人愛甲三郎、居丈高になり浮べる色見えければ、源太左衛門、いかさま愛甲が仕りぬと見えて候、はやくと申しければ、やがて、

夜ならばこうくとこそ鳴くべきに

あさまに走るひる狐かな  
と申しければ、君聞召されて、神妙に申したり、實に狐に仰せて吉凶あるべからずとて、上野國松井田といふ所にて、三百町をぞ賜りける。さて木賊原より伏屋に到るまで靜に狩くらし給ひ、誠に聞ゆる名所なり。實にや所の名にし負ふ、木賊原の夕月は、嵐や磨出だすらん。伏屋に近きのきの山、ありとは

見えて見えざるは、若しまた雲やかゝるらん。空澄み渡る折柄や、暮るゝも惜しくぞ思召しける。抑々夏の野に狐の鳴きたる例にて昔を思ふに、在五中將業平、姿よからん女を求めんと思ひしに、伏見の山莊より都へ行きけるが、木幡山の邊にて、由ある女に行逢ひぬ。兎角云ひ寄りて語り具して往にけり。かくて暫し日頃經て打失せぬ。如何なることにかと慕へども叶はずして、思の餘に、かの女の常に住みける處を見ければ、

出でていなば心輕しと云ひやせん

身のありさまを人の知らねば

と詠みおきて行きけり。如何なる事やらんと思ひて過行きける程に、ある夕暮に古脚色著たる女一人來りて、文を前におきぬ。取りて見ればありし女の文なり。

いまはとて忘れやすらん玉かづら

面影にのみいと見えつゝ

と書けり。男やがて返に、  
思ふかひなき世なりけり年月を  
あだに契りてわれや住ひし  
かやうに書いてやりけるが、なほ怪しくて、使の歸るにつきて自ら行きて見れば、女の著たりける古晒色次第に薄くなりて、木幡山の奥に入りぬ。いよいよ怪しくてつゞきて、分入りみれば、古き墓の中に塚のありけるに、老いたる狐集り居たるが、この文の返事を見て泣居たり。やゝありて人影のしければ、多かりつる狐ども即ち女になりにけり。塚と見えつる處はいみじき家になり、内より若き女出でてこれへといひけり。不思議に思ひながら入りぬ。女出合ひ様々に款待し、今宵はこれにといへば留りぬ。女の振舞有様露ほども昔に違はず。夜明けぬれば、女我も故郷に歸りなんといふ。故郷とは何處ぞと問へば、和歌浦より玉津島明神の御使なり、御有様知らんとて來り、今より後も忍びて來るべしとて、



搔消すやうに失せにけり。男歸るさに詠めり。

別をば誰かあはれといはざらん

かみもみやるは思知れかし

その後も通りけれども、人には知られざりしとなん、伊勢物語の秘事をいふなるをや。

### 五 那須野の御狩の事

さて君宇都宮彌三郎を召して、信濃の御狩とはいへども、下野の那須野に優る狩座はなし、序にかの野を狩らせて御覽せんと仰せられければ、朝綱承つて、御設の爲に暇申して宇都宮へぞ歸りける。烏帽子子の權守が許を拵へて君を入れ奉る。板鼻の宿より宇都宮へ入らせ坐します。かの那須野廣ければ、無勢にては叶ふべからずとて、面々人まゐらせよと觸れられければ、仰に従ひて和田左衛門千人まゐらす。畠山も千人、河越小山も千人宛、武田小笠原五百人、澁谷精谷も五百人、土肥岡崎も五百人、松

田河村三百人、分々に従ひて、東八ヶ國の侍ども、思ひ／＼に參らせければ、既に數萬人に及びけり。那須野廣しと申せども、何處に處ありとは見えざりけり。曾我の人々は列卒の者どもに搔紛れ、人目隠に廻りけり。されども餘所目しげみの草の原、別きて知らるゝ夕風の、誰とも定かに辨へず、青竹おろしの狩場にて、左衛門尉祐經は、二疋つれたる牝鹿に目を懸けて、下りさまに落せしを、一目見たりしばかりにて、其日も空しく暮れにけり。無念といふも餘あり。

### 六 朝妻の狩座の事

御寮は青竹おろしの館に入り給ひぬ。更闌け夜靜にして、人靜りけれども、御酒宴ありけるに、朝綱御氣色に參らんとて、とり／＼の曲ども申し、御徒然を慰め奉りけり。君御盃を控へさせ給ひける時、鹿の音微に聞ゆるは何處ぞと御尋ありければ、板鼻

の邊と申す。君聞召し、古の人も、鹿の音近き秋の山越とこそ詠みしに、夏の野に鹿の鳴くこそ不思議なれと仰下されければ、朝綱畏つて申しけるは、さる事の候、昔保昌といひし人丹後國に下り給ふ。かの國に朝妻とて日本一の狩座あり。其山の鹿は夕よりも夜にあれば、山には住まで、渚にくだりて數を盡して並臥す。その隙に山に列卒を入れて、夜の中引廻し、海には舟を浮べ、曉に及びて廣き濱に追出し、思ひ／＼に射取る。海に入るをば櫓權にて打取らんとす。保昌これを聞き、朝妻に陣を取り、射手を、三百人添へ列卒を山に入れ、明くるを遅しと待ちける所に、夜半ばかりに及び鹿の聲聞えけり、折節和泉式部を召具したりければ、鹿の音を聞きて、ことわりやいかでか鹿の鳴かざらん

こよひばかりの命と思へば

と詠みたりければ、保昌歌の理にめでて、其日の狩を止め給ふ。心なき鹿の思を憐みて、道心を起し

給ふ。三百人の郎黨まで、道心起し候ふとなり。これにもなほ憚らずして、鹿の爲に六萬本の卒都婆を書き供養し、六百人の僧を請じて彼の菩提を弔ひ給ひけるとかや。それよりして、朝妻の狩座を末代まで止むべしとの、御判を申し下され、諸共に判形を添へて置かれければ、今に至るまで狩場にはならずと申傳へたり。さればこの野の鹿も、明日の命をや悲みて啼き候ふらんと申しければ、頼朝聞召し、それは平家の一類にてかやうの善事をなしけるにや、我れ源氏の正統なり、如何でかこれを知らざらんとて、其日の御狩を止め給ふ。そののみならず、末代までもこの野に狩を止むべしと、朝綱方へ御判を下されけり。これ偏に保昌の例を引かるゝにこそと、感じ申さぬはなかりけり。これも殺生を禁じ給ふにやと、人々申合はれたり。

### 七 帝釋と阿修羅王戰の事



されば君の御慈悲の深きを以て昔を思ふに、天台の  
 釋に曰く、阿修羅王が戰に帝釋敗け給ひて、須彌山  
 を指して逃上り給ふ。この山峻しとは申せども、帝  
 釋の眷族、恒河沙の如く登らんとす。こゝに金翅鳥  
 のかひご多くして、この戰の爲に踏殺されぬべし、  
 されば我等が命は阿修羅王に奪るとも、如何でか殺  
 生を犯さんとして、帝釋須彌を出でて、鐵圍山といふ  
 山にかゝり給ふ。阿修羅これを見て、却て我を追ふ  
 ぞと心得て逃げければ、その戰に帝釋勝ち給ふ。こ  
 れも殺生を禁じ給ふ故とかや。この君も鹿の命を慫  
 み、狩座を止め給ふ、争かその徳なかるべきとぞ申  
 しける。

八 三浦與一を頼みし事

明けぬれば君鎌倉へ入り給ふ。兄弟の人々も泣く泣  
 く曾我にぞ歸りける。實にや日本國の名將軍の近邊  
 にして、此處に忍び彼處にまはり、命を捨て身を惜

まで敵を思ふ心のうち、優といふも餘あり、無慙な  
 りし用意なり。また鎌倉殿梶原を召されて仰下され  
 けるは、侍どもに暇取らすべからず、狩場多しと雖、  
 富士野に優る所なし、次手に狩らんと仰せられけれ  
 ば、景季の旨披露す。曾我五郎此事を聞き兄に申  
 しけるは、我等が最後こそ近づき候へ。知召され候  
 はすや、國々の侍ども歸さずして、富士野を御狩  
 あるべきにて候ふなり。長らへて思ふも苦し、思  
 召し定め候へといひければ、祐成聞きて、嬉しき物  
 かな、今度は程近ければ、馬一疋づつだにあらば、  
 差表れて御供申すべし。事故云ふやう、つくゞ事  
 を案するに、隙を求め便宜を窺へばこそ、今まで本  
 意は遂げざれ、今度に於いては一筋に思切り、便宜  
 よくば御前をも恐るべからず、御館をも憚るべから  
 ず、夜とも云はず晝とも嫌はず、遠くは射落し近く  
 は組んで勝負をせん。身のあるものにせばこそ、隙  
 をも窺ひ處をも嫌はめ。若し仕損ずるものならば、

悪靈死靈ともなりて命を奪ふべし。愁なる命生きて  
 明暮思ふも悲し、今度出でなん後、再び歸るべから  
 ずと思切りて候ふは、如何思召し候。祐成聞き、仔  
 細にや及ぶ、某もかくこそ思定めて候へとて、各々  
 出立ちけるぞ哀なる。既に鎌倉殿御出まし〜けれ  
 ば、この人々は三浦の叔母の許へぞ行きにける。こ  
 こに三浦與一といふ者あり。平六兵衛が一腹の兄な  
 り。父は伊東工藤四郎なり。與一が母は叔母なり。  
 何方も親しかりければ、睦びけるも理なり。十郎弟  
 にいひけるは、かの與一を頼みて見ん、さりととも否  
 とはいはじ。五郎聞きて、小次郎にも御懲り候はで  
 とは云ひながら、若しやと思ひければ、與一が許に  
 ゆき、此程久しく對面せざるよし云ひしかば、珍し  
 として酒取出だし勸めけり。盃二三返過ぎければ、十  
 郎近くゐて、これへ參ること別の仔細にあらず、大  
 事を申合せん爲なりといふ。與一聞きて、何事なる  
 らん、たとひ如何なる大事なりとも、打頼み仰せら

れんに、いかでか乖き奉るべき、ありのまゝと云ひ  
 ければ、十郎小聲になつて、かねて聞召さるらん、  
 我等が身に思ありとは皆人知りて候。然るに敵は大  
 勢にて候ふに、貧なる我等は二人にして狙へども叶  
 はず、御分頼れ給へ。我等三人寄合ふものならば、  
 争でか本意を遂げざるべき。親の敵を近くおきて、  
 思ふが詮方なきに、申合せんとて参りたり、頼まれ  
 給へといひければ、與一暫く案じて、此事こそふつ  
 つと叶ふまじけれ、思止り給へ。當世は昔にも似  
 ず、さやうの悪事する者は片時も立忍ぶかたなし。  
 されば親の敵子の敵、宿世の敵と申せども、討取る  
 こと難し、ましてやいはん、御供仕りたる者を。  
 狩場にも旅宿にても誤りては、ひとまども落つべ  
 きものか。今度は思止りて、私歩を狙ひ給へ。そ  
 の上祐經は君の御切者にて、先祖の伊東を安堵する  
 のみならず、莊園を知行すること數を知らず、敵あ  
 りと思ひ用心嚴しかるべし。愁なること仕出し、面



面のみならず、母や曾我太郎を惑者になし給ふな。理を枉げて思止り、如何にもして御不審有され奉り、奉公をいたし、先祖の伊東に安堵し給へ。面々の有様にて、當御代に敵討たん沙汰をば止り給へと大に驚き申しければ、十郎聞き、憐しの人や、試んとていひつるを、誠し顔に制するぞや。今時我等が身にては思ひも寄らず、馬持たざれば狩場も見たからず、ゆめく披露あるべからずと、口を固め立たんとす。五郎は耐らぬ男にて、殊に始の言葉には似ず、思へば恐しさに辭退し給ふか、史記の辭をば聞き給はずや、蛇は蟠れどもしやうげの方に向き、驚は太歳の方を背きて巢を開き、燕は戊己に巢をくひはじめ、比目魚は港に向ひ方違す、鹿は玉所に向ひて臥し候ふなる。かやうの獸だにも分に従ふ心はあるぞとよ。面ばかりは人に似て、魂は畜生にてあるものかなと言捨て、立ちにけり。與一は五郎に悪口せられて、如何にもならばやと思ひしが、

我は一人彼等は二人なり、その上五郎は聞ゆる大力なり、小腕とられて叶ふべからず、所詮このこと鎌倉殿に申上げて、彼等を滅さんこと、力もいらでと思鎮りぬ。さて彼等遙に行きつらんと思ふ時、急ぎ馬に鞍置かせ打乗り、鎌倉へこそ参りけれ。このこと兄弟は夢にも知らでぞ居たりける。こゝに和田義盛は鎌倉より歸りけるに、手越川にて行逢うたり。與一を見れば、顔の氣色かはり駒の足並早かりければ、義盛暫く駒を控へ、何處へぞといふ。與一物を云はで駒を早めけるが、良あつて鎌倉へとはかり答ふ。扱も鎌倉には何の事の起り、三浦には如何なる大事の出来候へば、それ程に周章て給ふぞや。何方の事なりとも義盛はなるべからず、御分また隠すべからずとて、與一が馬の手綱を取り際なく問ひければ、與一申す條、別の仔細にては候はず、曾我の者どもが來り候ひて、親の敵討たんとて、義直を頼み候ふ間、叶ふまじきと申して候へば、五郎と申す

鳴許の者がさんぐに悪口仕り候。當座に如何にもなるべかりしを、彼等は二人某はた一人候ひし間叶はで、斯様の仔細上へ申上げて彼等を失はんため、鎌倉へ急ぎ候ふといひければ、和田これを聞き暫く物をもいはず、やゝあつて、や殿、與一殿、弓矢執るも執らざるも、男と首を刻まるゝ者が、いざや死に、行かんと打頼まんに、辭退するやからをば、人とは云はで犬野干とこそ申せ。就中弓矢の法には、命は塵芥よりも軽くして、名をば千鈞よりも重くせよと云ふに、侍の命は今日あれば、明日まで頼むべきか。聞くべしとてこそ、斯程の大事を云聞せつらめ、而も親しき中ぞかした、當る道理を云聞せて曰く、願承して叶はじと思はば、後に辭退する迄ぞ。左右なく鼻をつき、剩へ上へ申さんと。それ程の大事心にかゝる上、穩便のものにてあればこそ、當座も和殿が命をば助置け、上様へ申上ぐると聞きては、今一遣も遣らじ。命惜しくば留り給へ、命あり

てこそ京へも鎌倉へも申し給はめ。義盛が若盛ならば、その座にても討つべきぞ、よく申上げて失ひ給へ。君も一旦は然りと思召す共、親しき者のこと悪様に申さんを、神妙なりとて頼しくば思召さじ。その上彼等を失ひ給ふとも親類多ければ、御身いかでか安穩なるべき。孔子の辭に、善人に交れば蘭麝の窓に入るが如し、その香残り、悪人に交れば鮑魚の市藏に入るが如し、臭きこと残れると見えたり。御身に於ては同じ道をも行くべからず、心を返して見給ふべし。朝恩に誘ふ敵を目の前に置きて、見るも目覺しくてこそ云ひつらめ。このこと訴認申して如何程の勳功にか預るべき、武藏相模には此殿原の一門ならぬ者や候。かく申す義盛も結ばるゝは知り給はずや。昔の御代とだに思は、などや彼等に矢一つ用はざるべき。當代なればこそ恐をなし敵をば直に置きたれ。彼等が心のうち推測られて哀なりとて、雙眼に涙を浮べければ、義直つくくと聞きて、



悪しかりなるとや思ひけん、是も一旦の事にて候へ、此上は兎かくの仔細に及ばずとて、駒の手綱を引返す。その後は四方山の物語して、三浦へ打連れ歸りけり。このこと年頃神佛に申せし感應にや、義盛に助けられぬ、然らずば如何でか此事通るべき、不思議なりし振舞なり。されば人間は高きも下れるも、五常を旨とし神明を専に敬ふべきものをや。

九 五郎女に情を懸けし事

さてもこの人々は、三浦より歸るさに大磯に打寄りて、虎に見參せんといひければ、然るべく候。今度出でて長き別にてもや候ふべからん、思出だして一偏の念佛も測難きことにて候ふぞかし、誠に思切られぬ道にて候。時致も化粧坂の麓に知りたる者の候。五日十日を経て行く道にても候はず、今度出でなん後は、復相見ん事もかたし、治日参り合ひ申さんとて打別れにけり。五郎は一夜を明し、明けられ

ば鎌倉を出でて、腰越より片瀬の宿へぞ通りける。折節梶原源太左衛門十五四騎にて、かの宿に下居たりしが、五郎が通るを見て、申すべき仔細候。暫し止り給へとて、足輕をはしらしむ。五郎かねて聞くことありければ、さしたる急事の候。後日に見參に入るべしとて通りにけり。定めて五郎は止るらんと、片瀬川をかけ渡し、向の岡に駒打上げて見ければ、遙にうちのびぬ。此者は何と心得て斯様には振舞ふらんとして、駒を静めて打つて行く。時致は馬の息休めんとして、平塚の宿に下居て暫くありける處へ、景季うつて來り、これに控へたるは、曾我五郎が乗りたる馬ござんめれとて、縁の際に駒打寄せける氣色、怒あまりければ、乗換五六騎馬より下り廣縁に上る。五郎これを聞きて、悪しかりなるとや思ひけん、急ぎ内にぞ入りける。源太この上は尋ぬるに及ばずとて、手綱搔繰り通りけり。五郎物越に聞き、世に騎りまた人も無げなる奴かな、走出でて一太刀斬り、

如何にもならばやと思ひけれ共、此二十餘年惜しかりつる命は、景季が爲にはあらず、祐經にこそと思止りけり。これや論語に曰く、事を遂げんには勇まらずして萬事を咎めざれとは、今の五郎が心なるをや。見聞く輩は、五郎が不覺なりとはいひけれども、敵祐經を討ちて後引据ゑられし時、君の御返事をば申さで先づ源太に向ひ、和殿は年比時致に意趣あり、今は時致が身に思ふ事なし、本意を遂げよ、といひければ、景季御前を罷立ち、五郎がありける程は參らざりけり。時致は和田山左右にありけるその方を見遣りて、笑を含みけるこそ、理すぎてぞ覺えける。これや松柏は霜の後にあらはれ、忠臣は世の危きに知らるゝとは、今こそ思知られたれ。暫くもなかりける時致、平塚の宿にてはさこそ思ひつらめ、大事ありて小事なし、身に思あれば萬事をすて、平塚の宿まで遁げたりし會稽の耻を、唯今雪ぐと申合へり。思ふ事だになかりせば、源太が命は危かりし

とぞ申しける。抑この意趣を尋ぬるに、化粧坂の麓に遊君あり。時致情をかけ淺からず思ひしに、引手数多の事なれば、梶原が濱出でて歸りさまに、この女の許に打寄りて夜と共に遊びけり。曉歸るとて、如何したりけん腰の刀を忘れて出でけるを、女の許より刀を遣しけるとて、

いそぐとてさすが刀を忘るゝは

おこしものや人の見るらん  
景季馬に乗りながら、左手の鏡をいまだ踏みもなほさず、近歌をぞしたりける。

形見とておきてこしものそのまゝに

かへすのみこそさすがなりけれ  
其頃源太左衛門は、歌道には定家家隆なりともと思ひしなり。さてもこの歌の面白さよと思初めて、景季通ひなれけり。餘所の事わざなど戯れければ女引籠り、五郎一人にも限らず、出仕を止めけり。是をば知らで、五郎かの許に行き尋ねけれども逢はざり



けり。何によりてかと危く、友の遊君に問ひければ、梶原源太殿の取りておかれ、餘の方へは思ひも寄らずと云ひければ、五郎聞きて、流をたつる遊君、頼むべきにはあらねども、世にある身ならば源太には思換へられじと、身一つのやうに思ひけり。貧は諸道の妨とは面白かりける詞かな。人をも世をも怨むべからずとて、この歌を詠置きて出でぬ。

あふと見る夢路にとまる宿もがな

つらき言葉にまたもかへらん

と書きて、引結びておきたりけり。五郎歸りて後この女立出でて見れば、結びたる文あり。取上げて見れば、日頃なれにし五郎が手蹟なり。此歌をつくづく見て、文を顔にあてさめんと泣きつゝ、友の遊君に、これ御覽せよや人々、耻とも知らず耻しや。日本我朝は瑞穂の里として、神明光を和げ天の窟戸に閉籠らせ給ひし時、あら面白といひ初め給ふも、この三十一字の歌故ぞかし、かくあるべしと知りた

らば、如何で情なうあるべきとぞ思はれける。

### 十 巢父許由が事

さてもこの女房は、時致が歌を彼方此方に見せ申しけるは、昔もさる例あり。大國に潁川といふ川あり。巢父といふ者黄なる牛を牽來たる所に、許由といふ賢人この川の端にて、左の耳を洗ひ居たり。巢父これを見て、汝何によりて左の耳ばかりを洗ふにやと問ひければ、許由答へて曰く、我は此國の賢人といはれしものなり、我が父九十餘にして老耄極なし、我れは未だ幼少なり、されば神拜政事妄にして、在甲斐なき身なれば都を出でぬ。此程聞きつる事皆左の耳なれば、汚れたること極なし、それを洗ふにやといひけり。巢父聞きて、さてはこの川七日濁るべし、汚れたる水飲ひて益なしとて、牛を牽きて歸りしが、また立歸り、さて汝は何處の國にゆき、如何なる賢王をか頼むべきと問ふ。賢人二君に仕へ

す、貞女兩夫に見えずとなり、されば首陽山に入り、巖折りて過ぎけると、申傳へ候ひけり。二心なきには如かじとぞ。

### 十一 貞女が事

こゝにまた貞女兩夫に見えずといふ事あり。さる國にしそうといふ王あり。かんばくといふ臣下を召使ひ給ふ。或時かんばく結ひたる文を落したり。帝御覽じて、如何なる文ぞと御尋ありければ、臣宮仕暇なくて日數を送り家に歸らず候、心許なしとて妻の許よりくれたる文と申す。なほ怪み御覽あらんと勅諠あり。隠すべき事ならねば御慮に捧ぐ。この文の主呼びて見せよと仰下されければ、臣は背き難くて、此女を呼びて見せ奉る。帝御覽じて押留置き給ふ。かんばく安からずと思ひけれども叶はず。女も王宮の住居もの憂くて、唯男の事のみ思ひ歎きければ、此時帝思召すは、時の關白りやうはくといふ者を召

し、此事如何せん問ひ給ふ。さらば彼が男のかんばくを不具になして見せ給へ、思は去りぬべしと申したりければ、然るべしとて、耳鼻をそぎ口を裂きて見せ給ふ。女我れ故にかゝる憂目に逢ふよと、いよく歎き伏沈み悲みければ、また臣下に問ひ給ふ。さらばかんばくを殺して見せ給へと申しければ、やがて深き淵にぞ沈められける。女聞きて、思少し等閑にして申しけるは、願くはかの淵を見んといひけり。大王はや思捨てけりと喜び給ひ、大臣公卿諸共にかの淵に臨み、管絃遊宴して遊び給ふ時に、この女汀に出でて休ふとぞ見えしが、淵に飛入つて死にけり。大王を始として敢なき限なくて、空しく歸り給ひけり。

### 十二 鴛鴦の劍羽の事

かくて帝還幸ましめて、歎きながらも日を送り給ふに、幾程なくしてこの淵の中に赤き石二つ出來



て、抱合ひてぞありける。實に不思議なり。かんばく夫婦の靈魂なるをやと人申しければ、大王聞召し、なほもありし面影の忘れがたくて、また官人召具し、かの淵の邊に行幸なり、窺覽ありければ、申すに違はず實に石二つあり。不思議に思召す所に、かの石の上に鴛鴦一番あがりて、鴛鴦の衾の下懐しげに戯れけり。これも彼等が精にてもやと御覽じけるに、この鴛鴦飛上り、思羽にて王の首を搔落し、淵に飛入り失せにけり。それよりして思羽を劔羽と申すなり。

十三 五郎が情かけし女出家の事

さる程に皆人よく聞き給へ、貞女兩夫に見えずとは前にいひつる女の事なり。如何なる貞女か二人の夫に見え、如何なる身にてか引手数多に生れつらん、さらぬだに我等風情の者は、慾心に住すると云ひな

らはせり。己を知るもの、爲に容をつくるふと、文選の言葉なるをや、我れまた甲斐々々しくなければ、景季がまことの妻女になるべき身にてもなし、來世こそ終の住處なれ、その上歌は神も佛も納受し慈悲を垂れ給ふ。されば花に鳴く鶯、水に住む蛙だにも歌をば詠むぞかし、況や人として争かこれを耻ぢざるべきとて、この歌を詠みける。

數ならぬ心の山のたかければ  
 おくの深きをたづねこそ入れ  
 捨つる身になほ思出となるものは  
 とふにとはれぬ情なりけり

まことや天人のゐんせざる所は、禍ありて而も幸なしと、東方朔が詞思知られて候。然るべき善智識を尋ね、生年十六歳と申すに出家して、諸國を修業して、後には大磯の虎が住處を訪ね、俱に行ひすまして、八十餘にして大往生を遂げにけり。有難かりし志とぞ聞えし。然る程に源太左衛門景季は此事を

聞きて、素よりこの女の心さま尋常にして、歌の道にも優し、今は曾我五郎こそ敵なれ、行遣はん所にて本意を達せんと思ひければ、さてこそ平塚の宿までは追ひたりけり。その時景季が勢また並ぶ人であるべきと振舞ひしかども、富士の裾野にては、誠に男がましくも見えざりしぞかし。されば人は世にありとも、よく思慮あるべきものをとて、皆人申しあはれけり。五郎も此事を傳聞きて、優しくもまた心許なくも思ひける。これに依つていよく身を身とも世を世とも知らで、思ふ事のみ急ぎけるは、理すぎてぞ聞えける。

十四 吳越の戦の事

抑々五郎が富士野にて、會稽の耻を清むといひける由來を委しく尋ぬるに、昔異國に吳國越國とて並の國あり。吳國の王をば闔廬の子にて吳王夫差といひ、越國の王をば大帝の子にて越王勾踐とぞいひける。

然るにかの兩の王、國を争ひ戦をなすこと絶えず。或時は吳王を亡し、或時は越王を退治し、或時は親の敵となり、或時は子の仇となる、犠牲甚しく累年に及ぶ。こゝに越王の臣下に范蠡といふ武勇の達者あり。彼を招寄せて曰く、今の吳王は正しき親の敵なり、これを討たずして徒に年を送りて、嘲を天下に遺すこと、父祖の耻を九泉の苦の下に辱しむること、恨つくし難し。されば越國の兵を催し吳國へ打越え、吳王を打滅して、父祖の恨を報せんと思ふなり。汝は暫し國に留りて、社稷を守るべしと宣ひければ、范蠡申しけるは、暫く愚意を以て事をはかるに、今越の力にて吳王を亡さんこと難かるべし。其故は、先づ兩國の兵を數ふるに、吳國には二十萬騎あり、越の國には僅十萬騎なり、小を以て大に敵せざれとなり。その上吳王の臣下に伍子胥とて、智深うして才高き事のみならず、人を懐くること兩の降るがごとし、かくの如きの勇士あり、彼が在ら



ん程は、吳王を滅さんこと叶ふべからず。麒麟は角に肉ありて猛き形を現さず、潜龍は三冬に蟄つて一陽來復の天を待つ。暫く兵を伏して武を隠し、時を待ち給へと諫めければ、越王是を用ゐず、大に怒つて、軍の勝負は勢の多少によらず、たゞ時の運により、または大將の謀によるなり。されば吳と越との戦度々に及び、雌雄を決する事汝悉く知り。次に伍子胥があらん程は叶はじといはれ、我れ遂に父祖の敵を討たずして、恨を謝せん事あるべからず、徒にして伍子胥が死ぬるを待たば、生死限あり老少定らず、伍子胥と我れ何をか先と知らん、これ然しながら汝が愚暗なる故なり。我れまた兵を催すこと、定めて吳國へ聞ゆらん、事延ひば却つて吳王に亡されなん、時に悔ゆとも益あるまじとして、越王十一年二月上旬の頃、十萬騎の兵を率して吳國へぞ寄せたりける。吳王これを聞き、小敵欺くべきに非ずとて、自ら二十萬騎の勢を率して、吳と越

との境、夫樹縣といふ所に馳向うて、後には會稽山をあて、前にはこせんといふ大河を隔て後陣を取り、敵を計らんがために三萬騎をば出して、殘十七萬騎をば後の山に隠置きけり。越王夫樹縣に臨みて敵を見るに、僅二三萬騎には過ぎざりけり。思はず小勢なりとて、十萬騎の兵を同じ心に驅出ださせ、篋を組み馬を打渡す。吳の兵かねてより、敵を難所におびき入れて、殘さず討たんと定めしことなれば、わざと一戦にも及ばずして、夫樹縣の陣を引、會稽山に引籠る。越王の兵勝に乗り、北ぐるを追ふこと三十餘里なり。次の陣を一陣に合せ、馬の息の切る、程を追うたりける。吳の兵思ふ程敵を難所に誘入れて、二十萬騎の兵四方の山より打つて出で、越王勾踐を中に取籠め、一人も漏さじと攻戦ふ。越の兵は今朝の戦に遠驅して、馬人ともに疲れたる上小勢なりければ、吳國の大勢に圍れて、一所に打寄り控えたり。進んでかゝらんとすれば、

敵嶮岨に支へて鏃を揃へて待ちかけたり。退いて拂はんとすれば、鏃先曲れり。されども越王勾踐は堅を破り強を打つこと、大勢に超えたる人なりければ、事とせず彼の大勢の中に驅入つて、十文字に驅破り追廻して、一所に合せては三所に分れ、四方を拂ひ八方に當り、百度千度の戦に勝劣なし。然りとはいへども多勢に無勢叶はねば、遂に越王は打敗けて、三萬騎に打ちなされけり。されば越王堪へずして會稽山に上りて、討殘されたる勢を見るに、僅に三萬騎になりけり。馬に離れ矢種悉く盡きて、鏃折れければ一戦にも及び難し。隣國の諸侯は勝つことを兩方に窺ひて、何方とも見えず控へたりしが、吳王戦に利ありと見て、悉く吳王の勢にぞ加りける。今は三十萬騎になりて、かの山を圍むこと稻麻竹葦の如し。越王叶はじと思ひけん、帷幕のうちに入り兵を集めて曰く、我が運命既に今この圍にて盡きぬ、此上は腹を切るべし、全く戦の科にあらず、天

我れを滅せり、怨むべきにあらず、唯范蠡が諫こそ耻しけれ、従つては臣が志、誠に報せざるこそ無念なれ。さりながら重恩は生々世々に忘れがたし、とても是程の志なれば、明けなば諸共に圍を出でて、吳王の陣に驅入つて屍を軍門に曝し、九門に報すべしとて、鎧の袖を濡し給へば、兵も一つに思定まる勢を見て、今までの舊交まことに淺からざるとぞ思はれける。さて越王の子王庭與とて、八歳になる太子ありけり。呼出して、汝未だ幼穉なり、敵に生捕られて憂目を見ん事口惜し、汝を先立て、心安く討死して、九泉の苔の下に埋みなん、冥途までも父子の契をなすべしと思ふなり、急ぎ殺すべしといひけれども、太子は何心もなくおはしぬ。また隨身重器を積重ね、悉く焼失はんとす。時に越王の左將軍に、大夫種といふ臣下進出でて申しけるは、生を全くして命を待つこと、遠くして難し、死を軽くして節を望むことは近くして易し、暫く重器を焼き太子



を殺さん事を止め給へ、我れ無骨なりと雖、吳王を欺きて君王の死を救ひ、本國に歸り二度大軍を起し、この耻を清めんと存するなり。然るに今この山を圍み、一陣を張る左將軍は大宰誼といふ臣下なり。彼は我が古の朋友なり。實に血氣の勇士といひながら心に慾あり。また吳王も智淺くして謀短し、色に姪じて道に暗し。されば君臣ともに欺くに易き所なり。今この戰に負くることも、范蠡が諫を用ゐ給はぬに由つてなり、願くは君王暫く臣下に謀を許して、敗軍數萬の死を救ひ給へと、涙を流して申しければ、越王さしあたる理に折れて、今より後大夫種が詞に従ふとて、重器をも焼かず太子をも殺さざりけり。大夫種悦び、兜を脱ぎ旗を巻きて會稽山より下り、越王の勢既に盡きて、この軍門に降ると呼りければ、吳の兵三十萬騎、勝鬨を作りて萬歳の歡をぞ唱へける。大夫種は乃ち吳の轅門に入つて、謹んでこの上は將軍の下執事に屬すといひて、膝行

頓首して大宰誼が前に跪く。大宰誼哀に思ひ顔色解けて、越王の命をば申宥むべしとて、大夫種を連れて吳王の陣に行き、此よし斯といふ。吳王彼等を見て大に怒つて曰く、吳と越との戦いまに限らずと雖、時に到りては勾踐捕はれ僻事となれり、これ天の我れに與へたるにあらずや、汝知りながら彼を助けよといふ、敢て忠烈の臣にはあらずとて、更に用給はず。大宰誼重ねて申しけるは、臣不肖なりと雖、忝くも將軍の號を許されて、この戦にも一陣たり。然れば謀を廻し大敵を破り、命を輕んじて勝つことを決せり。これ偏に臣が丹心の功とも云ひつべし。君王のために天下の太平を謀るに、豈一日も忠を盡す心を表さざらんや。時に吳王、つらく事を謀るに、越王戦負けて力盡きぬと雖、殘る兵未だ三萬騎あり、これ皆たゞの兵にあらず、御方は假令多しと雖、昨日の軍に疲れて前後をも失ひぬ、敵は小勢なりと雖、志を一つにして而も遁れぬ所を

知れり、これや窮鼠却りて猫を喰ひ、鬪雀人を恐れずといふべきにや。若し重ねて戦はば御方には怪多かるべしと宣へば、大宰誼が、唯越王を助け一天の地を與へ、吳の下臣となすべし、然らば吳と越と兩國のみならず。齊楚趙の三ヶ國悉く朝せずといふ事あるべからず。これぞ根を深うして葉を堅くする道なりと、理を盡しければ、吳王聞終りて、慾に耽る心を逞しくして曰く、さらば會稽山の圍を解き、越王を助けべしとぞ定めける。大宰誼急ぎ大夫種に語る。大に悦びて越王に告げければ、士卒は色をなほし萬死を出で一生にあふ事、偏に大夫種が智謀によれりとぞ喜びける。然る程に兵ども皆國に歸る。太子王廳與には大夫種をつけて本國へ歸し、我れは素車に乗りて越の國の璽綬を首にかけ、苟も吳王の下臣と稱し、軍門に降り給ひにけり。あさましかりし次第なり。然れどもなほしも吳王心許やなかりけん、君子刑人に近づかずとて、敢て勾踐に面を見

え給はず、剩へ典獄の官に下されしかば、きやうこうるき窮して姑蘇城へ入り給ふ。その姿見る人袖を濡さぬはなかりけり。實にや昨日までは、越國の大王として何か心をたづさへし、弓矢を帶する身とて、今日はおはるめに逢ふべしとは、誰か知るべきとて、涙を流さぬはなかりけり。越王かの所に入りぬれば、手械足枷を入れ頸に綱をさし、土の牢にぞ籠められける。夜明け日暮るれども、日月の光をも見ず、冥暗の中に歳月を送り迎へし涙の露、さこそは袖に積るらめ、思ひやられて哀なり。然る程に國に留めおきし范蠡この事を聞き、怨骨髄に徹りて忍びがたし。あはれ如何にもして我が君を本國に歸し奉りて、諸共に謀を廻し、會稽の耻を雪めばやと、肺肝を碎きてぞ悲みける。或時范蠡謀を以て身を糞し、籠に魚を入れて自らこれを荷ひ、商人の眞似をして吳國をぞめぐりける。吳の城の邊にて、我が君勾踐のおはしける所を、窺にこれを問ひければ、人これを



委しく教へける。范蠡嬉しくて、かの禁獄近く行き  
 けれども、警固隙もなかりければ、魚商ふよしにて  
 近づき寄りて、一通の書を魚の腹の中に入れて、獄  
 中に投入れたり。勾踐怪み思ひて、魚の腹を開きて  
 見れば書あり。詞に曰く、西伯羨里に囚はれ重耳翟  
 に走る、皆以て王霸たり、死を敵に許すことなけれ  
 とぞ書きたりける。筆勢文章の體まがはぬ范蠡が業  
 なり。さればにや未だ憂世に長へ、我が爲に徘徊し  
 けり、志の程哀にもまた頼しくも思ひける。一日片  
 時の長へも恨しかりつるに、范蠡が諫を受けて、今  
 更命も惜しく思はれけり。斯る所に敵の吳王、俄に  
 石淋といふ病をうけて、神身長に惱亂す。巫覡祈  
 れども驗なく、醫師治すれども癒えずして、露命既  
 に危ふかりけり。こゝに他國より名醫來りて、この  
 病まことに重しと雖、醫術及びがたきにあらず、若  
 しこの石淋を嘗めて、五味のやうを知る人あらば、  
 その心をうけて療治せんに、即ち癒ゆべしと申しけ

れば、誰かこの石淋を嘗めて、味のやうを知らすべ  
 しといふに、左右の近臣皆願て嘗むる者なし。勾  
 踐これを聞き給ひて、我れ會稽山に圍まれ、既に誅  
 せらるべかりしを、今まで助けおかれて天下の赦を  
 待つこと、偏に君王の厚恩なり。今我れこれを以て  
 報せずば、何時の日をか期せんとして、竊に石淋を  
 りて嘗め、その味を醫師に告げければ、醫師即ち味  
 を聞きて療治を加ふるに、吳王の病忽に平癒す。  
 吳王大に喜びて、人心あり、死を助けすばいかでか  
 今赦心あらんとて、越王を土の牢よりいだし、剩へ  
 越の國を興へ、本國に歸し給ふべしと宣下せられけ  
 り。こゝに吳王の臣下に伍子胥といふ者あり、吳王  
 の前にて申しけるは、天の與を取らざれば、却つて  
 その咎を得ると見えたり、此時越の國を取らずして、  
 勾踐を返し給はん事、千里の野邊に虎を放つが如し  
 と諫めけり。吳王用ゐずして勾踐を本國に歸されけ  
 る、實に運の極と覺えけり。越王悦びて車の轡を廻

し、急ぎ國にぞ歸りける。路の邊に蛙多く集りて路  
 頭を塞ぐ。勾踐これを見て、勇士を得て素懷を達す  
 べき瑞相めでたしとて、車より下りて、是を禮して  
 通られけるが、果していふ、隣國の諸侯、この君は  
 勸むるに諫ありし賢王なりとて、從附くこと數を知  
 らず。然るに瑞相に依つて本意を遂げ給ふなり。さ  
 れば越王は故郷に歸り見給ふに、何時しか三年に荒  
 果て、梟松桂の枝に巢くひ、狐蘭菊の叢に啼  
 き、萩が枝折るゝばかりに露かゝれども、拂ふ人な  
 き閑庭には、落葉滿ちて肅々たり。哀なりし形なり。  
 かくて越王歸り給ひぬと聞きければ、隠居たる范蠡、  
 太子の王廳奥を宮中に入れ奉りぬ。また后に西施と  
 いふ美人あり。これぞ吳國に聞ゆる美人、なんこく、  
 なんい、とうい、西施とて四人の美人なり。中にも  
 西施は顔色世にすぐれ、嬋娟たる顔類なかりしか  
 ば、越王ことに寵愛して、暫も側を離し給はざり  
 き。越王吳王に囚はれし程は、その難を遁れんが爲

に、身をそばめ隠居給ひしが、越王歸り給ふと聞き、  
 悦びて故宮に參り給ふ。この三年を待ちわびし思に、  
 雪の肌腰衰へたる御容、いとわりなく覺えたり。  
 餘所の袂まで萎るゝばかりなり。越王この顔にい  
 よく心を睦うし給ひけり。理とぞ見えける。こ  
 こに吳王より使あり、越王驚きて范蠡を出して聞く  
 に、我れ姪を好み色を重くして、美人を尋ぬること  
 天下に遍し、然れども西施が如き顔色を求め得ず。  
 越王の古會稽山を出でし時、一言の約束忘れ給ふ  
 べきにあらず、はやく西施を吳の宮中へかし給は  
 るべし、貴妃の位に供へんとの使なり。越王聞き、  
 我れ吳王に囚はれ耻を忘れ、石淋を嘗めて命を助か  
 りし事も、唯かの西施に逢はんと思ひしなり、され  
 ば今西施を他國へ遣さんこと叶ふべからずと宣ふ。  
 范蠡申しけるは、誠に君王の仰臣が心に能はず、つ  
 らく事を案するに、西施を惜み給はば、吳越の義  
 兵二たび起りて、此國を取らるゝのみならず、西施



をも奪はれ社稷をも傾けらるべし。深くこれを謀るに、吳王姪を好み色に迷ふこと疑なし、國潰え民叛かん時に及びて、兵を起し吳を攻められんに、勝つことを立所に決すべし、然らば西施もかへり長久なりぬべしと、涙を流して口説きければ、越王われ曩に范蠡が諫を用ゐずして、吳王に圍まれ命盡きなんとす、今また彼が諫を聞かずは、天の照覽にも背きなんとて、西施を吳國へ送られけり。互の別今を限、連理枝朽ぬれば、後朝の袖愁歎に残るといふも餘あり。されども范蠡が諫を違へず、一人の太子をも振捨て、出で給ふ御心も、たゞ末の世を思ひ給ふ故なり。さりながら一方ならぬ別の悲しさ、譬へん方もなかりけり。さて彼の西施は一度笑めば百の媚あり、一たび宮中に入りぬれば吳王心を惑はす。吳王は思よりも心憧れ、姪慾を好みて、夜とも知らず晝ともわかず遊宴を専として、國の危をも顧す、眞に范蠡が諫に違はずと見えたり。こゝに吳王

の臣下伍子胥これを歎き、吳王を諫めて曰く、君見すや、般の紂王は王妃に迷ひ世を亂し、周の幽王は褒姒を愛して國を傾けられしこと、遠きにあらずと度々諫めけれども、敢てこれを聞かず。或時吳王西施に宴せんとて、群臣を集め姑蘇臺にして花に酔を進めけるが、伍子胥も威儀を正しくして出でにけり。さしも珠を敷き黄金を鏤むる瑤階を上るとて、裳裾を高く褰げて、深き水を渉る時の如くにせり。人これを怪みその故を問へば、この姑蘇臺はいま越王に滅され、草深く露滋き地とならん事遠からず、我れ若しそれまで命あらば、昔の跡見んに、袖より餘る荆棘の露深かるべき行末の秋、思へば斯様にしつゝ、君王を始として聞くもの奇異の思をなせり、果して思合せられけり。また或時伍子胥、青蛇の如くなる劍を抜きて、吳王の前に置き云ふやう、この劍を磨ぐ事、邪を退け敵を拂はん爲なり。情、國の傾くべき基を尋ぬるに、みな西施よ

り起れり、さればこれに過ぎたる大敵なし、願くは西施が首を刎ねて、社稷の危を助けんといひて、齒齧をしてぞ立ちたりける。實にや忠言は耳に逆ふ習なれば、吳王大に怒り、眼の前に於きて國傾くといふとも、かろく我をや叛かん、まして命邪路に入る事その數ならず、これ偏に怨敵の語を受けたりと覺えたり。さあらんに於ては、是非を犯さざるべきに、伍子胥を誅せらるべきにぞ定めける。伍子胥敢てこれを傷まず、我が君臣の朝恩を捨つべきにあらず、國亂れば一番に出でて吳王の爲に屍を曝すべき身なり、越王の兵の手にかゝらんより、君王の手にかゝり死なんこと恨むべきにあらず。但し君臣下が諫を聞かずして、怒を廣くして我れに死を與ふこと、天既に君を捨つる始なり、君越王に滅され、刑戮の罪に伏せられんこと、三ヶ年を過ぐべからず、願くは我が兩眼を穿ちて吳の東門にかけて、その後首を刎ね給へ。一雙の眼枯れずして、待ち申すべし。

君勾踐に滅されんを見て笑はんと申しければ、吳王いよく怒をなして、遂に伍子胥を斬られけり。無慙なりしありさまなり。然れども吳王後悔せられけり。斯くて伍子胥願なればとて二つの眼を抽きて、東門にかけ置きたり。而して後惡事いよく積れども、伍子胥が果を見て敢て諫むる臣下もなし、あさましかりし有様なり。越國の范蠡これを聞き、時既に到りぬと悦びて、自ら二拾萬騎の兵を率して向ひけり。折節吳王は晋の國叛くと聞きて、兵を率して彼の國へ向はれたる留守なりしかば、防ぐ兵一人もなし。范蠡まづ王宮へ亂入り、西施を取返し、越の王宮へ返入れ奉り、即ち姑蘇臺を燒拂ふ。晋齊の兩國も越王に志を通じければ、三十萬騎の兵をいだし、范蠡が勢に力を合せけり。吳王これを聞き大に驚き、晋の國の戦をさし措きて吳國に引返し、越王に戦をなす。されども越の兵その勢雲霞の如く前よりきはへば、後よりは晋の豪敵勝に乗つて追



懸けたり。吳王大敵に前後を包まれて、逃るべき方  
なかりければ、死を輕うして戦ふこと三日三夜なり。  
乃ち范蠡新手を入換へ、息をもつがせず攻めにける  
程に、吳王の兵三萬餘騎討たれしかば、僅に百餘人  
になりにけり。吳王も自ら相戦ふこと三十二箇度な  
り。夜半に及びて百餘人の兵六十騎になりてこそ、  
山に登りて越王の方へ使を立て、君王の昔會稽  
山に苦めおき、越王勾踐が命を助けし事忘るべきに  
あらず、自らが臣下となり今この亂を起すこと、偏  
に助けし重恩にあらずや。我れも今より後、越王の  
如く君王の玉趾を戴かん、君もし會稽の恩を忘れず  
ば、今日の死を助け給へと言葉を盡しけり。越王こ  
れを聞きて、古の我が思今の人の悲こそ思知られ  
て、吳王を殺すに及ばず、その死を救はん事を思ひ  
煩ひ給ひけり。范蠡これを聞き大に怒り、越王の前  
に來り、面を犯して申しけるは、吳は天より越を興  
へたり、然るに今また吳を越に施す、過ぎにし與を

吳王取らずしてこの害に遭ふ。また越斯の如くの害  
に遭はんこと疑なし。吳王害を憐むこと、君臣とも  
に肝を碎き、吳王を得ること二十ヶ年の春秋、豈思  
知らざらんや。君非を行ふとき従はざるは忠臣なり  
と云捨て、吳王の使の未だ歸らざるに、范蠡自ら  
攻鼓を打ちて兵を進め、遂に吳王を生捕にして、  
軍門の前に引出だす。范蠡が年月の望憤、さこそ  
と思遣られたれ。吳王は既に面縛せられて、吳の東  
門を通り給ひけるに、吳王の忠臣伍子胥が、諫かな  
はずして首を刎ねられし時の兩眼、瞳に懸けたり  
しが、吳王の果を見んとて、三年まで枯れずして見  
開きてありしが、吳王面縛せられ、かの一雙の眼の  
前を渡りけるを見て、自ら動活きて笑ふ氣色見え  
けり。しうしやうの程ぞ恐しき。吳王彼に面を合せ  
ん事、流石耻しくや思ひけん、袖を顔に押當て、  
頭を傾けて通り給ふを痛はしき。數萬の兵これを見  
て、唇を返さぬはなかりけり。さてかの伍子胥が眼

は吳王の果を見送りて、霜の日に解くるが如く、時  
の間に消えて失せにけるぞ奇特なる。乃ち吳王夫差  
をば典獄の官に下されて、會稽山の麓にて遂に首を  
刎ね奉る。哀なりし例とぞ傳へける。されば古よ  
り今に至るまで、俗の諺に會稽の耻を雪むとは、こ  
の事をいふなるべし。さて越王は吳國を取るのみな  
らず隣國まで從へ、覇者の盟主となりしかば、其功  
を賞じて、范蠡をば萬戶侯に封せんとし給ひしかど  
も、范蠡曾て祿を受けず、大名の下には久しく居る  
べからず、功成り名遂げて身退くは天の道なりとて、  
遂に名を變へ陶朱公といはれて、五湖といふ所に身  
を隠し、世を遁れて釣をし、白頭の翁となりて、後  
には行方知らずと申傳へけり。ある人の曰く、越王  
は會稽の耻を雪ぎ、運命を開き世に榮ふるなり、今  
の時致は耻を雪ぐといへども一命を失ふ。例は少し  
違ふやうなれども、名を清め譽を世に残す。理にや。  
この人々の弓矢とつての勢、打物とつての振舞、吳

越の戦には優れるものかなと感ずる事多かりけり。  
聞く人理とぞ申しける。

十五 鶯と蛙の歌のこと

さても花に啼く鶯、水に棲む蛙さへ、歌をば詠むも  
のをと云ひけるは、人皇八代の帝孝元天皇の御時、  
大和國葛城山の麓孝元寺といふ所に、一人の僧あり  
けるが、またもなき弟子を先立て、深く歎きあたり。  
次の年の春、かの寺の軒端の梅の梢に鳴く鶯の聲を  
聞けば、初陽毎朝來、不相還本栖と鳴きける。文字  
にうつせば歌なり。

初春の朝ごとに來れども

あはでぞ還るもとのすみかに  
と鶯のまさしく詠みたる歌ぞかし。たま蛙の歌よみ  
けるとは、昔良貞住吉にゆき、結びし女を尋ねける  
に、かの女には逢はずして、あくがれ立ちたりし折  
節、蛙その前を通りし跡を見れば、三十一文字の



歌なり。

住吉の濱のみるめも忘れねば  
假初人にまた訪はれける  
これまた蛙の正しく詠みし歌なり。

曾我物語巻第五終

曾我物語巻第六

一 十郎大磯へ行き立聞の事

扱も十郎祐成は三浦より曾我へ歸りけるが、定めなき浮世の習づくく案するに、明日富士野に打出でて、歸らんことは不定なり、この二三年情をかけて、淺からぬ虎に暇乞はんとて、宿河原松井田と申す所より、大磯にこそ行きにけれ。折節鎌倉殿召に従ひ、近國の大名小名打連れ、通りけり。十郎虎が宿所に立寄りてありけるが、心を替へて思ひけるは、國々の侍多く通る折節なれば、流を立つる遊者また我れならぬ人に情もやと、心許なく思はれて、暫く駒を控へて内の體をぞ聞きゐたる。折節虎が住家には、友の遊君數多並居て物語しける中に、虎が聲と覺しくて、唯今上る人々は何處の國の唯人ぞ、聞き給はずや。先陣は横山藤馬丞とぞ申しける。虎

聞きて、實や孔子の言葉に、耳の樂む時には慎むべし、心の驕る時には恣にすべからざれとは申せども、あはれ實に、この殿原の馬鞍鐵腹巻を妾にくれよかし。女房達は聞きて、あはぬ願物、なにの御用によといふ。祐成にまゐらせ、思ふ事をとばかり云ひて涙を浮べけり。友の遊君聞きて、不思議やな、思ふことは何なるらんと怪みながら、問ふべきにあらず。敵討ちて後にこそ此事よとは知られけり。されば此人も豫てより知りけるよとは申合ひけり。祐成物越に聞きて、如何でか是ほど情深きものに、立聞したりと思はれては、後の怨も残るべし、後暗くも思ひなば來ぬこそと思ひつゝ、知らざる體にもてなし、駒の口を暫し控へ、何となく廣縁に下り、鞭にて籠を打揚げ内に入りぬ。虎もやがて出で、何時より睦じく語寄り、飽かぬ世の中の夢か現かと思ひるたりける處に、思の外なる事こそ出來たれ。



### 二 和田義盛酒宴の事

然る程に和田義盛一門百八十騎打連れて、下野へ通りけるが、子どもに向ひ云ひけるは、都のことは限り、田舎にては黄瀬川の鵜鶴、手越の少將、大磯の虎とて海道一の遊君ぞかし、一獻進めて通らばや。然るべく候ふとて、かの長の方へ使を立て、斯くぞとは云はせけるに、長斜ならず悦びて、遠侍の塵とらせ、義盛これへと請じけり。虎に劣らぬ女房ども三十餘人出立させ、座敷へこそは出だしけれ。朝比奈三郎義秀、古郡左衛門胤氏を始として、八十餘人居流れて、既に酒宴ぞ始まりける。されども虎は座敷へ出でざりけり。義盛心得ず思ひて、この君達もさる事なれども、虎御前の見參の爲なり、などや見え給はぬ、義盛あしくや参りて候ふかといひければ、母聞きて、このほど煩しくてといひながら、座敷を立ち虎が方へ行き、などや遅く出で給ふぞ、疾

くくと言置きて、母は座敷へ出で、唯今虎は参り候ふといひければ、義盛盃ひかへ、今やと待てども見えざりけり。なか／＼始より心地例ならずと云ひなばよかるべきを、只今といふにより、義盛色を損じ、御心に背く事あらば、罷立ちて重ねて参るべしといふ。母聞きて悪様にやと思ひ、また座敷を立ち、何とて出で給はぬぞや、時世に従ふならひ、思はぬ人に馴るゝもさのみこそ候へ、怨しの御振舞やとて行む。虎はまた十郎が心かねて、衣引被き打臥しぬ。母はこの心を見かねて、如何にや昔のふん女が事をば知り給はずや、さやうの事だにあるぞかし、なほも出でまじくは、六字の名號も御照覽候へ、生々世々不興すると云捨て、座敷へこそは出でにけれ。

### 三 ふん女が事

そもくふん女と申す由来を委しく尋ぬるに、昔大

國流砂の水上に、ふん女といへる女あり、天下に聞ゆる長者なり。金銀珠玉のみならず、七珍萬寶四方の藏にあまりけり。然れども如何なる罪の報にや、一人の子なし。悲みて祈れどもかなはず。ある時思はざるに懷妊す。悦の思をなすに、苦めることいふばかりなし。されども子の出来ぬべき事の嬉さに、物の數とも思はざりけり。日數積るほどに産の紐を解く。見れば人にはあらで、卵を五百生みたり。これは如何に、一つなりとも不思議なるぞかし、五百まで生るゝこと凡事にあらず、縁なき子を強ひて祈るに因つて、天の憎を蒙ると覺えたり。解りなば如何なるものにて親をも損じ、人をも害すべきやらん、その上胎卵濕化のうち、卵生罪深しと説かれたり、置くべからずとて箱に入れて、りうさの浪に流捨てけり。不思議なる例なり。遙の川の末にれうかんといふ所に、さよはくと云ふひんたう無縁の老人あり。且暮この河の魚族を漁り身命を助りけるが、折節釣

する所へこの箱流寄りたり、取上げ開き見れば卵なり。何者の子やらんと思ひ、家に取りて歸り妻にかくと語る。女これを見て、恐しや如何なるものにか解りなん、主も様ありてこそ捨てつらん、急ぎ元の川に入れよといふ。男の曰く、たゞ置き候へ、斯様なるものには不思議もこそあれ、たとひ僻事ありとも我等は齡幾程もあるべきならねば、彼が様を見よとて、物に包み暖にして置きたりければ、程もなく美しき男子に解りぬ。我れ古より子のなき事を歎に思ふに、然るべき瑞相天の憐にやと悦びて、また見れば、解り／＼て五百人にぞ解揃ひける。一つを捨て一つを養はん事怨しく黙止しがたくて、取集め養ひけるに、一つも恙なく成長しけるぞ不思議なる。實に夫婦二人の時だにも、渡世かなひ難く乏しかりけり、況して此者共を育てける程に、朝夕の生路に侘びければ、此處や彼處に徘徊し、命を助らんとする程に、心ならず猛悪になり、思はずも慾心に住す、



瞋恚を旨として驕慢にあまりければ、外道にも近づきけり。或時彼等いひけるは、我等一人ならず饑餓に及べり、さればとて徒に身を捨つべきにあらず、この川上にふん女とて長者あり、財寶藏に置餘る、いざや行きて打破り寶を取りぬべしと云ひければ、一人は進出でいふやう、さる事なれども、それ程いみじき果報者を我等卑しき貧力にて、寶を奪はんこと思も寄らず、却つて身の仇となりぬべし、案じ給へといふ。今一人進みていふやう、さらば外道どもを語ひ、彼等が神通の力を借りて破つて見ん、然るべしとて、飛天外道といふ者の許へ云遣りたりければ、素より鬪争修羅を好むものなれば、同類を催し打立ちける。装束には流轉生死の鎧直垂に、惡業煩惱の籠手をさし、貪慾の脇立に、因果撥無の脛當に、愚癡暗蔽のつなぬき履き、極大邪見の膝甲に、誹謗三寶の裙金物をぞ打つたりける。三界無安の白星の兜に、六趣輪廻の頬當、瞋恚憤怒の刀をさし、放逸

無慚の太刀を佩き、殺生偷盜の大弓に、破戒無明の弦をかけ、苦患極重の箠には、諸法愛著の矢數をさし、四天王の馬の太く逞しきに、四苦八苦の鞍置きてぞ乗つたりける。異類異形の下外道ども、思ひくくの装束に、色々の旗さ、せ、數を知らずぞ集りける。城中に静りかへりて音もせず、されども用心厳しくて、容易く入るべきやうはなし、時を移してゆらへたり。かのふん女と申すは、同じく福者といひながら、三寶を崇め仁義を亂さぬ賢人なり、いかでか諸天も捨て給ふべきならねば、ふん女を渴仰し給ひけり。かくては如何あるべきとて、死生を知らざる外道ども喚叫んで亂入る。その時惡魔を降伏の四十二天影向なりて、四角四方を守り給ふ。四天はもとより甲冑を鎧ひ、弓箭を離さぬ勇士なれば、面もふらず障へ給ふ。火天猛火を放し風天風を吹かせ、各、城を守り給ふ。中にも水天は弓矢を守らんと誓ひ給ふなれば、數の眷族を引連れ、妙觀察智の

旗さ、せ、殊に進みて見え給ふ。其日の御装束には、九品正覺の直垂に、相好莊嚴の籠手をさし、上求菩提の小具足に、下化衆生の脛當、しくりやうくわんの釘靴はき、大悲大衆の頬當し、無趣方便の赤糸のけをひかせ、紫磨黄金の裙金物をこそ打つたりけれ。萬徳圓滿の月眞甲にうち、畢竟空、四空の四方白の兜の猪首に著、五劫思惟の嚴物造の太刀を佩き、首楞嚴定の刀をさし、火舎三昧の月弓、實相般若の弦をかけ、智徳無量の矢數をさし、隨類化現を羽に交へ、等高に負ひなし給ふ。元より手馴れし大蛇後より匍ひかゝり、左右の肩に手をおき、兜の上に頭をもたせ、兩眼の光明にして、時々電四方に散り、紫の舌の色鮮にして、折々火焰を吹出だす勢天に餘る。今の世に兜の龍頭を打つこと此時よりも始りけり。各、床几に腰をかけ宣ひけるは、大修羅王が戦の強きも佛力にはかなはず、ましてやいはん、彼等が勇物の數にて數ならず、蟻の塔とも

覺えたり、城中静れとぞ下知し給ふ。こゝに城の中より武者一人進出で申しけるは、只今寄來る兵は、何處の國の如何なる者ぞ、また如何なる宿意あるぞ、委しく名乗れといひければ、五百餘人の兵聞きて、彼等には親もなし氏系圖もなし、生るゝ所を知らざれば、何條誰と名乗るべし。朝夕思ふ事とは、實の欲しきばかりなり。急ぎ藏を開き財寶を興へ給へ、我等思ふ程取りて歸らんといふ。心得ぬ言葉かな、人により分に隨ひ氏も名字もあるものを、猛惡の身不思議なり、委しく申せといひければ、問うては何にし給ふべき。さりながらこの川上より流來たる五百人の卵の流人なり、謂なければ人知らず、急ぎ寶を施して歸すべしとぞ申しける。流來たる兵といふを、ふん女つくくと聞きて怪しく思ひ、櫓の下に歩出で、五百人の殿ばら近く寄り給へ、尋ぬべき事ありといひければ、一人扉の際に寄りたり。抑々流來たると仰せられつる言葉について申すぞとよ。



姿は何にて流れけるぞ。寶をば出ださでむづかしとは言ひながら、我等が昔は如何なるものか生みたりけん、五百の卵にて水上より流れけるを、取上げて育てけるが斯なりぬといふ。さればこそと思ひ、その卵は何に入れけるぞ。玉の手箱に入れ上には銘を書きしなり。銘をば何と書きたるぞ。はうしやうろうの箱と書けり。さては疑ふ所なし、是はそなたのし、やうなり。こなたの證據には、若しこの卵、恙なく成長あらば訪来よ、ふん女と書きて判を捺し、箱の底に入れたりしが、利那も肌を離さじと、頸に懸持ちたりとて、懐よりも取出だす。さては疑ふ所なし、汝等は自らが子供なりとて、門戸を開きて出でければ、尾花の如く支へたる、鉾剣をも捨てにけり。母も子供の懐しきに、劍の刃も忘れつゝ、彼等が中へ走入りて見廻せば、兵も兜を脱ぎ弓矢を横へ、各々大地に跪く。何しか母は懐しく、思の涙に袖絞る。並居たる兵も同じ心になりにけり。彼もこ

れもそかといふ情の袖も香しく、憐み憐む装は、見るに涙も進みけり。實にや恩愛の中ほど悲しき事非じ。誠や夜叉羅刹を従へて、猛く勇める武士も、母一人の言葉に皆々靡くぞ哀なる。かくて城中に誘入れ、親子の睦戀なり。

#### 四 辨財天の事

彼のふん女と申し、人、彼には大辨財天と現れ給ふとかや。五百人の人々は五百童子となり、其一はいんやく預り給ふ神と現れ、はうしやうろうの箱をもその中に持せ給ふ。一切衆生の願を悉く汲みて、安樂世界に迎へんと誓ひ給ふ。斯様に猛き弓取も、母には従ふ習ぞかし。

#### 五 朝比奈虎が局へ迎に行きし事

さて母は虎を制しかね、なにとて母には従はざる

やとぞいひける。虎はなほも涙に咽び、流を立つる身ほど悲しき事はなし、夫の心を思知れば母の命に背き、また母に従へば時の綺羅に愛づるに似たり。兎にも角にも我が思、亂初めける黒髪の、あかぬ情の悲さよ。如何なる罪の報にや、女の身とは生れけん、さればにや五障三従と説き給ひけるぞやとて、さめぐと泣居たり。十郎この有様を見て、何かは苦しかるべき、一旦こそあれ、座敷に出で給へかし。母の命に背きなば、冥の照覽も恐しと申しければ、虎はこれにも従はず、たゞ泣くより外の事はなし。義盛これをば知らずして、何とて虎は遅きやらんとて、一座の興を失ひけり。母も待ちかねけるにや、曾我十郎殿ましますが、さてや出でかね候ふらん。和田はこれを聞きて、心得ぬ十郎が振舞かな、我れこそ出で、對面せざらめ、流の遊君を塞ぐべきか、實に曲事なり。四郎左衛門、朝比奈はなきか、御迎にまゐれといふ。四百餘人の殿ばらも、はや事出来ぬ

と色めきけり。祐成が在所近ければ、義盛が言葉手に取るやうにぞ聞えける。不思議やな、思はぬ最期の出来たるぞや、身に思のあれば、千金萬玉よりも惜しき命なり、されども通れぬ所は力なし、徒なる死をして、五郎に怨みられん事こそ、思ひやられて悲しけれ。さりながらかやの所は神も佛も許し給へと云ふまゝに、烏帽おし直し、直垂の露結んで肩にかけて、伊東重代の赤銅造の太刀を二三寸ぬきかけ、片膝押立て一方の扉を開き、ことごとくしや三浦の者ども何十人もあれ、一番に入らん朝比奈が諸膝難伏せ、續かん奴ばら物の數にやあるべき、伊東の手並を見せん、遅しとこそは待ちかけたり。虎もこの有様を見て、實にや冥途より来るなる、獄卒の追立つる途だにも、主君師匠の命には代るぞかし、ましてや夫婦恩愛の契淺からずとは、古今までも傳聞くなるものを、後の世までも離れじと思切つて、守刀衣の褌に取含み、三浦の人々如何に勇み亂入ると



も、何となく立廻り、よき隙に義盛を一刀刺し、如何にもならんと唯一筋に思定め、祐成近く寄り、今やと待つぞ優しき。時移りにければ、和田いよく腹を立て、如何に朝比奈はなきか、御前に参れ、無骨の訴訟も苦しかるまじとぞ怒りける。義秀聞きかね座敷を立ち、虎が迎に行きけるが、つくつく案ずるやう、十郎といふも伊東の嫡々たり、心も亦たて切つたり、始より出さで、斯様になりてはよも出でじ、我れまた悪しく怒りて出ださんも耻辱なり、所詮難なきやうに打向ひて、賺さばやと思ひければ、静に歩入りけるが、この殿ばらの兄弟は、身こそ貧なりとも心は貧にあらばこそ、疎忽に入つて細頸打落され悪しかりなんと思ひ、扇笏に取直し畏つて、これに曾我十郎殿の御入の由、父にて候ふ者承り、御迎の爲に義秀を参らせられて候。何かは苦し候ふべき、御出ありて親にて候ふものに御對面や候ふべき。それにまた某一期の所望の候。御前の事

ゆかしきことに義盛思はれ候ふが、御座を存じて義秀申止めて候。然るべくは諸共に御出ありて、父が所望をも叶へ、義秀が面目施すやうに御計ひ候へ、一向頼み奉り候。さりながら御心に違ひ候は、罷歸り候ふべしと、障子越にいひければ、十郎聞きて頼むといふに和きて、左右にや及ぶ朝比奈殿、いかでか異議に及ぶべき、立ち給へや御前、祐成も出でんとて、烏帽子の筒押立て、直垂の衣紋引繕ひ、虎を先に立て、各三人出でたりけり。さてこそ並居たりける人々も、生きたる心地はしたりけり。實に義秀の振舞優なるものかな、座敷に事も起らず虎も出でて、十郎も心を破らで事過ぎにけり。これやせうろんに、國の將にそきする事は奸臣にあり、家の將に盛に貴うする事は忠臣によつてなりといへり。斯様の事をや申すべき。朝比奈なかりせば由なきこと出来、十郎も討たれ和田にも人多く亡びて失せなん、洵に深淵に臨んで薄氷を履むが如き、危かりし

事どもなり。

### 六 虎が孟十郎に差しぬる事

義盛は虎を見給ひて嬉しげにして宜ひけるは、さても十郎殿の内にもましくけるかや、他所がましく心を隔て給ふものかな、御入を知り候は、始より申すべかりつものな、これへくと請せらる。十郎笏とりなほし、さん候、御目にかゝるべきを、異體の無骨に候へば、罷出でざる由色代して、左手の疊になほりけり。虎も座敷に定まれば、孟前にぞ置きたりける。義盛虎をつゝ見て、聞きしは物の數ならず、かゝる者もありけるよ。十郎が心をかねて出でざるさへ優しく覺ゆるにや、それといふ。何となく孟取上げ、その孟和田飲みて祐成にさす。その孟義秀飲みて面々に下し、思差し思取り、その後には亂舞になる。こゝに復始めたる土器孟虎が前にぞ置きたりける。取上げけるを今一度と強ひられ

て受けて持ちけるが、義盛これを見て、いかに御前、その孟何方へも思召さん方へ思差し給へ、これぞ誠の心ならんとありければ、七分に受けたる孟に、千々に心を使ひけり。和田にさしたらんは時の賞玩異議なし、されども祐成の心の内耻し。流を立つる身なればとて、睦びし人を打置きながら座敷に出づるは本意ならず。況してやこの孟義盛にさしなば、さらに愛でたりと思ひ給はんも口惜し。祐成にさすならば、座敷に事起りなん。斯くあるべしと知るならば、初より出でもせで内にて如何にもなるべきを、再び物思ふ悲しさよ。よしこれ前世の事、思はざることあらば、和田の前下にさし給ふ刀こそ妾がものよ。支ゆる體にもてなし奪取り一刀刺し、とにもかくにもと思定めて、義盛一目、祐成一目、心を使ひ案じけり。和田は我れにならではと思ふ所に、さはなくて、許させ給へ、さりとは思ひ方をと打笑ひ、十郎にこそさ、れけれ。一座の人々目を



見合せ、これは如何にと見る所に、祐成 孟取上げ  
て、某賜らんこそ狼藉に似たり、これをば御前に  
といふ。義盛聞いて、志の横取無骨なり、如何でか  
さるべき、はやくと色代なり。さのみ辭すべきに  
あらず、十郎 孟とり上げ三度ぞ酌む。義盛居丈高  
になり、年ほど物憂き事はなし、義盛が齡二十だに  
も若くば御前には背かれじ、たとひ一旦嫌はるゝと  
も、かやうの思差し他所へは渡さじ、南無阿彌陀佛  
と高聲なりければ、殊の外苦々しくぞ見えにける。  
九十三騎の人々も、義秀の方を見やりて、事や出来な  
んと色めきたる體さしあらはれたり。十郎もとより  
騒がぬ男にて、何程の事かあるべき、事出来なば何  
十人もあれ、義盛と引組んで勝負をせんするまでと  
思切り、嘲笑ひてぞ居たりける。

七 五郎大磯へ行きし事

こゝに五郎時致は曾我に居たりけるが、父のために

法華經誦みて、本尊に向ひ念誦しけるが、頻に胸騒  
しけり。心得ぬ今の胸騒や、いかさま祐成の大磯へ  
越し給ひぬるが、東國の武士ども富士野へ打出づる  
折節なり、流の遊君ゆる事仕出し給ふにやと、心許  
なく思ひければ、帳臺に走入り、緋絨の腹巻とつて  
引懸け、伊東重代の四尺六寸の赤銅作りの太刀十文  
字に結下げ、鞍おくべき暇なければ、裸馬に打乗つ  
て、二十餘町のその程を、たゞ一馬場に駆けつけ見  
渡せば、長者の門のほとりには、鞍置馬一二百疋引  
立てたり。遠侍には物具の音頻にして、只今事出  
来ぬとぞ見えたりける。入るべき所なくして門の外  
を廻り、日比祐成に行連れて通りし細道を廻り、虎  
が居所にこそ著きにけれ。さて十郎殿は如何にと問  
へば、和田殿と孟を論じて、只今事出来ぬと申す。  
さればこそと思ひ透垣を跳越え、兄の居たりける後  
の障子を隔て立ちたりけり。時致これにありと知ら  
れん爲に、筈にて障子越に、袴の著際を刺しければ、

十郎誰そと問ふ。五郎小聲になりて、時致これにあ  
りといふ。十郎聞きて、千萬騎の兵を後に持ちたる  
よりも頼しくぞ思ひける。義盛の聲として、上もな  
く振舞ふものかなと聞えける。祐成の御事ぞと心得  
て、何事もあらば障子一重踏破りて飛出でて、一の  
太刀にて義盛、二の太刀にて朝比奈、その外の奴ば  
ら何十人もあれかし、ものゝ數にてあらばこそと思  
切り、四尺六寸の太刀杖につきて立つ。忍びかねた  
る有様は、たうはち毘沙門の悪魔を降伏し給ふかと  
ぞ覺えける。夕日脚のことなれば、太刀影の障子に  
透きて見えければ、朝比奈これを見て推量し、誠や  
彼等兄弟は、兄が座敷にある時は弟が後に立添ひ、  
弟が座敷にある時は兄が後にあるものを、いかさま  
五郎は後にありと覺えたり。さしたる事もなきに、  
大事引出してなにの益かあらん、またさりとて親し  
き仲ぞかし、何となき體にもてなし、座敷を立たば  
やと思ひければ、紅に月出したる扇をひらき、何と

やらん御座敷静りたり、謠へや殿原はやせや舞はん  
とて、既に座敷を立ちければ、面々にこそ囁しけれ。  
義秀拍子を打立てさせ、君が代は千代に八千代を細  
石のと絞上げて、巖となりて苔のむすまでと、短く  
舞うてをさめけり。

八 朝比奈と五郎力競の事

かくて朝比奈三郎、舞も過ぎぬれば、五郎が立ちた  
る前の障子を引開け見れば、案にたがはず、時致は  
四天王を作損じたる様にて、踏みしかりてぞ立ちた  
りける。朝比奈過たず狂言にとりなして、客人まし  
ますぞや、此方へ入らせ給へとて、草摺二三間むす  
と取りて引きけれども、少しも働かず。磐石なりと  
も義秀が手をかけなば、動かぬことやあるべきと思  
ひ、力に任せ、えいやくと引きけれども、五郎は  
物とも思はねば、引くともなく引かるゝ共なく、嘲  
笑ひてぞ立つたりける。大力に引かれて、横縫草摺



こゝへすして一度に切れて、朝比奈は後へどうと倒れけり。五郎は少しも働かで、仁王立にぞ立つたりける。さてこそ五郎時致はみぎは優りの大力と、他所の人まで知りにつけり。實や此者の父河津三郎は、東八ヶ國に聞ゆる股野五郎に、片手を離ちて角瓶三番勝ちてこそ、大力の覺は取つたりしぞかし。その子なるをや、力競は叶ふまじ、賺さんものをと打笑ひ、これへくと請すれば、餘の辭退は無禮なり、異體は御免候へと云ひく座敷に出でけるが、持ちたる太刀と草摺にて、末座なる人々の頸のまはり顔を打殿り、差越えく行過ぎて、朝比奈が下なる疊に直りける。座敷に餘りて見えたりけり。朝比奈急ぎ座敷を立ちて、義盛の前にありける盃を五郎が前にぞ置きたりける。時致盃取上げて、酌に立つたる朝比奈に色代して、御盃の前後は遅參の無禮御免あれ、御盃は賜り候ふとて、三度までこそ乾したりける。その盃思取り申さんとて、元の座敷

になほりけり。五郎も杓に手をかけ、近くも參らぬ御酌に、時致立たんとゆるぎ立つ。四郎左衛門座を立つて、某これに候ふとて銚子に取りつけば、五郎も暫し色代す。義盛これを見給ひて、客人の御酌然るべからず、それくとありければ、常氏酌にぞ立つたりける。朝比奈盃取上げ三度乾す。その盃を虎飲みて義盛にさす。其時扇笏にとりなほし、今暫くも候ふべけれども、曾我に差しあたる用のこと御座候、後日に訪れ申さんとて、兄諸共立ちければ、虎も同じく立ちにけり。一座も不興至極にして、和田は鎌倉に通りければ、この人々は打連れて、曾我へとてこそ歸りけれ。

九 曾我にて虎が名残惜みし事

まことにこの殿原の事は、これや名鳥昊天に翼をならべ遊ぶと雖、沼澤に下りてきうそうの憂に遭ひ、

大魚深淵の底に尾をふれども、陸に上る思ありと見えたり。十郎も身に思のあるものぞかし、よしなき女の許にて思はずの難に遭はんとしけるぞ、危かりし次第なり。かくて祐成は虎を具して曾我に歸り、常に住みける所に隠置き、何時よりも細々と打語りしは、此度御狩の御供申し、思はずのおこしの矢にもあたり、朽果つる埋木ともなるならば、身こそ貧に生れぬ、鬚なるちりの見苦しきよと、人の言はんも口惜し、髪削りてたび候へといひければ、虎は何ともし思はで、數の櫛を取散し、暫く髪をぞ梳りける。十郎は女の膝に臥しながら、虎が顔をつくくを見て、祐成を睨じと見んも、これぞ限なるべきと思へば、流る涙を見て、例ならぬ御涙心許なきよ、何なるらんと問ひければ、今に始めぬ事とは言ひながら、髮世の中の定なきよ。此程のよろづあぢきなく、何事も心細く覺ゆれば、徒に契りおきし同じ世の、名の立つ程も如何にやと思へば、心に浮ぶ

涙の零るゝぞ。實にや頼まぬ身の習、歎つ命も露の間も思しくこそ思はるれ。實にもさやうに思ひ給はば、この度の御狩思召し止り給へかし。君に知らるる宮仕の暇なき業にも候はず、止り給へといひければ、思立つ御供なり、何事かはと云ひながら、斯程深く思ふ仲、思知らせず出でなば、情の色も絶えぬべし、せめて夢ほど此事を知らせばやとは思へども、女は甲斐なき者なれば、飽かぬ別の悲しさに、止めたために母にもや語り廣めん、此度は思定めたるもの故、叶はぬ事を母聞きて、思の種ともなりぬべし、または五郎も怨みなん、思切りたる一大事、女にさぞといはんこと悪しかるべしと思切り、何ともしもなく戯れけり。忍ぶとすれどその色の怪しく思ひ奉り、覺束なしと問ひければ、深き思の切なるに、東の間も思合する事なくて果てぬるものならば、後の怨も深かるべし。よし思出一端を、云ひてや心を安むると、身の有様を思ふには、憂きが住居の詮



なくて、世には住まじのその故を、如何にといひて知らすべき。さればにや祖父入道の謀叛によつて斬られまゐらせし孫なれば、君にも召使はれ御恩蒙ることもなし。況して先祖の本領は、年月餘所に見なすうへ、馬の一疋もけなだらかに飼はず、また父の爲として經卷の一部も書かず、あるとしもなき身の仕儀、人に見ゆるも耻しく、面ならぶる便もなし。されば此度御狩より歸りなば出家を遂げ、墨の衣に染めかへて、頭陀を食して靈佛靈社に参り、父の後世をも弔ひ、我が身をも助らんと思ひ候ふなり。世にありとも夢幻の如く、法身を残すべきにあらず、花山の法皇だにも、萬乗の位を去りて山林に交り給ふぞかし、況してや貧道無縁の祐成が、何に命も惜しかるべし。今度の御供を最期に定め、再び歸らじと思へば、飽かぬ別の道捨難くてと申しければ、虎聞きもあへず十郎が膝にかゝり、暫は物も言はざりけり。やゝありて、怨しや問はずは知らせじと思召す

かや。實妾は大磯の遊君、あさましき者の子なれば、誠の道をも思召さじなれども、女の身の敢果なさ、身に代へてもこそと思ひ奉れ。見えそめしよりなどやらん、思の色の深草よ、忍の袖の摺衣、忘れ奉る便もなし。御志は知らね共、御豫言の違ふをば、偽にまたなるらんと、心を盡し待たれしに、さやうに思立ち給はれ、妾も同じく髮剃下し、墨の衣に身を糞し、一つ庵にあらばこそ、外に庵室引結び、衣も濯ぎてまゐらせん。香を供へ給はれ花を摘み、薪を拾ひ給はれ、閻伽の水を掬ひ、一つ蓮の縁をも願はん。その睦をも否と宣はれ、山々寺々を修行して、他所ながら見奉らん。それも憚り思召さば、聞き給へ、身を投げ一日片時も長じとて涙に咽び申しけり。實に十郎が膝の上も虎が涙に浮くばかり、袖も絞ろぞかねたりける。十郎はつくづくと案するに、これほど思入りたる志、露ほども知らせずして、心強く隠遂げぬるものならば、長き怨となりぬべし。

若し立返らぬ習あらば、思出だして念佛をも申すべし。さればとて、人に漏すなといはん事を空にやすべき。その上日數なければ知らせばやと思ひ、此事母にだにも知らせ奉らで過ぎしかども、御身の志切にして知らせ奉るぞ、洩し給ふべからず。眞の道心にもあらず、出家また遁世にてもなし、年比祐成が身に思ありとは知り給ひぬらん、その本意を遂げんと思へば、此度出でて後再び歸るまじければ、相見んことも今宵ばかりなり。さてしも何となく申し契りて時の間と思へども、三年になりぬ。いつ思出もなく果てん事こそ無念なれ。御志の程こそ有難く思ひ奉れ。面々如き人は、祐成風情の貧しく頼む所なきに、何によりてか露の情もあるべきに、三年の間の顔の、變らぬ色の常磐山、おのれ鳴きてや時鳥、憂世の夢か朝顔の、果敢なくならん身の程を、耻ぢす忘れぬ情の袖、前世の事といひながら、過ぎにし事の耻しさよ。奉公の身ならねば、御恩の

時ともいはれず、くわいせん的身ならねば、理のあらん折ともいはれず、思出のなきことを思出し給はんことよとて、さめくくと泣きにけり。虎もこの言葉を開きて、また打伏して泣くより外の事ぞなき。稍ありて起直り、そもこれは何となりゆく事どもぞや。是程の大事果敢なき女の身なりとも、いかでか人に洩すべき。一人まします母にだにも聞かせ奉らず、振棄て、心強く思立ち給はん事、數ならぬ妾申すとも止まり給ふべきか。何につけても、飽かぬ別の道こそ悲みても餘あり。斯様の大事心おかず知らせ給ふこそ、返すくも嬉しけれ。さてもこの年月の御馴染、いつの世かは忘るべき。思ふに叶はぬ事なれども、御物具の見苦しきを見参らす折節は、人々しき身なりせば、などや使にもなり奉らざらん、しづ心を盡し明暮しつるに、世を捨て、何處ともなくならんと仰せらるゝをこそ、身の置處なかりしに、思ひも寄らぬ永き別路とならん悲しさよとて、



聲も惜まず泣居たり。十郎も詮方なくして、餘な歎き給ひそ、人もこそ聞き候へ、名残は誰も同じ心ぞと慰めつゝ、是を形見にとて、祐成に添ふと思召せとて、鬢の髪を切りて取らせぬ。虎は涙もろともに受取り、肌守に深く収め、物をもいはす伏沈みぬ。同じ枕に打傾き、涙に咽ぶばかりなり。日も既に暮れければ、今宵ばかりの名残ぞと、思遣るこそ悲しけれ。千夜を一夜に重ねても、明けざれかしと思はる。比さへ五月の短夜の、有明なれば宵の間の、待たるゝ程もなければや、出づると見ればその儘に、傾く空も怨しく、八聲といふも鶏の、夜やしりふるると明易く、夢見る程もまどろまで、東にたなびく横雲の、東雲しらむ憂枕、まだ睦言の盡きなくに、後朝になる曉の、涙に床も浮きぬべし。互の名残心のうち、さこそと思知られたり。なほしも虎は打臥して、消入る様に見えしかば、十郎彼を勇めんとて、暇申して祐成は、後生にて參逢はんとて驚かせば、

起直りたるばかりにて、物いふまではなかりけり。今を限の別なり、後の世までの形見とて、十郎著たりける目結の小袖に、虎が紅梅の小袖に著換へて、心のあらば移香よ、暫し残りて憂別、慰むほども面影の、著換へし衣に留れかし、互の名残つさせずと、また諸共に打伏しぬ。幾萬世を重ねても、名残つべきにあらず、祐成も途まで送り奉るべし、目こそ傾き候へとて、茸毛なる馬に具鞍置かせ、道三郎門の邊に控へたり。この馬鞍返し給ふべからず。この三年通ひしに、馬は更れども鞍は變らず、鞍はかはれど馬は更らず、今日を最後の別なれば、留置きて永き形見とも思ひ給ふべし。但し馬は生あるものにて更ることあり、鞍をば失はで持ち給へと、云ひ云ひ馬にぞ乗せたりける。

十 山彦山にての事

祐成も送るべしとて、馬に鞍置かせ打乗りて、中村

通にゆくべし、大道は馬鞍も見苦し、虎を祐成が思ふとは皆人知られたり、伴の者ども、かひなくしからすとて、打連れてこそ送りけれ。曾我と中村の境なる、山彦山の峠まで送來て、十郎こゝに駒をひかへ、今少しも送りたくは候へども、必ず今朝より出でんと定めしかば、定めて五郎も來らん。名残は盡くべきにあらず、現世にて相見ん事も今ばかりぞと思へば、遣方なくして涙に咽ぶばかりなり。遠近のたづきも知らぬ山中に、道もさやかに見えわかず、かの松浦佐用姫が領布振る姿は石になる、それは昔の事ぞかし、今の別の悲しさに、駒近々と打寄せ、手に手を取組み涙に咽ぶばかりなり。稍ありて、祐成が心のうち推測り給へ、是にて年を送るべきにあらず、たい一筋に浄土の縁を結ばん、來世を深く頼むぞと心強くも思切り、控ふる袖を引別けて、泣く泣く立別れけり。げにやかんくの床の上には、遙に契を千年の鶴に結び、ちんじやの筵の上には、遠く

齡を萬劫の龜に歸して契りしかども、通れぬ別の途は力及ばず、互に後を返見、坂中にやすらひて控へたり。幽に見えし姿も見えずなりゆけば、そなたの空のみ返見る。足曳の山の彼方の戀しさは、いづれも同じ心にて、現ともなき涙の袖、夢の如くに打別れにけり。思のあまりに虎が、馬の口控へたる道三郎に泣くゝいひけるは、祐成を見奉らんも今ばかりの名残なり、何事も細々とひたかりつるを、涙にくれて云ひも盡さず、取分け暇乞ひ給へるに、返事せざりし心許なければ、今一度呼返し奉りてたひ候へ、物一言申さんといひければ、道三郎、たい世の常の出家遁世にてもなしとて、さしても騒がざりけるが、斜ならざる互の歎を見て哀に思ひ、急ぎ走歸り、遙に行きたりける十郎を呼返し。もとの峠に打上り駒を控へて、何事ぞと問ひければ、虎は涙に目もくれて、思設けし言の葉の、何時しか今は失果て、鞍の前輪にうちかゝり、消入るやうに見え



しかば、十郎わきていふべき言葉もなく、唯泣くばかりにてぞありける。稍ありて虎は息の下にて云ひけるは、何時となくさぞと契らぬ夕暮も、駒の足並轡の音のする時は、若しやと思ふ折々の、その人となき過行けば、その夜は空しく床に臥し、鳥諸共に泣明かす、枕の上の塵の海、思を深く湛へつゝ、夕の鐘の響には、暮るゝ便を待ちかねて、乾されぬ袖のそのまゝに、儂かりける契かな、三年の夢は程もなく、別るゝ現になりけり。さて何時の世に廻逢ひ、斯る思のまたもやと、聲も惜まず泣居たり。祐成身の上をつくゝ思ふに、罪の深きぞ知られたり。幼くして父に後れ、本領だに他所に見なし、母一人の養育にて身命を延ぶると雖、あるかひなし。この三年御身にだにも相馴れて、飽かぬ別の悲さは、歎の中の歎なり。五慾の無常は春の花、望婆は假の宿なり。秋の紅葉の風散りて、草葉にすがる露の身、後生弔ひてたび給へとて、東西へ打別れけり。

### 十一 比叡山始の事

さて我が朝比叡山の始を聞くに、天地既に別ち、國未だ定らざる時は、人壽二萬歳を保ちける。迦葉尊者は西天に出世し給ふ。大聖釋尊はその教義を受け、都卒天に住し給ふ。我れ八相成道の後、遺教流布の地何の處にかあるべきと云ふに、この南閩浮洲を普く飛行して御覽じけるに、ゑんゝ茫茫たる大海の上に、一切衆生、四通佛性如來、常住無有變異、斯の如く立つ波の聲あり。この波止らん處一つの國となりて、我が佛法を弘め通達すべき靈地たるべしとて、彼の十萬里の滄海を凌ぎて行くに、葦の葉一つ浮びたる所に、この波流止まりぬ。今の比叡山の麓、大宮權現のおはします波止土濃これなり。さればにや波止り土濃なりと書けり。かく御覽じおきて、釋尊天に上り給ふ。されば葦原の中つ國と申しならはせるは、この一葉の葦の故とかや。日本

我が朝は、葦の葉を漂すとぞ申しならはせるとぞ聞えし。その後人壽百歳の時、悉達太子と生じて八十年の春の頃、頭北面西の時、跋提河の波と消え給ふ。されども佛は常住にして不滅なりしかば、無縁法界の妙諦をあらはし給ふなれば、葦の葉の島となりし中つ國を御覽じける時、鷓鴣草葺不合尊の御代なれば、佛法の妙事を人知らず。こゝに漣や滋賀の浦の邊に釣をする老翁あり。釋尊彼に向ひ、翁若しこの處の主たらば、此地を我に得させよ、佛法結界の地となすべしと宣へば、翁答へて申さく、我れ人壽六萬歳の始よりこの處の主として、この湖の七度まで葦原になりしをも、正に見たりし翁なり。さればこの地結界となるならば、釣する所なかるべしと深く惜み申せば、釋尊力なくして、今は寂光土に歸らんとし給ふ時に、東方より淨瑠璃世界の樂師如來忽然と出で給ひて、善哉々々、はやゝゝ佛法を弘め給へ。我れ人壽八萬歳の始より、この處の主な

れども、老翁未だ我れを知らず、焉ぞ此山を惜み申すべき。はや佛法を弘め給へ。我も此山の守護として、ともに五々百歳まで佛法を弘むべしとて、二佛東西に去り給ふ。其時の老翁は今の白鬚の大明神にてましゝける。東方よりの如來は中堂の樂師にてぞましゝける。釋迦樂師の東西に歸り給ひき。今の十郎と虎が行別るゝには違ひぬる心なるをや。蝸牛の角の上、何事をか争ふ、石火の光のうちに、この身を寄せつらん、名残の道盡くべからず、後世には參逢はんといふ中にも、道三郎が心も耻しとて、思切りてぞ別れける。虎は峠に手綱ひかへ、祐成の後姿の暮るゝまで見送りける。さてしもあらねば、泣くゝ大磯にぞ歸りける。母の許に入りしかば、友の遊君ども廣縁に出でて、思掛けざる今の御入かな、何時となき山路の寂しき、推測りてなど戯れけれど、虎は馬より下ると同じく、衣ひきかづき打臥しぬ。遊君ども集りて、何とて是程御歎き候ふやら



ん、十郎殿に捨てられおはしますかと、様々に慰め  
けれども、斯くといふべき事ならねば、唯打臥し泣  
き居たり。人々討たれての後にこそ、かくとは申聞  
かせられ。道三郎申しけるは、殿も今朝より御出あ  
るべきにて候、急ぎ御暇を申さんといふ。虎は彼を  
近く呼寄せて、三年が程馴れにし汝にさへ、別れな  
ん事もやあらんと思へばとて、袖を顔に押當てさめ  
ざめと泣きければ、道三郎返事にも及ばず涙を流し  
けり。昔が今に至るまで、主従の縁浅からぬことぞ  
とよ、構へて思ひ忘るな、二世までも朽ちせぬもの  
ぞといへば、道三郎暇乞ひて出でにけり。志は二世  
までも盡きせしとこそ覺えけれ。

### 十二 ぶつしやう國の雨 の事

されば縁により佛果を得る事を思へば、昔ぶつしや  
うこくに血の雨降りて國土紅なり。帝大に驚かせ

給ひて、博士を召して御尋ありければ、占象をひき  
申しけるは、今宵不思議の子を生むものあり、尋出  
だして遠き島に捨てらるべしと申しければ、舍衛城  
のうち、その夜子生みしもの千人なり。その中よ  
り選出だして見るに、口より燐吹出だす子を生みた  
る者あり。即ちこれを人まうとぞ名づけける。これ  
不思議の者として、官人に仰付けて島に捨てけり。然  
るにこの人まうは、やう／＼成人する程に、猛き鬼  
の姿になりけり。この島に来る者を洩さず取りて  
喰ふ。また國に罪ある者を此島に流せば、是をも取  
りて喰ふ。七萬二千人までぞ喰ひける。その罪盡し  
難し、佛これを感み給ひて、阿難尊者を使ひ奉りて、  
善知識たち引導し給ひけるとかや。人まうは阿難を  
七度見奉りし結縁に、七度天上に生じて佛果を得た  
りとなり。かやうの縁を思ふには、彼等が後世もな  
どや一つ蓮に生せざらん、頼しくぞ覺えし。さて十  
郎が心の猛きこと、四方にも聞えしかども、さしあ

たる恩愛の道には迷ふ習なり。實に夏の蟲の飛びて  
火に入り、秋の鹿の笛に心を亂し、身を徒になす  
こと、高きも卑しきも力及ばぬは此道なり。八つの  
苦の中にも、愛別離苦と書かれたり。内典外典にも  
深く戒め給ふとなり。

### 十三 嗟蛾の釋迦作り奉 りし事

さても五郎待遠なる折節來りて、此者を送りて今ま  
で時を移しぬ、如何に遅しと思ひ給ひけん  
と仰せける。五郎承つて、昔もさる事の候、釋尊  
の母の報恩の爲に忉利天に上り給ふ。帝釋聞き給ひ  
て、毗首羯磨といふ天人を下し給ふ。優填王悦びて  
栴檀にて如來を作り奉り、何を寫したる姿とも見え  
ずぞ作りける。優填王悦の餘に、毗首羯磨を止めら  
れければ、我はこれ善法の胎宮なり、留るべからず  
とて、遂に天に上りぬ。その像を玄奘三藏盜取りて

この國に渡し、多くの衆生を濟度し給ふ。今の嗟蛾  
の釋迦これなり。ましてや人間として、如何でか恩  
愛を思はざるべき。十郎聞きて大に違ふ心かな、優  
填王は利益方便の戀なれば、愚癡凡夫輪廻の執着な  
り、一つに非じと笑ひて、各々富士野の出立をぞ急  
ぎけり。



曾我物語卷第六終

曾我物語卷第七

一 千草の花見し事

それ迷の前の是非は、是非ともに非なり。夢の中の有無は、有無ともに無なり。されば我等が身の有様、あればあるが間なり。夢の憂世に何か現と定むべき。されば利那の榮花にも、心をのぶる理を思へば、無爲の快樂に同じ。いざや最期の眺して、暫し思を慰まんとて、兄弟ともに庭に下りて、植ゑおきし千草の榮えたるを、見るにも餘波を惜しかりける。心のあらば草も木も、いかでか哀を知らざるべきと、彼方此方に休ひけり。是によそへて古き歌を見るに、

古里の花のものをいふ世なりせば  
 いかにか昔のことを問はまし  
 今更思出でられて、情を残り哀をかけずといふ事なし。五郎聞きて、草木心なしとは申すべからず、釋

迦如來涅槃に入らせ給ひし時は、心なき植木の枝葉にいたるまでも、歎の色を現しけり。我等が別を惜み候ふやらん、いかでか知り候ふべきとて草を分けければ、卵の花の蓄みたるが一房落ちたりけり。十郎これを取上げて、いかに見給へ五郎殿、老少不定の習今に始めぬ事なれども、老いたる母留り若き我等が先立ち申さん事、是に等しきものを。開きたるは留り、蓄みたるは散りたるや、名にし負ふ忘草ならば、餘波を思ひてや散りつらん、それは昔住吉に、諸神影向なりける事あり。御歸を留め奉らんとて、此花を植ゑて忘草と名づけ給ひけるなり。歌に

もみぢては花咲く色を忘草  
 ひとあきながらふたまちのころ  
 その忘草は、紫苑とこそ聞きて候へとて、なほ草村に分入りければ、深見草の盛と咲きたるを見て、卵の花は蓄みてだにも散るに、此花の思ふ事なげにさ



かりなるや、いかに咲くとも、二十日草、盛も日數あるなれば、花の命も限あり、あはれ身にしる心かなと涙ぐみければ、五郎聞きて、此草の事は、花開落ちて千日同じく、一生の人誑すが如しと見えたり。これは樂府の詞なり、又歌にも、  
名ばかりは咲かでも色の深見草

花さくならばいかで見えまし

と口ずさみければ、十郎聞きて、此歌は未だ咲かざる時も、色深き草とこそ詠みたれ。盛の子には心や違ふべからんと戯れけるにも、哀を殘さぬ言の葉はなかりけり。無慙なりし志ともなり。さて我等が思立つ事、母に露程も知らせ奉るべきか、計ひ候へといひければ、時致聞いて、思もよらぬ御事なり、是程思定めざるさきは知らず、今はいかでか事變じ候ふべき。其上人の子が謀叛起して出で候はん、其親聞きて、急ぎ死にて物思はせよとて、悦ぶ母や候ふべき。某はた、御形見を給はつて、最期まで身

に添へ、此方よりもまた參らせて、罷出でんとこそ存じ候へ。十郎聞きて、實に此儀然るべし、さらば其序に、御分が勘當をも申許して見んとて、母の方へぞ出でたりけり。

二 小袖乞の事

十郎御前に畏り、扇笏に取り申しけるは、奉公を致し御恩蒙るべき身にては候はねども、末代の物語に、富士野の御狩の御供に思立ち候。恐入りたる申事にて候へども、御小袖一つ借し給はり候へと申しければ、母聞きて、君臣を使ふに禮を以てし、臣君に仕ふるに忠を以てすと、論語の中に候ふぞや、何の忠によつてか御感あるべきに、御恩なくば無益なり。あはれ此度の御供思止り給へかし、それをいかにといふに、伊東殿の父奥野の狩場より病づきて歸り、幾程なくて死に給ひぬ。御分の父河津殿狩場にて討たれ給ひぬ。かゝる事どもを思ひつゝくる

に、狩場程愛き所なし、しかも謀叛の者の末、上にも御許なきぞかし。又馬鞍見苦しくて物を見れば、却つて人に見らるゝものを、思留りて親き人々の方にて慰み給へ、加様に申せば小袖惜むに似たり、善くはなけれども、紋柄面白ければとて、秋の野に草盡縫うたる練貫の小袖一つ取出してたびにけり。十郎畏つて、障子のうちに著替へ、我が小袖をば打置きて出でぬ。亡きあとの形見にとぞ思ひおきたりける。五郎は不興の身に、兄が方に空しく泣居たり。よく、物を案するに、母の不興を許されずして、死なん事こそ無念なれ。推參して見ばや。生きたる程こそ仰せらるゝとも、死して後悔み給はんこと疑なし、思ひきり申して見んとて、母の方へは出でたれども、さすがに内へは入り得ず、廣縁に畏り障子を隔て、そも誰が御子にて候はん、時致にも召替の御小袖一つ賜りて、狩場の晴に著候はん。母聞きて、誰ぞや、來りて小袖一つといふべき

子こそ持たね。十郎は只今取り出でぬ。京の小次郎は奉公の者なり、二宮の女房は又かようにいふべからず、禪師法師とて乳の中より捨てし子は、叔父養育して越後にあり、又箱王とて悪者のありしは、勘當して行方知らず、是はた武藏相模の若殿原の、貧なる妻を笑はんとて斯く宣ふと覺えたり、然も留守居の體見苦し、早門の外へ出で候へと、事の外にぞ宣ひける。時致思切たることなれば、其箱王が參りて候。それは誰が許しおきたるぞ、女親とていやしみ候ふか、左様には候ふまじ、とても斯様に侮らるゝ身、七代まで不興するぞ、對面思も寄らずとぞ言はれける。五郎は許さるゝ事は叶はずして、結局後の世までと深く勘當せられて、前後を失ひ思にばうじ果てゝぞ居たりける。稍ありて小聲になりて申しけるは、斯様の身に罷成りて重ねて申上ぐべき事、上までは恐にて候へば、女房達心ある人あらば聞召せ、人の親の習、盜する子は憎からで、纏つく者を



恨むるは、常の親の習にて候ふぞや。母聞きて、左様ならん者を和殿が母にして、妾がやうなる者をば親とな思ひそとよ、人の言葉を重くせず、言葉を返すは善き子かとよ。御言葉を重くして、御返事を申さじとてこそ、御前の人々には申し候へ。左様に申すは返事にては無きか、一念の瞋恚には、具抵劫の善根をたき、刹那の怨がいに、無量億劫の苦報を招く、聞けばいよ／＼腹ぞ立つ、その座敷立ちてと宣ふ。恐れながら普門品をば遊ばし候はずや。いかなる観音の誓にも、掟を背く者を許し候へとは説き給はぬぞとよ。

三 しゃうめつ婆羅門の事

恐れながら、事長く候へども聞召され候へ。昔天竺にしやうめつ婆羅門といふ人あり。ものゝ命を千日に千殺して、悪靈に生れんといふ願を起し、はや九百九十九日に、て九百九十九人の生物を殺し、今日

に満する日、西山に上りて見れどもなし。曲江に下り船に乗り海中に出でて、比翼の龍を一つ捕りて害せんとなす。母是を悲みて渚に出でて見れば、波風高くして雲雷電おびたしき其中に、婆羅門龜を害さんとす。母これを見て、其龜放せ、汝が父の命日ぞ。婆羅門聞きて、忌日ならば沙門をこそ供養せめといひて、おさへて殺さんとす。龜涙を流して、我れ八十年後、かふたちこく大慈大悲二畢生安樂國とぞ泣きける。母これを聞き、汝龜の言葉聞き知れりや。知らずと答ふ。龜は罪深きものにて、萬劫の罪障を經盡し成佛すべきに、今劍にしたがはば、又多劫を經返す事の悲しさとなり、願くは其龜を放して、自らを殺し候へといふ。實に龜の命に代り給ふべきにやと言ひも果てず、龜を海上に投入れ、即ち劍を抜きて母に向ふ時、天神地神も是を捨て給へば、大地裂割れて奈落に沈む。母を殺さんとする子の命を悲みて、心ならず母走向ひて、婆羅門が鬚を取

り給へば、即ち頭髮抜けて母の手にとまり、其身は無限に沈みけり。されども龜を放せし功力によつて佛果を得、法花經の普門品に、婆羅門神と説かれたり。斯様の子をだにも、親は憐む習にて候ふものを。母聞きて、や殿それも母が云ふ事を聞きて、龜を放ちてこそ成佛はし給へ。汝何とて妾が教を聴かざるぞ。悪き子を思ふこそ、實の親の御慈悲にては候へ、又母の憐の深きには、事長く候へども、或國の王一人の太子の無き事を歎き、天に祈りし感應にや、后懷妊し給ふ。國王の悦斜ならず。されども三年まで生れ給はず。公卿詮議ありて博士を召して尋ね給ふ。勘文に曰く、御位は轉輪聖王たるべし、但し御産は平なるまじと申す。后聞き給ひて、賢王の太子いかでか空しくすべき、自が腹を裂破りて、王子を恙なく取出だすべしと宣ふ。大王大に御歎あつて許し給はず。后さらば干死にせんとして、食事を留め給ひしかば力なく大臣に仰せつけて、御腹を裂か

れにけり。その半に后仰せられけるは、太子の誕生いかにと問はせ給ふ。御恙なしと申せば、悦び給ふ色見えて打笑みたるま、御年十九にてはかなく成り給ひぬ。さて此太子御位に即き給ひしが、母の御志を悲み御菩提のため、三年胎内にて苦め奉りし日數千日にあて、千間に御堂を建て給ひけり。今のしかん寺是なり。日本には西の寺なり。さればにや后即ち成佛し給ふ時に、こんれんだいを傾け來迎し給ふ。其紫紺に準へて、藤を多く植ゑられたり。さてこそ藤の名所には入りたりけれ。母親の慈悲は斯様に候ひしなり。母聞きて、老いたる自らあはぬ教のむづかしくて、腹をも裂きて死に亡せよとな、汝も母と見ず、妾も子とも思はぬぞとて、障子荒らかにたて給ふ。時致は此度許し給はずしては、永劫を經るとも叶ふまじければ、五郎打捨て、

四 斑足王の事



仁王經の文をば御覽じ候はずや。昔天竺に帝一人ましますに太子おはしき。名をば斑足王と申す。外道等の教訓につきて、一千人の王の首をとり塚の神に祭り、其位を奪ひ大王にならんとて、數萬の力士を集めて、東西南北遠國近國の王城に、押寄せく擄捕り、既に九百九十九人の王を捕り、今一人足らで如何はせんといふ。或外道教へて曰く、是より北へ一萬里行きて王あり、名をばふみやう王といふ。是をとりて一千人に足すべしといふ。やがて力士を差遣し彼の王を捕りぬ。今は千人に満ちぬれば、一度に首を斬らんとす。こゝにふみやう王合掌して曰く、願くは我れに一日の暇を得させよ、故郷に歸り三寶を請じ頂戴し、沙門を供養して闇路の便にせんといふ。易き間の事として、二日の暇をとらす。其時王宮に歸り百人の僧を請じて、過去七佛の法より般若波羅蜜を講讀せしかば、その第一の僧ふみやう王の爲に偈を説く。こうせうしうみつ、けんこんこう

ねん、しゆみこかい、といけやうと述べ給ふ。ふみやう王此文を聞きて、四十二因縁を得たり。法華無くうを悟る。さればにや斑足王、諸法空の道理を聽聞して、忽に悪心を離して、取籠むる千人の王に曰く、面々の科にあらず、我れ外道に勧められ悪心を起す、不思議の至なり、今は助け奉るべし、急ぎ本國に歸り般若を修行して、佛道をなし給へ。即ち道心起して、無上ほうにんを得たりと見えたり。是もふみやう王を許してこそ、俱に佛果を得給ひしなり。母聞きて、其如く佛果を請じて、多くの人を助くべき汝、などや法師になりて妾をば救はぬぞ、實や重に従つて、道遠ければ休むこと地を選ますして仕へよとこそ、古き言葉にも見えたれ、何とて妾がいふ事を聞かざるぞ。五郎も思切りたる事なれば居直り畏つて、たゞ御慈悲には御許し候へとのみぞ申居たりける。十郎は我が所にて、五郎を待てども見えざりけり。餘に恐れければ、又母の方へ行きて見

たれば、五郎内までは入り得ず、廣縁に泣萎れて居たり。餘に無慚に覺えて、障子を引明け畏つて、五郎が理をつくく、と聞居たり。やゝありて、某兄弟數多候へども、身の貧なるによつて處々の住居仕る、たいあの者一人こそ連添ひては候へ。祐成を不便に思召され候は、御慈悲を以て御赦し候へかし、御子とても御身に添ふもの、我等二人ならでは候はぬぞかし。母聞きて、心にあふ時は吳越もらんでいたり、合はざる時は骨肉も敵たうたり、智者の敵とはなるとも、愚者の伴とはなるべからず、位の高からぬをば歎かされ、智慧の深からぬをば歎くべしとは、かん書の辭ならずや。十郎承りて、それはさる事にては候へども、觀經の文を見るに、諸佛念衆生、衆生不念佛、父母常念子、子不念父母と説かれて候。此文を釋すれば、佛は衆生を思召さるれども、衆生佛を思ひ奉らぬとこそ見えて候へ。親として子を思はぬは無きものをや。母聞きて、汝等は親のよきを

申集むるかや、いで又自ら子の孝行なる事をいひて聞かせん。孟宗は雪の中に箒を得、王祥は氷の上に魚を得、くわげんは眼を抜き、をんしやうは耳を焼き、ちそくは足を切る、せんめん舌を抜き、くわそくは齒をほどこし、くわうふめいは身を温め惜しき子を殺す、是皆孝行の爲ならずや。扁鵲もしんやくをしやうせざる病をば治せず、げんしやう王も善言の聞かざる君をば用ゐずとこそ申せ。人の詞を聴かざる者、何の用にかたつべき、其上不孝の者をば、同じ道をも行くべからず、急ぎ出でよとぞ云ひける。祐成重ねて申しけるは、一旦の御心を背き法師にならざるは、不孝には似て候へども、父母に志の深き事は法師によるべからず、僧俗の形にもよらず、時致箱根に候ひし時、法華經一部讀覺え、父の御爲にはや二百六十部讀誦す、毎日六萬遍の念佛怠らずして、父に回向申すと承り候へば、大地を戴き給ふ堅牢地神も、地の重き事は候ふまじ、不孝の者の踏む



跡、骨髓に徹りて悲み給ふなり。一つは彼の御跡をも弔ひ、一つは御慈悲を以て祐成に御宥し候へかし。父に幼少より後れ、親きは身貧に候へば目も懸けず、母ならずして誰か憐み給ふべきに、かやうに御心強くましませば、立寄る蔭もなきまゝに、乞食とならむこと不便に覺え候ふぞや。あはれ實に今を限と申すならばいかゞ安かるべきに、申すべき事ならねば、忍の涙に目もくれて、しばしは物をも言はずりけり。なほも宥すと宣はねば、十郎怒りて見ばやと思ひて、持ちたる扇さつとひらき、大に目を見出し、兎ても角ても生甲斐なき冠者、ありても何か益あらん、御前に召出だし、細首打落して見參にいれんと、大聲を出だして座敷を立つ。女房達驚き、いかにやとて取付く袖にひかれて、板敷荒く踏鳴し怒りければ、母も驚きすがりつき、物に狂ふかや殿、身貧にして思ふこと叶はねばとて、現在の弟の首を斬る事やある。それ程までは思はぬぞ、しばしや殿

とて取付き給ふ。事こそ善けれと思ひければ、助け候はん御宥し候へといふ。母、さらば宥す留り候へと宣へば、其時十郎怒を留めて、聲を柔にし座敷になほり、畏り居たりける。されども忍の涙のすゝみければ、とかく物を言はざりけり。五郎も恨の涙を引きかへて、嬉しさの忍の涙しきりにして、前後を更に辨へず、たゞ慎んでぞ居たりける。

五 母の勘當宥さるゝ事

やゝありて十郎座敷を立ち、御宥あるぞ時致、こなたへ参り候へ。五郎はしをるゝ袖に忍びかね、暫しは出でこそかねたりけれ。暫ありて時致袖打拂ひ顔押し出でければ、十郎も嬉しくあはれにて打傾き居たり。兄弟俱に物をも言はず、唯さめんと泣居たり。母此有様を見て、實にや親子の申程哀なる事なし、年老い身貧にして人数ならぬ妾が詞一つを重くして、泣きしをるゝ無慚さよ、片輪なる子をだにも

親は悲しむ習ぞかし、いかでか憎かるべき、たゞ善かれと思ふ故なりと云ひもわかで、母も涙を流しけり。其後兄弟の者ども畏り居たるを、母つくつくと守り、いつしかの心地して、汝自らを愚にや思ひけん、十郎がある處を見るに、五郎ありといふ時は心安し、無しと聞けば心もとなくて、妾も立ちて見るぞとよ。此三年が程打添はで、怨しく悔しく思はれてつくつくと見るに、直垂の衣紋、袴のききは、烏帽子のざしきに至るまで、父の思出でられ、昔に袖ぞしをれる。さて五郎は箱根にても聞つらん、十郎はいかにして經文をば知りけるぞや。祐成承り、馬疥せては毛長く嘶ふるに力なし、人貧にして智短く言葉賤し、何によつてか尊くも候ふべき。女房達聞きて、勸學院の雀とかや申しければ、母打笑みて、それゝ酒飲ませよとありければ、種々の肴盃取添へて、二人の前にぞ置きたりける。母取寄せ飲みて、その盃十郎飲む。その盃五郎三度ほ

して置きければ、その盃母取上げて、三年不興のこと只今宥したる印に、此盃思取にせん、但し親と師匠に盃さすは、必ず肴添ふなるぞ。當時鎌倉には、秩父の六郎が今様、梶原源太が横笛と聞く、されども他人なれば見もし聞きもせらればこそ、和殿箱根に在りし時、舞の上手と聞きしなり、忘れずば舞ひ候へかし。十郎腰より横笛取出し平調に音とり、いかに遅しと責めければ、暫し辭退におよびけるを、十郎唯立て、待ちければ、五郎扇ひらき斯こそ諺ひて舞うたりけれ。

君が代は千代にひとたび居る塵の白雲かゝる山となるまでと押返しゝ三遍踏みてぞ舞うたりける。其儘調子を踏替へて、

わかれのことにさら悲しきは、親の別と子の歎、夫婦の思と兄弟と、いづれをわきて思ふべき。袖に俯れる忍音を、かへして留むる關もがな。



と二遍せめにぞ踏みたりける。母は昔を思出づれば、彼等はさても憂き命、近きかぎりの涙の露、思はぬ他所目にとりなして、袖のかへしに紛らかし、しばし舞うてぞ入りたりける。かくて酒も過ぎければ、十郎畏つて、今度御狩に罷出で、兄弟が中に如何なる高名をも仕り、思はずの御恩にもあづかり候はば、幸塔婆の一本をも心易くきざみ、父聖靈に供へ奉らばやと存じ候。母聞きて、などやらん此度の御狩の御供、心許なく覺ゆるぞや、好き程にも候はば、思留り給へかし。さりながら衣裳の望もあれば、小袖惜むに似たり。それく女房達と宣へば、白き唐綾に鶴の丸とく縫ひたる小袖一つ取出し、十郎にも取らせぬるぞ、失はずしてかへし候へ、十郎は常に小袖を借りて返さず、これは曾我殿見知りたる小袖なり、一度とも見えすは、又例の子供にとらせたりと思はれんも恥し、小袖をしたゝめて置くべし、構へて疾く歸り給へとありければ、

承り候ふとて、練貫の著損じたるに脱更へ、見苦しく候へども、人にたび候へとてぞ置きにける。小袖の欲きにはあらねども、互の形見の更衣、袖なつかしく打置きけり。さても兄弟は座敷を立ちければ、母見送り宜ひけるは、過ぎにし頃十郎小袖を借り二度とも見せず、いかなる遊君にも取らせぬるよと思ひしに、さはなくして弟の五郎に著せけるぞ。又近頃大口直垂仕立て、取らせしを、是も二度とも見せざりしが、道三郎に著せたりと思へば、是をも弟に著せけるぞや。實に兄弟をば、野の末山の奥にも持つべかりけるものをや、父には幼くして後れ、一人ある母には不興せられ、貧なれば親にも疎くなり、有か無かの世になし者、誰やの人か憐むべきとて、涙をばらりと流し給ひければ、其座にありし女房達、俱に袖を濡しける。さて兄弟の人々は、我が方様に歸り、小袖を中におき、嬉しく推参しつるものかな、只今宥されずしては、多生劫を経るとも

叶ふまじ。生きて二度歸るべきやうに、小袖返せと仰せられつるこそ思なれ、何しに返せとは言ひつらん、神ならぬ身の悲しさよと、後悔し給はんこと今のやうに覺えたりとて、打傾きてぞ泣居たる。我等世にありて、心のまゝに親の孝養をも致さば、是程まで思はぬ事もありぬべし、此三年こそ不興の身にては候へ、それさへ戀しく思ひ奉りし折は、或時は物越にも見奉りて慰みしに、只今御宥を被り、一日だにもなくして出でん事こそ悲しけれ。死に給へる父を思ひて孝養せんとすれば、生き給へる母に物を思はせ奉る。されば我等程親に縁なき者はなし、後の世まで盡きせぬものは、たい手跡に過ぎたる形見はなし、今や我等一筆づつ忘形見を残さんとて、墨すり流しかくばかり、

今日出でてめぐり逢はずは小車の  
このわのうちになしと知れ君  
祐成生年二十二、後の世の形見とぞかきける。

ちゝぶ山下す嵐のはげしきに

えだ散果て、ははいかにせん  
五郎時致生年廿歳、親は一世の契とは申せども、必ず浄土にては參逢ふべしとこそ書きたりけれ。各々此所に入りて、我等討たれぬと聞き給は、此所に轉入りて伏沈み給ふべし、いざやこしらへ爲んとて、疊敷直し、めん廊の塵打拂ひ、先づ見給ふやうにとて、さしいりの障子の際にぞ置きたりける。空しき人をば常の所よりは出ださず、我等死人に同じとて、厩の空間より出でたりける。最後の文にこそ斯様の事まで書きにけれ。かくて出でけるが、いざや今一度母を見奉らんとて、暇乞にぞ出でたりける。母宜ひけるは、構へて人と誂し給ふな、世にある人は貧なる者をば、鳥濤がましく思ひ悔るべし、左様なりとも咎むべからず、三浦土肥の人々はさやうにはあらし、その人々に交り睦び給へ、心のはやるまゝに、人のあひつけたる鹿を射給ふべからず、公



方の御許もなきに、弓矢持たずとも出で給ふべし、謀叛の者の末とて、咎めらるゝ事もやあらん、いかにも事過し給ふな、年頃憎まれずしてや失せられたる曾我殿に、大事かけて恨かけ給ふなと、細々とぞ教へける。五郎は聞きても色に出ださず、十郎はかやうの教も今を限と思ひ、心の色も現れて涙ぐみければ、急ぎ座敷を立ちにけり。五郎も餘波に涙を押へかね、他所目にもてなし立ちけるが、妻戸の敷居に蹴躓きうつぶしにこそ倒れけれ。されども人目に漏さじとて、色ある小鳥の東より西の梢傳ひしを目かけ、思はずの不覺なりとて打笑ひける。母これを見給ひて、今日の道思留り候へ、門出悪しと有りければ、五郎立歸り、馬に乗る者は墜ち道行く者は倒る、皆人毎の習ぞかし、さればとて留り候はんには、道行く者も候はじと、打連れてこそ出でにけれ。五郎はなほ母の名残を慕ひつゝ、今一度とや思ひけん、扇は見苦しく候ふとて歸りにければ、母こ

れをば夢にも知らずして、折節扇こそなければとてたびにけり。時致これも形見の數と思ひ、母の賜りけるよと思へば、扇さへ懐しくて、開きて見れば霞に雁を書きたりける。折にふれなば夏山の、繁る梢の松の風、五月雨雲の晴間より、遠里小野の里つゞき、我等が道の行末もあらはるべきにさはあらで、その色違ふも理なり。憂身の上と案すれば、古き歌を思出でて、

同じくは空に霞の關もりて

雲路のかりをしばしとやめん

これは爲世卿の詠みし歌ぞかし。我等限の道を歎けども、誰ありて留むも者もなきに、扇心のあやらん、しばしといふ言の葉の詠まれたるかな。さても十郎が供には道三郎なり。五郎が供には鬼王その他四五人召具して打出でける有様、母は女房達引連れ廣縁に立出で見送り、さまざまにぞ宣ひける。直垂の著様、行膝の引合、馬の乗姿、手綱の取様、十

郎は父に似たれども、器量は遙の劣なり。五郎は鳥帽子のさしき、矢の負様、弓の持様に至るまで、穩なる躰父には少し似たれども、是も遙の劣なり。山寺にて育ちたれども、色白く尋常なり。我が子と思ふ故にや、いづれも清げなる者共かな。如何なる大將軍と云ふとも恥しからじ、あはれ世にあらば誰にか劣るべき、同じくは彼等をば、父諸共に見るならば、如何に嬉くありなんと、さめくゝとこそ泣き給ふ。女房達これを見て、ものへの御門出に、御涙いまはしと申しければ、實に彼等が貧なる出立、漫なる事とも思連ねられて、袖のみ昔にぬれ候ふぞや。げに千秋萬歳と、榮ふるべき子供の出立なり、嬉しくも言出し給ふものかな。此度御狩より歸りなば、上の御感被り、本領悉く安堵して、思の儘なる歸るさを、待つべきとこそ、急ぎ中にぞ入り給ふ。後に思合すれば、これぞ最後の別なりと、今こそ思知られけれ。哀なりし次第なり。

六 李將軍が事

さても鎌倉殿は、相澤ヶ原に御座の由聞えしかば、此人々も駒に鞭を添へて急ぎける。道にて十郎いひけるは、名残惜かりつる故郷も、一筋に思切りぬれば、心の引換へて先へのみ急がれ候ふぞや。時致聞きて、さん候、思ふ程は現、過ぐれば夢にて候。心のまゝに本意を遂げ、浮世を夢になし果て、早く浄土に生れつゝ、戀しき父名残惜かりつる母、かく申す我等まで、一つ蓮の縁とならんとて、引懸け引懸け打つて行く。やゝありて十郎申しけるは、我等が有様を物に譬ふれば、命々鳥に似たり。それを如何にといふに、大唐しくう山に雲深うして、春秋を分ざる山あり。其山に頭は二つ胴一つある鳥あり。彼の山には青き草なければ、食ふべきものなし、さればその左の頭、偶々餌食を求め服せんとすれば、右の頭ちうにて取奪うて食う。或時思ひけるは、所詮



毒の虫を求め、右の頭を退治せんと思ひ、毒の虫を求めいつもの如く服せんとす。彼の頭また奪うて食ふ。されば胴一つにてありぬれば、身もいかでたまるべき、遂に空なる。其鳥も明暮に、右は左を取らん、左は右をとらんとせしぞかし。我等も敵の手にやかゝらん、敵をや手にかけて思ふ憂身のながらへて、いつまで物を思はまし、此度はさりともと申しければ、五郎聞きて、弱き御警を仰せ候ふものかな、何によりてか空しく敵の手にかゝり候ふべき。本意を遂げて後は知り候はず、それは兎も角も候ひなん。事長くは候へ共、昔大國に李將軍とて猛く勇める武勇の達者あり。一人の子の無きこと天に祈る憐にや妻女懐妊す。將軍喜ぶ處に、女房言ふ様、生きたる虎の肝をこそ願なれ。將軍易き事とて、多くの兵を引連れ、野邊に出でて虎を狩りけるに、却つて將軍虎に喰はれて亡せにき。乗りたりけるうんしやうれうと言ふ馬、鞍の上空くして歸りぬ。女房

怪みて、將軍虎に喰はれけるやと問へば、れう涙を流し膝を折り泣けども叶はず。我が胎内の子は父を害する敵なり、生落ちなば捨てんと日數を待つ處に、月日に關守なければ、程なく生れぬ。見れば男子なり。何時しか捨つべき事を忘れ取上げ、名をかうりよくと付けてもてなしけり。名將軍の子なれば、胎内より父虎に喰はれけるを安からず思ひ、敵とるべき事をぞ思ひける。光陰矢の如し、かうりよく早七歳にぞなりにける。或時父重代の刀をさし、角のつきたる弓に神通の鐏矢を取添へ、腕に下り、父乗りて死にけるうんしやうれうに向つて曰く、汝馬の中の將軍なり、然るに父の敵に志深し、父の取られける野邊に我を具足せよと言ふに、馬黄なる涙を流して膝を折り高聲に嘶えけり。かうりよく大に喜びて、かのれうに乗り馬に任せて行く程に、千里の野邊に出でて、七日七夜ぞ尋ねける。八日の夜半に及びて、ある谷間に獸多く集り居たる其中に、臥長一丈餘

なる虎の、兩眼は日月を雙べたる様にて、紅の舌を振りて臥しければ、肝魂を失ふべきに、さる將軍の子なりければ、是こそ父の敵よと、矢取つて差番ひよつびいて放つ。過たず虎の左の眼に射立てたり。少し弱ると見えければ、かうりよく馬より飛んで下り、腰の刀を抜き虎を切らんと見ければ、虎にてはなくして、年經たる石の苦蒸したるにてぞありける。かやうの志にて遂に敵を討つ。今世の石竹と言ふ草、かうりよく射ける矢なりとぞ申傳へたる。されば弓取の子は七歳になれば、親の敵を討つとは此心なり。志により石にも矢の立ち候ふぞや。歌にもこの心を詠みけるにや、

虎と見て射る矢の石に立つものを

など我が戀のほらざるべき  
 十郎聞きて、や殿、歌物語心得ず、祐成如何なる鬼神なりとも、遁さじとこそ思ふぞとよ、など我が敵討たであるべきと語れかし、げにや折による歌物語、

悪しく申すと覺ゆるなり。歌は兎もあれ角もあれ、此度は敵討たんと易かるべし、老少不定の習なれば、もし我等敵に先立たば、悪靈ともなりて取るべき者をやと戯れつゝ、馬に鞭打ち急ぎけり。

七 三井寺の智興大師の事

十郎は足柄を越えて行かんと言ふ。五郎は箱根を越えんと言ふ。所謂あり。此三四年別當の呼び給へども、男になりける面目なきに見參に入らず、序に打寄りて御目に懸るべし、最後の暇をも申さんとて参りたりと思召さば、聖經の一卷も、陀羅尼の一遍なり共、弔ひ給ふべき善知識なり。其上、師の恩を重くすれば法にあづかる例あり。近き頃の事にや、園城寺に智興大師とてめでたき上人渡らせ給ひけり。顯密有驗の高僧と聞えけれども、未だ肉身を離れ給はざりける故に、重病に胃されて苦痛惱亂辨へ難し。即ち晴明を呼びて占はせけるに、定業限に



て助り給ふべからず、但し多き御弟子の中に、報恩を重くし命を軽くして、師の御命に代るべき人ましまさば、まつりかへんと申す。上人は苦痛の儘に、誰とは宣はねども御目を上げて、御弟子を見廻し給ふ。並居給ふ御弟子二百餘人あれども、我れ代らんと仰せらるゝ方一人も無し。目を互に見合せ、赤面し給ふ色現れにけり。轉かりし御事なり。爰に證空阿闍梨と申して、十八に成り給ふが末座より進出でて、我れ報恩の憐盡し難し、何とかして報じ奉るべき。我等が命なりとも代り奉る身なりせば、喜の上の喜何事かこれに如かんや、はや／＼と墨染の袖を掻合せ給ひて、清明が前に跪き給ふ。上人聞召し、惱める御毗に御涙を浮べさせ給ひて、御顔を振上げ本尊の御方を御覽じけるは、證の命を御惜ありて、御身は如何にもと思召さるゝ、御容顔顯れたり。これ又御慈悲の御志とぞ見えける。證空重ねて申されけるは、深く思定めて候、變すべきにも

候はず、其上上人の苦惱を見奉るに、刹那の間も惜くこそ候へ、御心に任すべきに非ず、急ぎ法會を行ひ祀を急がれ候へ。但し八旬に餘る母を持ちて候、今一度今生の姿を見々え候ひて歸り參るべし、暫時待ち給ふべしとて、暇謂うてぞ出で給ふ。證空阿闍梨を哀と言はぬ者はなし。その後母の許に行き、此事委しく語り給ふ。母聞きも果てず證空の袖に取付き、思も寄らず、師匠の御恩ばかりにて、母が憐を捨て給ふべきか。御身を残し、みづから先立ちてこそ順次なるべけれ。思ひもよらぬ例とて、證空の膝に倒懸り、涙に咽ぶ計りなり。證空は母の心を取静めて、よく／＼聞召せ、師匠の御恩徳には、何をか譬へて申すべき、はかなき仰とも覺えて候へ。はかなき母が生置きてこそ、尊き師匠の御徳をも蒙り給へ、母の恩大海よりも深しとは、誰やの人の言置きける。親は一世師は三世、淺き憐なり、知らせ給ふらん、何とて情はましまさぬぞ。今日の命を知ら

ぬ身の、恥をば誰か隠すべき、叶ふまじとて取付きたり。聞き給はずや、淨飯大王の御子悉多太子は、一人おはします父大王を振棄て、阿羅々仙人に宮仕し給ひしぞかし。それは生きての御別、是は死すべき別なり、喻にもなるべからず。御詞の重きとて、只今かくれ給ふ師匠をや殺し奉るべき。實に自らものならずは、暇を乞ひても何かせん、七生まで不興するぞと言はれつ、打轉び給ひけり。かくて證空進退こゝに極り、師匠の恩報を報じ奉らんとすれば、母の不興永劫にも遁れ難し。身の置所なかりければ、母の御前に跪き、不興の仰悲みても餘あり、奈落の責いつをか期せん、此世は假の宿なり、未來こそ實の住所にて候。師匠の命に代り奉らば、御迎にも參るべし、さあらば一つ蓮の縁にもなごかはならで候ふべき。思召しきり候へとて、餘波の袂を引分くる。母はなほも慕ひかね、さらば白をも連れて、一つ蓮の縁になし給へや、捨てられて老の身の何と

なすべきと、たい悲み給ふ。阿闍梨は母をなだめかね、斯様ならんと思ひなば、なかく申出すまじかりつるものを、又は母に暇申さずとも、思定むべかりつる事を、心弱くてかやうに憂目を見ることよ、惜み給ふも道理なり、唯一人ある子なり、一日片時も見奉らぬだに心元なくて、暇なき行法の間にさへ、心ならず思ひ見奉る事なし。見ゆること遅き時は、杖にすがり來り給ひて、跪き背後に立ち、夏は扇をつかひ冬は暖むるやうにした、め給ふ。これ然るべからずと申せども、幾程もなき自が心に任せてくれよと仰せられければ、上人も憐みありて、心に任せよと御慈悲あるによつて、片時も離れ給ふ事なし。我れまた御憐のもだしがたさに、間を計ひ見奉らんと通ひしぞかし。げにも今更別れ奉りなば、さこそ悲しくましまさめと思へば、涙もせきあへず。實に自ら亡せなば、やがても絶入り給ふべき志なれば、立つも立たれず居るも居られず、唯惘然として



泣くばかりなり。なほしも母はひかへたる袂を放さ  
で寄懸り、泣沈み給ひければ、袖ひきわき難くて、  
掌を合せ、自が申す道理よく、聞召し候へ、惜  
み思召さる、御事、僻事には存じ候はず、さりなが  
ら豫ても申し、如く、此世は夢幻と住みなし給へ、  
佛と申す事はほかになし、我がなす胸のうちに、明  
なる月輪の曇らぬを悟と申す、埋るゝを迷と申し  
候。されば佛は、衆生に善惡隔なきよし説きおかせ  
おはしますものを。然あらば親となり子となり、師  
となり弟子となる、これ皆一心の願により、三箇大  
事悉く阿字の一字にこそ收りて候へと怒りければ、  
母ひかへたる袖を少し緩しける處に、棄恩入無爲信  
實報恩謝の道理を具に説きければ、母涙をおさへて、  
さらばとて許しけり。證空は嬉しくて、急ぎ坊に歸  
りけり。實に孝行の程、天地衆類も憐を爲し給ふ  
べきにや。

八 泣不動の事

晴明進しと待ちし事なれば、七尺に床をかき五色の  
幣を立並べ、きんせんさんぐ数の供具、菓子を盛立  
て、證空を中にすゑて、晴明禮拜恭敬して、珠數さ  
らりと押揉み、上は梵天帝釋四天王、下は堅牢  
地神八大龍王まで勸請して、既に祭文に及びけれ  
ば、牛王の渡ると見えて、種々のさんせん幣帛、或  
は空に舞上りて舞遊び、或は壇上を跳廻る。繪像の  
大聖不動明王は利劍を振り給ひければ、其時晴明座  
を立つて、珠數をもつて證空の頭を撫で、平等大慧  
一乗妙典と言ひければ、則ち上人の苦惱さめて證空  
に移りけり。やがて五體より汗を流し、五臟を破り  
骨髓を碎く事いふに及ばず、是を見る人、晴明が奇  
特の貴さ、證空の志の有難さに、上下袖を絞るばか  
りなり。さて證空の頭より烟立つて、苦痛忍びがた  
かりしかば、年頃頼み奉る繪像の不動明王を睨み奉

り、我が二つなき命師命に奉ず、召取らしめ屍を壇  
上に留めんと、正念を住して、安養淨刹に迎取り給  
へ、即身ちがしんしや即身成佛、過ち給ふなと、一  
心の願をなしければ、明王哀とや思しけん、繪像  
の御眼より紅の御涙をはらりと流させ給ひて、汝  
貴くも報恩を重くして、一人の親を振捨て師命に代  
る志はうじても餘あり。我またいかでか汝が命に代  
らざるべき。きやうじやを助くる大聖明王の誓ひ  
地藏薩陀に限らず、受くるところの苦痛を見よと、  
新に靈驗顯れければ、明王の御頂より猛火ふすば  
り出で、五體より汗を流し給ふ。貴しとも恭しと  
も言葉にも云難し。すなはち證空が苦惱といまり、  
智興大師も助かり、證空も盟にあづかり給ふこと、  
有難かりし例なり。されば三井寺に泣不動とて、寺  
の寶の其一なり。泣かさせ給ひし御涙紅にして、  
御胸まで浮れかゝりて、今にありとぞ承る。實に  
師匠の恩斯様にこそ有難きものなれ。

九 鞠子川の事

箱根を忍出し時は、權現にも御暇を申さず、まし  
て師匠にかくとも申さざりし事、今にその恐残りて  
覺え候ふと申しければ、十郎もさてこそとて、箱根に  
ぞかゝりける。鞠子川を渡りけるが、手綱かいくり  
申しけるは、和殿三つ祐成五つの年より廿餘の今ま  
で、此川を一月に四五度づつも渡りつらん。如何な  
る日なれば、今渡果てん事の悲しさよ。などやらん  
何時よりもこの川の水濁りて候、心元なしと云ひけ  
れば、五郎申すやう、皆人の冥途に赴く時は、物の  
色變り候ふとな。我等が行くべき道、曾我を出づる  
は娑婆を別るゝにて候。此川は三津の川、ゆさかの  
時は死出の山、鎌倉殿は閻魔王、御前祇候の侍ども  
は獄卒阿防羅利、左衛門尉は善知識、箱根の別當  
は六道能化の地藏菩薩と念じ奉る。この川の水色變  
ると見えて候へとて、駒打入れけるが、稍ありて、